岩崎　純一　著

『岩崎純一全集』

第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

別添資料（旧スラフォーリアのブログ）

編纂、監修　　岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七)」

編集中。但し、内容は全て掲載中。

共感覚とは

公開: 05/28/2009 11:28:27

スラフォーリアの考案者である私純一は、共感覚者です。
以下の私のサイト・ブログをご覧下さい。

http://www.ij-art-music.com/
http://ij-art-music.sblo.jp/

アンケートの一例

公開: 05/28/2009 12:43:42

以下に、スラフォーリアの制作過程で、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性などに答えていただいたアンケートの一例を示す。
答えてみたい方がいらっしゃいましたら、どうぞメールにて回答をお送り下さい。

●以下の各文が、これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で（自然な日本語に感じられるように)、(　) に助詞「が・の・は・で・を・に・へ」の中から一文字ずつ入れて下さい。(複数回答可。「ない」という回答も可。)

私 (a) 移住する。
私 (a) 結婚する。
私 (a) 動揺する。
私 (a) 振り返る。
私 (a) 泣く。
私 (a) 転ぶ。
私 (a) 座っている。
家 (a) 建つ。
時間 (a) 残る。
私 (a) 扉 (b) 作る。
私 (a) 扉 (b) 閉める。
私 (a) 海 (b) 好む。
私 (a) 海 (b) 見る。

私 (a) 元気 (b) 出す。
私 (a) くしゃみ (b) する。
私 (a) 声 (b) 出している。
木 (a) 花 (b) 咲かせる。
風 (a) 花の香 (b) 運ぶ。
私 (a) 糸 (b) 張る。
私 (a) 犬 (b) 伴う。
私 (a) 悲しさ (b) 増す。
私 (a) 髪 (b) 巻く。
私 (a) 目 (b) 閉じる。
私 (a) 着物 (b) はだける。
私 (a) 紐 (b) 結んである。
梅 (a) 実 (b) 結ぶ。
寒さ (a) 厳しさ (b) 増す。

ウグイス (a) 鳴いています。
鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 好きです。
鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 好みます。
鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 好まれます。
鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 美しいです。
鳥の鳴き声では、ウグイス (a) 美しいと思います。

風 (a) 扉 (b) ひらく。
皆 (a) 扉 (b) ひらく。
二人 (a) 扉 (b) ひらく。
彼 (a) 扉 (b) ひらく。

別れ際、雨 (a) いっそう寂しさ (b) 増した。
別れ際、皆 (a) いっそう寂しさ (b) 増した。
別れ際、二人 (a) いっそう寂しさ (b) 増した。
別れ際、彼 (a) いっそう寂しさ (b) 増した。

●以下の文章を読んで、自然な解釈だと思われるほうを（　）内から選んで下さい。

「昨日、彼女は髪を切ったそうですよ。」「へえ、そうなんだ。どんな髪型だろう。」は、「（彼女・第三者）が（彼女・第三者）の髪を切った」ことを意味する文脈である。

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

「彼女はその物語に聞き入り、そっと目を閉じた。」は、
「（彼女・第三者）が（彼女・第三者）の目を閉じた」ことを意味する文脈である。

自閉症者とスラフォーリア

公開: 05/28/2009 13:26:30

心の理論

自閉症者に対して行われる心理テストに、次のようなものがある。これは、「心の理論」が自閉症者においては未発達であることを述べるために作られたが、スラフォーリアは、このような誤答を誤答とは見なさないとの立場に立っている。以下の問題に「正答」を出せる人は、言語学的に分析すると、「動詞を自動詞と他動詞とに区別できる人であること」、「能動態と受動態の区別ができる人であること」などと同義である。これには「自我」や「個」といった概念の確固たる自覚が必要となる。例えば、「サリーとアン課題」において、「サリーとアン」「サリーと私」「アンと私」が別個の西洋近現代的自我を持った状態にあることを「正しい」と見なすことで、一般健常者の回答が「正答」とされているにすぎない。

従って、私のように、「遠方から女性の体を目視しただけで排卵が分かる」という共感覚（女性の自我に自分がめり込んでいるように自覚される）は、本来の動物のオスには必要で、ヒトのオスのみが失っている能力であるにもかかわらず、自閉症者の能力と見なされる。

私純一の場合、サリーとアン課題は正答を答えられるが、共感覚や離人症が著しい日は、アイスクリーム課題に正答を答えることができない。他に、重度の共感覚者、自閉症者、性犯罪被害者女性にも、正答できない人がいた。スラフォーリアの文法は、このような社会的少数者を排除しない。

自閉症者は、「心」が未発達だから正答できないのではない。「心の過剰」（自我が未成立で、他我までをも自我の範疇と見たり、二人の他者を一つの自我と見たりする）のために正答できないのである。

●サリーとアン課題

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

『サリーとアンの二人が部屋で遊んでいる。サリーは、自分のおはじきをかごの中に入れて部屋を出る。アンは、サリーが出ていった後、そのおはじきをかごから取り出して、自分の箱の中に隠す。部屋に戻って来たサリーは、まず、どこを探すだろうか？』

自閉症者の約 80%は、「サリーは事実を知らないから、最初にかごを開けてみる」ということが予測できずに、「アンの箱をさがす。」と答える。

●アイスクリーム課題

『メアリーとジョンは公園にいた。ジョンはアイスクリームが欲しくなったが、お金がなかった。アイスクーリム屋が、「ずっと公園にいるから、家からお金を持っておいで」と言ってくれたので、ジョンは家に帰った。しかし、アイスクリーム屋は気が変わって、メアリーに「公園で待つのはやめて教会へ行く。」と言ってそこを立ち去った。ジョンは、たまたまおじさんに会って、アイスクリーム屋が教会に移動することを教えてもらった。一方、メアリーはジョンの家に行き、ジョンはもうアイスクリームを買いに出かけたと知った。この時メアリーは、ジョンはどこへアイスクリームを買いに行ったと考えただろうか。』

正解は公園であるが、自閉症者は教会と答えてしまう。つまり、ジョンがどう思っているかについてのメアリーの誤解を認知できないという結果になる。

性犯罪被害者女性とスラフォーリア

公開: 05/28/2009 13:36:11

共感覚は、生まれたときには全ての人が持ち、それが成人しても意識の上で自覚されている人が特に「共感覚者」と呼ばれるわけであるが、稀に特別な体験（性犯罪被害や極度の鬱）をきっかけとして、幼少期に失った共感覚が蘇ることがある。

以下に、Y さん（20 代女性）にスラフォーリアを用いて心の傷が軽減した例を、会話口調で分かりやすく示す。性犯罪被害者女性や重度の自閉症者、共感覚者の世界認識がいかなるものであるか、ぜひ関心を持って頂ければ幸いである。

（症状）
被害後、自分の体（自我）と他人の体や物体との区別が付かなくなった。そのため、ぬい

ぐるみが机から落ちたり、好きな本が破れたりすると、自分の体が強姦されたと認識する。

●「スラフォーリアの発想と制作方法」でも挙げた質問を Y さんに解いてもらうと、やはり一般女性とは異なる回答を示した。

「私で扉がひらく」「私で扉をひらく」（自我の傍観、自分の道具化）
「風で扉をひらく」（自然を操る自我、自我と自然との一体化）

●ここで、その助詞の使い方を許し、名詞と動詞だけで Y さんと会話する。（「私、扉、ひらく」「風、扉、ひらく」のように。）

以下が、Y さんとの会話に使った例。（助詞を入れてもらうと、「私で扉が作る」「私が花が見る」などという文を作るわけである。Y さんには、例えば「私で花を見る」と「私が花を見る」との区別が付いていない。）

「私、扉、作る」「私、扉、閉める」「私、花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●少し心の傷が治ってきたところで、スラフォーリアの「具格」を Y さんに教える。
「動詞が指す動きを引き起こす人や物が、相手の人や物を全く違う形に変えてしまうような場合には、「んで」を付けてみよう。」

「私んで扉、作る」「私、扉、閉める」「私、花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●さらに、慣れてきたら、スラフォーリアの「及格」を教える。
「人や物が、相手の形を工具などを使って改変するわけではないけれど、直接手足を使って移動したり圧力を加える動きであるときには、「で」を付けてみよう。実はこの「で」は、日本語でも道具や手段を表すんだよ。」

「私で扉、作る」「私で扉、閉める」「私、花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、スラフォーリアの「希格」を教える。
「人や物が、相手の人や物を見たり聞いたり触ったりしたときに、作用を与えるだけでなくて、心が動くときにも、「んの」を付けてみよう。」

「私んの扉、作る」「私んの扉、閉める」「私んの花、好む」「私、花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、スラフォーリアの「能格」を教える。
「他の人や物があって初めて成り立つような動作の場合、その動作主に「の」を付けよう。日本語にも、「私の好きな人」などの形で残っているんだよ。」

「私の扉、作る」「私の扉、閉める」「私の花、好む」「私の花、見る」「私、泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、スラフォーリアの「意格」を教える。
「動作主が、意志を持ったり、意識の上でできるようなことには、「んが」を付けよう。「笑う」や「泣く」がそうだね。」

「私んが扉、作る」「私んが扉、閉める」「私んが花、好む」「私んが花、見る」「私んが泣く」「私、転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、スラフォーリアの「活格」を教える。
「無意識、不随意的に起こってしまうことにも、何か目印を付けよう。今度は「が」だ。」

「私が扉、作る」「私が扉、閉める」「私が花、好む」「私が花、見る」「私が泣く」「私が転ぶ」「私、座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、スラフォーリアの「主格」を教える。
「行為・動作だけでなく、状態を表す文にも目印を付けよう。今度は「が」のままにしておこう。それから、動作主と動詞以外に対象となる名詞がある文には、対象の名詞に「を」を付けてみよう。」

「私が扉を作る」「私が扉を閉める」「私が花を好む」「私が花を見る」「私が泣く」「私が転ぶ」「私が座っている」「家、建つ」「時間、残る」

●次に、主格と対格とが、現代社会では明確に区別されることを教える。
「残りの二文にも、思うように目印を入れてごらん。」

「家が建つ」「時間が残る」

「そう。さらに、それぞれの前に「私」を入れるとどうなるだろう。」

「私で家が建つ」「私で時間が残る」

「そう、その通り。さらに、さっきと同じ過程を辿っていくと、この二文はどこに行き着くかな。」

「私が家を建つ」「私が時間を残る」

「そう。でも、こういうとき、周りの日本人は「建つ」を「建てる」、「残る」を「残す」と言うんだよ。」

「私が家を建てる」「私が時間を残す」

「そう。日本の古語では、「私が家を建つ」でも正解なんだ。「我、家を建つるとき、」などと言える。「残る」は、直前が「を」のときは、比較的昔から「残す」となるんだ。ここで、もう一度、最初の二文に、意味を考えながら、目印を入れてみよう。」

「私が扉をひらく」「風で扉がひらく」

「そう！　自分の体と他の自然物との区別が付いていなかった頃は、Y さんの頭の中では一文目の「私」と二文目の「風」が同じはたらきをしていて、どちらも生き物のように感じられていたよね。性犯罪だけでなく、鬱や脳卒中でも、全く同じことが起こることが知られている。それが、今は、一文目の「私」と同じはたらきをしているのは、二文目の「扉」のほうだ。これらを周りの日本人は「主格主語」などとややこしく呼んでいる。それから、「自分・自我・自己意識」と「他人・他我」とが区別できるようになることと、動詞のはたらきが二パターンあると感じられることは、同義であることが分かるよね。実は、一文

目の動詞を「他動詞」、二文目の動詞を「自動詞」と、現代社会は呼んでいる。」

●以上のような作業を根気よく繰り返し、Y さんは今では、元の日本語を使えるほどに立ち直った。このように、私は、「動作主と対象者との区別が付かない」、「自動詞と他動詞の区別が付かない」、「確固たる西洋近代的な自我や個人なる概念が認識されない」といったことを、言語障害や文法違反などではなく、人類が成長過程や歴史の過程で繰り返してきた普遍的な世界観であり、それをさかのぼってしまった人の存在を全面的に認めることが重要であると見ている。

性犯罪被害者女性においては、被害をきっかけとして、その全ての過程を一気に昔にさかのぼってしまうことがある、というのが、私の考えである。すなわち、スラフォーリアは、そのような「症状」を「治す」という発想自体に懐疑的な立場をとる。

スラフォーリアが理解できる人のタイプ

公開: 05/28/2009 18:58:11

現代日本語よりも英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・オランダ語などの現欧米先進諸国語が理解しづらく、ただし、現代日本語でさえ外国語のように感じている（「自分にとって最良の外国語は日本語である」という自覚のある）現代日本語の母語話者のうち、

言語活動に支障のあるほどの強度の共感覚を持っていたり、自閉症・離人症を抱えているなど、いわゆる一般健常者に該当しない人

または、

虐待被害・性的被害による失語症など、後天的精神的裂傷によって知能が幼児退行・古代化して、現代日本語や現代英語が話せなくなった人

以下に、私が実際に交流を持ち、スラフォーリアの言語観がすぐに理解できた人の抱える感性・症状を列挙しておく。

★男性

●言語障害を伴うほどの共感覚者
●自閉症
●アスペルガー症候群
●解離性障害
　離人症

★女性
●言語障害を伴うほどの共感覚者
●自閉症
●アスペルガー症候群
●性犯罪被害者・性的虐待被害者
●幼児期・児童期虐待被害者
●解離性障害
　離人症・解離性同一性障害・解離性健忘・解離性昏迷・解離性遁走
●不思議の国のアリス症候群
●強迫性障害・広場恐怖・会議恐怖
●コタール症候群
●カプグラ症候群
●閃輝暗点を抱える女性

もっとも、私の言語自体が効果をもたらしたと言うよりは、このような人たちが求めている言語観を実際に説明してくれる実体験者（私）がいたことによる安心感・喜びが症状を軽減したという意味では、スラフォーリアはそのための手段にすぎない。

格標示と動詞活用形の対応一覧

公開: 05/28/2009 20:42:36

●現代日本語文「彼女が花を摘む」（主格、他動詞）のスラフォーリアにおけるバリエーション

彼女花摘むん。（空格心描言、空動詞）（識格心描言、識動詞）
彼女花摘むい。（空格抽化言、空動詞）（識格抽化言、識動詞）
彼女花摘むあ。（空格抽出言、空動詞）（識格抽出言、識動詞）

彼女んで花摘むん。（具格心描言、具動詞）
彼女んで花摘むい。（具格抽化言、具動詞）
彼女んで花摘むあ。（具格抽出言、具動詞）

彼女で花摘むん。（及格心描言、及動詞）
彼女で花摘むい。（及格抽化言、及動詞）
彼女で花摘むあ。（及格抽出言、及動詞）

彼女んの花摘むん。（希格心描言、希動詞）
彼女んの花摘むい。（希格抽化言、希動詞）
彼女んの花摘むあ。（希格抽出言、希動詞）

彼女の花摘むん。（能格心描言、能動詞）
彼女の花摘むい。（能格抽化言、能動詞）
彼女の花摘むあ。（能格抽出言、能動詞）

彼女んが花摘むん。（意格心描言、意動詞）
彼女んが花摘むい。（意格抽化言、意動詞）
彼女んが花摘むあ。（意格抽出言、意動詞）

彼女が花摘むん。（活格心描言、活動詞）
彼女が花摘むい。（活格抽化言、活動詞）
彼女が花摘むあ。（活格抽出言、活動詞）

彼女が花摘むあ。（主格抽出言、他動詞）

彼女が花を摘む。（主格常観言、他動詞）

スラフォーリアの根本思想（２）

公開: 05/28/2009 22:49:23

■スラフォーリアの根本思想

★スラフォーリアは、例えば、次のような思想・言語観を検証することを目的とする。

●重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・離人症性障害者などの世界認識は「反主格言語的」である、との拙説を言語学的に検証すること。

●サピア・ウォーフの仮説は、少なくとも「弱い仮説」一つを取っても、近現代西洋人及び近現代日本人においては一見すると「真」であるが、それが「真」であることは、西洋一神教的人間観において生じた「健常者」が最近数百年間の先進社会では大多数を占めていることのみによって保証されるものであり、「沈黙の言語」ないし幼児期（母語習得以前）の世界認識の記憶を持つ我々重度の共感覚者や自閉症者（例えば、「赤」「red」なる単語を獲得する前からこの色を見ていた（まぶしいな、と思考していた）時期の記憶がある我々）にとっては、「思考は言語に先立つ」ことは自明であり、また人類・動物に普遍の知覚世界は「五感」ではなく「共感覚」であることを自然言語の分析によって実証すること。

●さらに、現在でも能格的構造を残す言語社会においては、共感覚者や自閉症者の割合が高く、また障害者とも見なされない可能性を検証すること。

●また、「前母語的世界認識は、すでに母語的である」ということをも同時に実証すること。その母語性を保証するものは、和辻哲郎の言うところの「風土」に他ならず、日本においては日本の風土であることを、共感覚や自閉症の観点から実証すること。すなわち、「赤」なる日本古語単語は、その色が指していた領域が、日本語の獲得以前から日本の原始人の幼児に知覚されていなければ生じないのであり、この拙説が真であることを検証すること。

●人類にとっての「普遍文法」があるとするならば、それはむしろ共感覚者や自閉症者の知覚世界に基づいて「能格言語的」さらに「前能格言語的」に記述されなければならず、チョムスキーの生成文法は近代西洋社会で生じた「健常者」なる概念に該当する人間の世界認識しか記述し得ないこと。すなわち、西洋の言う「普遍文法」は、「西洋特化型の孤立文法」でしかないこと。また、人類は進化の過程で、人類総共感覚者・総自閉症者の時代を通過した可能性を、言語学的手法によって実証すること。

●「自我」の不安定なあり方が、人類以外の動物にとっては普遍的であることを検証すること。

●私が持つ、遠方から女性の排卵や月経を感知する共感覚能力も、他の共感覚と同様に男性に普遍的なものであったのならば、その共感覚を喪失する前の日本人男性の用いていた言語において、この対女性共感覚が記述されていなければならず、それがまさに平安時代の「にほひ」「かをり」「ね」までは続いていたであろうことを検証すること。例えば、「に

ほひ」は、女性の視覚的魅力と嗅覚的魅力とを同時に表しうる。このような造語法をスラフォーリアに適用し、あえて現在の一般日本人男性の矮小化した対女性性的能力との区別化を行うことで、男性に普遍であったこの能力を一般日本人男性に言語によって伝達可能かを検証すること。

●スラフォーリア独自の日本の古典解釈を確立すること。

■スラフォーリアの最終目的

このプロジェクトは、現代英語をはじめとする現代欧米先進諸国語の文法に従って記述される現代日本語に対して我々日本人共感覚者、性犯罪被害者女性、離人症者、自閉症者らが有している違和感を解消する言語としてスラフォーリアを共有し、その世界観を語らうことを目指す。

■母語である現代日本語に対するスラフォーリアの位置付け

●このプロジェクトは、スラフォーリアが、我々社会的少数者の生活において、母語である現代日本語にとって代わることを目的としない。スラフォーリアが、最終的には、我々社会的少数者にとって、現代日本語に対する平安日本語・江戸日本語に該当する位置を占めること、現代日本人が急激な西洋文明化の過程で切り落とした日本に固有の言語感覚を記述する第二の日本語の位置を占めることのみを目指す。

考案者：純一
サイト：http://www.ij-art-music.com/

スラフォーリアの歴史

公開: 05/28/2009 22:55:25

●共感覚全般　★スラフォーリア

1982～1990 頃

★幼少期の遊戯の中で、玩具の人形（レゴブロック）に自作の言語を話させ、架空の物語を創作したことが初め。小学校に入り、頭の中で一定の整った言語となる。
●成長につれて、周りの友人との感性の落差に悩む。文字や音に色が見えたり、音楽に匂いがしたりする。

1995
●中学入学。英語の文法に強い違和感を覚える。周辺の生徒との知覚世界の差に悩む。女性の排卵感知能力がより目立つようになる。

2001
★東京大学入学。フランス語・スペイン語などの文法に物足りなさを覚える。
●哲学書・思想書を読む。東洋思想・仏教にふける。

2002
●自らの特殊な感覚・感性が「共感覚」であることを初めて知る。共感覚者・自閉症者らとネット上での交流を始める。

2004
●東京大学中退。和歌を本格的に始める。

2005
●共感覚の研究を始める。色々な古形言語や言語学を独学。

2006
★創作言語をスラフォーリアと命名。
★この言語が、失語に陥った性犯罪被害者女性一人に通用することを確認。

2007
●都内の寺社で共感覚の簡単な講演をする。
●共感覚者・閃輝暗点者・自閉症者の集い「空木会」をひらく。以後、不定期に現在まで続ける。
★重度の共感覚者女性・性犯罪被害者女性たちとの実際のやり取りによって、スラフォーリアの精度が増す。
★現代英語・現代日本語の話せない知的障害・自閉症の共感覚者男性一人に通用することを確認。

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七)」

2008
★解離性同一性障害者（多重人格）女性一人に通用することを確認。
★重度の共感覚者女性一人に通用することを確認。
●他の共感覚者主催の共感覚者の集いに参加。
★脳卒中の日本人男性一人に通用することを確認。

2009
★文法の体系化・整理を開始。
★失語に陥った性犯罪被害者女性に通用することを確認。

格詞

公開: 05/28/2009 22:59:31

■格詞

日本語と大きく異なる格体系を持つ。格なる概念も、スラフォーリアにおいては便宜的に持ち出された文法概念にすぎない。「空格」及び「識格」は、それぞれ仏教用語の「空」と唯識思想の「識」に由来する。

空格（くうかく）　無しφ
識格（しきかく）　無しφ
具格（ぐかく）　ンデ
及格（きゅうかく）　デ
希格（望格）（きかく・ぼうかく）　ンノ
能格（のうかく）　ノ
意格（いかく）　ンガ
活格（かつかく）　ガ
絶対格（ぜったいかく）　無しφ

主格（しゅかく）　ガ

考案者の情報と思想的立場

公開: 05/28/2009 23:54:08

岩崎純一（1982 年生まれ）

東京大学教養学部中退。
共感覚者・個人共感覚研究家。
アスペルガー症候群（高機能自閉症）。
閃輝暗点や不思議の国のアリス症候群などの症状も持つ。
和歌・書道・東洋思想・神道・仏教愛好家。

仕事の合間に、これらを探究する日々で、時々共感覚者の集いをひらいています。普段は言語と言うより、共感覚・哲学・東洋思想・日本史・政治などの本ばかり読んでいて、言語学は独学です。

私個人としては、いわゆる保守的な政治思想や文化観・宗教観を持っている傾向がありますが、朝鮮語・中国語も含めて、世界のあらゆる文化・言語が好きであり、このスラフォーリア・プロジェクト自体も、いかなる政治イデオロギー・新興宗教・オカルト思想とも無縁です。勘違いされることも多いのですが、そのようなご連絡はご遠慮下さい。

実現はともかく、私個人の思想としては、日本語についてはかなり保守的であり、正字体・正仮名遣いの復活論者、及び小学校からの英語教育反対論者です。そのためか、スラフォーリアの表記法自体は、かなり難解なものになっています。

宮沢賢治はかつて、作品中の理想郷を、故郷岩手をエスペラント風にもじった「イーハトーヴォ」と名付けながら、一方では、日本語への極度の愛着や国粋思想（国柱会での活動など）を保ち続けました。全世界的な言語観と国粋的な言語観とは、実は表裏一体で、「古き良き日本的なもの、共感覚的なもの、自閉症的なもの」が「世界的なもの」であった時代が人類にはあったとの確信が、宮沢賢治にはあったと私は思います。

私にとって、スラフォーリアの目的とは、「イーハトーヴォ」に当たるもの、現代日本語が切り落としたものを、あくまで共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性らとの実際の数十人規模の交流の中で、再び表現することです。

私の共感覚体験や文化観、言語観などについては、メインサイト・メインブログをお読み下さい。

http://www.ij-art-music.com/
http://ij-art-music.sblo.jp/

動詞

公開: 05/28/2009 23:55:27

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

未然・連用・終止・連体・已然・命令の六つに活用する。既存の日本語の動詞は、古語を基礎として、全てこれらの活用を持つ。（動詞活用表参照。）
スラフォーリアの動詞においては、自動詞と他動詞の区別が消滅する。

「触る」
（サファル、表記はサハルやサワルでもよいが、発音はサファルと平安日本語に準ずる。）
順に、
動作主が取る主な格
対象者が取る主な格
未然、連用、終止、連体、已然、命令

●●常観言（じょうかんげん）
（現代日本語における動詞の概念と同様である。）
主格
対格
サファラ、サファリ、サファル、サファル、サファレ、サファレ

●●通観言（つうかんげん）
（これ以下は、重度の共感覚者や自閉症者の知覚世界を表現しうる。）

●抽出言（ちゅうしゅつげん）
（「触ることをする」「触るということをする」「接触する」「五感のうちの触覚をおこなう」に該当。現代日本人は、「触る」と「ということ」とを結び付けたり、音読み漢語「接触」

を用いたりして、英語の touch を表現するが、重度の共感覚者、自閉症者はこれが困難である。そこで、そのような抽象概念のほうを特殊化して、動詞の活用で表す。「サファルア」で「周りの現代日本人健常者の言う接触なる概念をおこなう」を一挙に表現する。）

主格
対格
サファラア、サファリア、サファルア、サファルア、サファレア、サファレア

●抽化言（ちゅうかげん）
（抽出言と心描言の間の概念を表す。心描言を抽出言化しようとする、精神的過程に伴う心労自体を活用形で表現しうる。例えば、ある軽度の自閉症者で、共感覚者でない人の場合、心描言のニュアンスが分からないが、抽化言から常観言までは理解できた。また、抽化言と心描言では、主語が主格を取らず、目的語が目的格（対格）を取らない。従って、抽化言と心描言を動詞に持つ文は、現代英語や現代欧州語に翻訳できない。）
空・識・具・及・希・能・意・活格
絶対格
サファライ、サファリイ、サファルイ、サファルイ、サファレイ、サファレイ

●心描言（しんびょうげん）
（共感覚者・自閉症者は、この活用を用いて、自由に共感覚や動物に近い知覚世界の表現を許される。例えば、「音を触る」共感覚を持つならば、「音サファルン」として、共感覚者どうしのみに通じる表現を許される。すなわち、「サファルン」は、抽象概念の「触る」ではないと同時に、五感の「触る」でもない。）
空・識・具・及・希・能・意・活格
絶対格
サファラン、サファリン、サファルン、サファルン、サファレン、サファレン

名詞

公開: 05/28/2009 23:55:49

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

形容詞

公開: 05/28/2009 23:56:14

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

形容動詞

公開: 05/28/2009 23:56:35

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

副詞

公開: 05/28/2009 23:57:27

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

連体詞

公開: 05/28/2009 23:58:00

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

接続詞

公開: 05/28/2009 23:58:24

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

助動詞

公開: 05/28/2009 23:58:51

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

助詞

公開: 05/28/2009 23:59:12

語彙のほとんどは日本語に準ずる。一部、スラフォーリア固有語あり。

態

公開: 05/29/2009 00:16:07

スラフォーリアは、能動態と受動態の区別を持たない。代わって、中我態（ちゅうがたい）を設ける。

スラフォーリア上級解説（１）
上級解説（１）（必須基礎知識）
公開: 05/29/2009 18:40:52

共感覚者である私純一は、最近 5、6 年ほど、個人で在野において共感覚を探求してきた。多くの共感覚者・自閉症者たちとお会いし、集いをひらいたり、寺社で共感覚の講演をさせていただいたり、異質と言えばそうだが、あらゆる観点から重度の共感覚者・自閉症者や性犯罪被害者女性が陥った独特の世界認識と向き合った結果、ライフワークの一つとして、言語というものを考えたいと思うに至った。

スラフォーリアの発想や世界観を今の日本の一般健常者が理解するためには、まずは共感覚・自閉症などについての知識は最低限なければならない。これらについては、私のメインサイトを参照されたい。
http://www.ij-art-music.com/
http://ij-art-music.sblo.jp/

次の項から、スラフォーリアの発想と世界観についての解説を始めたい。

スラフォーリア上級解説（２）
上級解説（２）（世界認識の連続体）
公開: 05/29/2009 19:05:31

脳卒中については誰でも知っているに違いないが、脳卒中でいかなる言語障害が起こるかについては、あまり一般には知られていないと思う。そして、それと同様の言語障害が、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者でも起こることを、まずは説明しておきたい。これは、私が実際にそれらの方々と向き合ってきて、見出したものであった。

「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた。」
「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた。」●
「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちょ、かぶ、かぜが吹いてきた。」●

「何の花が好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ。」
「何に花の好きかと聞かれても、すぐには答えられないですよ。」●

「今日は久々に母とＡさんと外食して、電車で帰ってきました。」
「今日は久々に母、Ａさん、外食、で、電車、帰ってきました。」●

これら●は、性犯罪被害に遭ったあとで幼少期の共感覚が蘇った、ある女性が発した文章である。このようなことは、脳卒中患者の間では広く知られている。以下の他サイトを参照されたい。

http://stkenshikai.fc2web.com/shitsugoshoh.htm
http://www.geocities.jp/hiichan39/tsugihagi.st5.html

この中で、例えば、運動性失語・伝道失語と呼ばれる症状では、単語（特に名詞）自体が言えなくなる。これは、ほとんど脳卒中患者ばかりに起こるが、重度の共感覚者・自閉症者ではそれが日常的に起こり、性犯罪被害者女性でもしばしば起こる。

ここから、まず、「共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性らは、すでに日常的に、脳卒中患者の言語認知・世界認識を生きている可能性がある」という発想が出てくることがお分

かりいただけると思う。共感覚は、幼児期、あるいは原始人類なら、全てのヒトが持っていたと言われる。この両方が正しいとすれば、「脳卒中患者は、まずは、より新しい言語認知から失われ、古形言語に前戻る形で言語障害を呈する」、あるいは「性犯罪被害者女性は、被害の衝撃のあまりに、女児や過去の女性の言語認知にさかのぼる」という可能性があることになる。

このことは、私のような重度の共感覚者にとっては証明するまでもなく分かっていることであったが、これを実証的に示し、言語化することが、私のような「言語障害なき重度の共感覚者」には可能ではないか、それによって私が接してきた性犯罪被害者女性たちが助かるような活動はできないだろうか、というのが、スラフォーリア制作の契機であった。

スラフォーリア上級解説（３）

上級解説（３）（現行の言語学の格解釈への疑問）

公開: 05/29/2009 20:11:20

　スラフォーリアは、現代欧米的・現代日本的競争社会に要求される抽象的思考を、全くうまく記述し得ない。
一方で、この言語は、性犯罪被害者女性の陥った心理状態をほぼ記述し得る。あるいは、自閉症者の男性の知覚世界をも記述し得る。そして、知的障害のある重度の共感覚者の知覚世界をも記述し得る。すなわち、「言葉にならない何ものか」（それはすなわち、古語では「言葉」であったにもかかわらず、現代日本語では「言葉にならなくなった何ものか」）を再び「言葉」にしてしまう言語がスラフォーリアであると言える。

　一般に「格」とは、名詞や名詞句が文の中でいかなる関係性を持つかについての標識であると説明される。格標識の形だけで見れば、現代日本語が主格・対格言語（略して主格言語）であることは疑いようもない。

主格言語
名詞（主）＋自動詞。（例：春が来る。）
　名詞（主）＋名詞（対）＋他動詞。（例：私が花を見る。）

　主格言語においては、自動詞の主語と他動詞の主語とが同じ格標識（主格）で、他動詞の目的語が別の格標識（対格）で表される言語である。現代日本語において、「が」は主格、「を」は対格である。
英語においては、主語の存在は明白であるから、この主格言語の定義は疑われようがなく、

むしろこの説明に合うように人為的に文法が構築されているとさえ言えようが、日本語においては果たして動詞の自他の区別の前提、主語の存在の前提が正しいかどうかについて、三上章をはじめとして、多くの議論がなされてきた。三上は、動詞に関しては、所動詞と能動詞の分類を立てたが、のちに破棄した。以来、日本語に主語はあるのか、動詞にいかなる分類があるのか、あるいはないのか、諸説乱立で、結論は出ていない。
主格言語とは異なる文法を持つ言語があることは古くから知られたが、今日では能格言語と呼ばれている。

能格言語
名詞（絶）＋自動詞。（例：春β来る。）
　名詞（能）＋名詞（絶）＋他動詞。（例：私α花β見る。）

　能格言語においては、自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格標識（絶対格）で表され、他動詞の主語が別の格標識（能格）で表される言語であると説明される。絶対格は、多くの場合、無標である。しかし、全ての言語に主語が存在するとの説を支持しない場合は、「自動詞の主体と他動詞の対象が同じ格標識になる」との説明になるし、自動詞と他動詞の分類を支持しない場合は、「ある分類に属する動詞の主語は、別の分類に属する動詞の目的語と同じ格標識を受ける」との説明になる。能格言語で特に知られているのは、グルジア語及びバスク語である。

　グルジア語では以下の通りである。

(1) k’ac-ma k’ar-i da-xur-a. 「男が扉を閉じた」
男-能 扉-絶 閉じる：過
(2) k’ar-i da-i-xur-a. 「扉が閉じた」
扉-絶 閉じる：過

　このとき、主語としてはたらいているのは、絶対格のほうであるということに注意しなければならない。
　能格言語の母語話者がいかなる世界認識を持っているかを、今の一般日本人が知るには、次の文を参考にするとよい。

　男（　）扉（　）閉じる。
　風（　）扉（　）閉じる。

　一般の非共感覚者の日本人は、これらの文を見たとき、のちに説明するように、まず瞬

時に、「有生物」と「無生物」という、主格言語話者に特徴的な世界認識によって主体を峻別し、動詞もそれに合わせて、「男が（は）扉を閉じる」と「風で扉が（は）閉じる」というように、前者の「閉じる」を他動詞、後者のそれを自動詞に無意識のうちに分け、「風」を具格「で」で標識する。ところが、能格言語話者や我々共感覚者には、これらの「男」と「風」、二つの「閉じる」に区別はない。

そして、実際には現存する多くの能格言語が、ある時制、ある相などにおいては必ずしも能格言語の性質を示さず、絶対格が他動詞の主体を標識したり、能格が自動詞の主体に波及したりするのである。

たとえば、グルジア語では、自動詞であっても能格をとることがある。

a. k’ac-i [主] i-mušav-eb-s 「男が働く」（未来）
b. k’ac-i [主] muša-ob-s. 「男が働いている」（現在）
c. k’ac-ma [能] i-mušav-a. 「男が働いた」（過去）
d. k’ac-s [与] u-mušav-i-a. 「男が働いた」（完了）

どのような自動詞が能格をとるのかを以下に示す。

【能格の項をとる自動詞】
tamaš-ob-s 遊ぶ pikr-ob-s 考える
lap’arak’-ob-s 話す sauzm-ob-s 朝食をとる
i-cin-i-s 笑う nerviul-ob-s 心配する
mğer-i-s 歌う locul-ob-s 祈る
cxovr-ob-s 住む cek’v-av-s 踊る
cura-ob-s 泳ぐ i-ğviZ-eb-s 起きる
t’ir-i-s 泣く i-Zin-eb-s 眠る
【能格の項をとらない自動詞】
k’vd-eb-a 死ぬ xd-eb-a …になる
t’q’d-eb-a 割れる i-ğl-eb-a 疲れる
rč-eb-a 残る、留まる e-lod-eb-a …を待つ
i-ğ-eb-a 開(あ)く e-xmar-eba …を手伝う、助ける
vard-eb-a 落ちる dg-eb-a 立つ
i-zrd-eb-a 育つ jd-eb-a 坐る
tb-eb-a 温まる mi-d-i-s 行く
i-k’arg-eb-a 失くなる ar-i-s …である、いる、ある

意志的、能動的な行為を表す動詞は、能格をとりやすいことが分かる。このように、能

格言語性がある条件において成り立たない現象を、言語学では「分裂能格性」と呼んでいる。

さらに、近年、特にクリモフらの内容的類型学では、これまで能格言語の一種とされてきたアメリカ・インディアンの言語などが、別の類型に属するとされており、日本では活格言語と訳されている。
活格言語では、自動詞が主に二つの分類（非能格動詞と非対格動詞）を受け、非能格動詞の主語が活格を取るとされる。

活格言語
名詞（不活）＋自動詞。（例：春β来る。）
名詞（活）＋自動詞。（例：鳥α飛ぶ。）
名詞（活）＋名詞（不活）＋他動詞。（例：私α花β見る。）

だが、研究者によって見解が千差万別であり、能格言語と活格言語が、主格言語よりも古形であって、現在の少数民族言語に偏って見られることは研究者には把握されているようであるが、「あらゆる人類の自然言語は、能格言語→活格言語→主格言語と変化する」と主張する者もいれば、「活格→能格→主格と変化する」と主張する者もいて、定まらない。筆者は、前者の説を概ね支持しつつも、これまでに挙げてきた「主格言語」「能格言語」「分裂能格性」「活格言語」といった類型論、あるいは自動詞と他動詞、非能格動詞と非対格動詞といった分類が、全て主格言語母語話者による他言語解釈でしかなく、これらの概念それぞれに不備があることを、このたびの共感覚者の世界認識に関する研究が、示しているかもしれない。

スラフォーリア上級解説（４）
上級解説（４）（格の実証的再編）
公開: 05/29/2009 20:21:05

私は、現代一般の日本人の男女と、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性との世界認識の差異を調べるため、多くの質問を行ってきた。その中から一つ、代表的なものを挙げてみたい。

次の各文の（　）内に、助詞「は・が・の・を・に・へ・で」の中から一つずつ自由に選んで、(a)と(b)に記入し、文を完成させて下さい。「何の助詞も入れない」との回答も含むと

します。また、使わない助詞があっても構いません。これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で、自由にご回答下さい。
（実際の実験では、以下の文を不規則・順不同に出題した。各文の番号は、筆者があとからこの論文のために付加したもの。）

(1-1) 私 (a) 移住する。
(1-2) 私 (a) 結婚する。
(1-3) 私 (a) 動揺する。
(1-4) 私 (a) 振り返る。
(1-5) 私 (a) 泣く。
(1-6) 私 (a) 転ぶ。
(1-7) 私 (a) 座っている。
(1-8) 家 (a) 建つ。
(1-9) 時間 (a) 残る。
(2-1) 私 (a) 扉 (b) 作る。
(2-2) 私 (a) 扉 (b) 閉める。
(2-3) 私 (a) 海 (b) 好む。
(2-4) 私 (a) 海 (b) 見る。
(2-5) 私 (a) 元気 (b) 出す。
(2-6) 私 (a) くしゃみ (b) する。
(2-7) 私 (a) 声 (b) 出している。
(2-8) 木 (a) 花 (b) 咲かせる。
(2-9) 風 (a) 花の香 (b) 運ぶ。
(3-1) 私 (a) 糸 (b) 張る。
(3-2) 私 (a) 犬 (b) 伴う。
(3-3) 私 (a) 悲しさ (b) 増す。
(3-4) 私 (a) 髪 (b) 巻く。
(3-5) 私 (a) 目 (b) 閉じる。
(3-6) 私 (a) 着物 (b) はだける。
(3-7) 私 (a) 紐 (b) 結んである。
(3-8) 梅 (a) 実 (b) 結ぶ。
(3-9) 寒さ (a) 厳しさ (b) 増す。

この実験により、一般の男性、一般の女性、共感覚者の男性、共感覚者の女性それぞれにおいて、ある一定の傾向が見受けられることが分かった。

まず、先の実験で得られた回答のうち、最も一般的であった回答を示す。

（リンク作成中）

回答は、「これまでに獲得した母語に照らして違和感を覚えない範囲内で」との条件を付けており、例えば「私の泣く（とき）」（この場合、「の」でも自然に感じる）などの特殊な場合は除外されているため、上の回答は単文における現代日本人の助詞の使い方の典型例であると言える。

一般の男女の傾向は明確である。現代の一般の日本人においては、ほとんど例外なく主格が「が」と「は」、対格が「を」であると認識されていることが分かる。（「は」は副助詞であるが、ほとんどの現代日本人には、格機能と認識されているようである。）そして、対格を取るのは、いわゆる他動詞(2-1)～(2-9)であると認識されている。(1-1)～(1-9)は自動詞である。(3-1)～(3-9)の動詞は、(b)が「が（は）」の場合は自動詞、(b)が「を」の場合は他動詞である。このように、自動詞としても他動詞としても形が変わらない動詞を、ここで筆者は原動詞と名付けることとする。現代日本語ではここに挙げた「張る」「はだける」「結ぶ」など、もはや数が少ない。（筆者の言う原動詞は、言語学において能格動詞と呼ばれるが、この名称が不適切であることをあとで示す。）

(3-1)～(3-9)は、その動詞が原動詞であるがために、回答者はそれを自動詞か他動詞のどちらかに振り分け、(a)の部分も「私は」「私の」と巧みに調整したのである。

こうして、現代の一般日本人においては、もし主格が「が（は）」ではなく「α」、対格が「を」ではなく「β」という助詞であったとしても、「時間α残る」「私α花β見る」という文法を外れないだろうという予測が付く。従って、主格を表す助詞ないし接尾語を（主）、対格を表すそれを（対）とすると、現代の一般日本人の言語認識は次のようになる。

名詞（主）＋自動詞。（例：春が来る。）
名詞（主）＋名詞（対）＋他動詞。（例：私が花を見る。）

今日では、このように、自動詞と他動詞の主語が主格で、他動詞の目的語が対格で標識される言語を、主格・対格言語（略して主格言語）と呼んでいることを先に示した。現代日本語は、基本的には主格言語であると言われるが、それは今回の筆者の実験が示した一般日本人の世界認識において、少なくともそうであると言える。現代の一般の日本人には、(1-1)～(2-9)の例文において、属格標識とされる「の」（「私の手」など）を用いる箇所、(1-1)～(3-9)の全ての文において与格・向格標識とされる「に」や「へ」（「あなたに」「図書館へ」など）及び具格標識とされる「で」（「電車で」など）を用いる箇所は、一か所もないと判

断されていることが分かる。

スラフォーリア上級解説（５）
上級解説（５）（前言語～能格）
公開: 05/29/2009 20:31:08

これに対して、重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性の回答を見ていくのであるが、そのためには、共感覚者の回答を先の一般日本人のそれとは異なる仕方で整理する必要がある。それを示したのが、参考資料の「格に関する質問の回答」である。ここには、先の一般日本人の回答も重ねて組み込んである。（参考資料の「格に関する質問の回答」）

●(A)前言語、(B)擬音・擬態言語、(C)無格（空格）言語
(A)から順を追って詳細に見ていこう。一般日本人の世界認識と最も対極にあるのは、むろん、筆者が出した質問文そのものが理解できない段階にいる人、重度の言語障害を持ち、生活する上で必ず他者の特殊な助けを必要とする人の世界認識であることは言うまでもない。回答が得られなかったのだから、助詞の使い方によってこれらの人々の世界認識を分類することはできないが、おおまかに見て、次の三段階に分けられることが分かった。すなわち、

(A)言語らしき言語を全く発すること、解することのできない人
(B)擬音語・擬態語に当たる言葉のみを発する人
(C)他者の名前や物体の名称を話すが、まだ名詞や動詞といった品詞の区別は認識されない人

である。むろん、これらはこの論文のための便宜上の分類であって、(A)～(C)は連続的であり、この段階に属する人たちには、名詞や動詞や助詞といった分類が認識されていない点で共通している。

この(A)～(C)の段階を、それぞれ(A)「前言語」、(B)「擬音・擬態言語」、(C)「無格（空格）言語」と名付けることとする。(A)は、今の我々が「言語」と呼ぶような言語を全く持たないという意味で「前言語」とした。(B)は、いわゆるオノマトペと呼ばれる音声語や「あ～」や「う～」といった音声のみが見られる言語障害者の世界認識の段階である。(C)は、周辺の同民族が話す言語の音韻組織（日本語なら清音や濁音、朝鮮語なら平音・激音・濃音、欧州語なら有気音・無気音など）に基づく、明確な単語を話してはいるが、「文法」なる概念によって単語どうしが結び付いていない言語障害者の世界認識である。

●(D)識格言語

さて、(D)以降になると、筆者の質問文の意味を理解し、自由に助詞を当てはめていく意志が共通して見受けられるようになるのであるが、助詞の当てはめ方について、この(D)以降に興味深い傾向が現れる。

まず、文全体や動詞がいかなる意味を持とうとも、ここに属する共感覚者らは全ての文の主体に全く同じ格標識を与えていることが分かる。換言すれば、「の」や「で」が、それぞれ属格や具格などといった意味を持たず、ただ単語どうしをつなげる役割を果たすものと認識されていることが分かる。

そして、(D)のような回答を示したのは、男性・女性とも、質問の意味は理解できるが、外出がままならない、重度の共感覚者であった。軽度のレット症候群・コタール症候群・カプグラ症候群の女性も、この(D)の回答を示した。

そこで、こういった重度共感覚者の言語認識世界における日本語の「φ」「の「で」「を」「が」「は」など、「つなぎ」の役割それ自体を、今、仮に「絶対格」と名付けることとする。また、このように、単語を絶対格で接着剤のようにつなげていくだけの言語、すなわち(D)の段階の共感覚者の世界認識にそぐう言語を、「識格言語」と名付けることにする。なぜならば、共感覚が重度であっても、質問文の意味、筆者の説明に対する理解や、いわゆる「単語」や「絶対格」と、それ以外の音声（鳥の鳴き声などの自然音）とが異なるものであるとの認識は、本人たちに存するからである。

●(E)具格言語

次に(E)であるが、この段階には、文(X-1)の主体のみに、「の」や「で」などの特別な格標識を付した回答者を分類した。この特別な格を含む文の動詞を見てみると、人体以外の何らかの道具や手段を用いて行う行為を表していることが分かる。現在の一般的な生活から考えて、「扉を作る」「移住する」行為は、道具や交通手段を用いて行う人為的行為であり、対象そのものが変化をこうむるか、別の対象を指すようになる（木材が扉に変化する、場所が別の地点に変わる、など）。しかし、「扉を閉める」「結婚する」場合、対象である他者や物体自体に何らかの変化が起こるわけではない。

そして、このような回答を示した共感覚者を調べると、女性の場合、ある程度の自力での社会生活が可能な女性がいたのに対し、男性の場合、社会生活における支障の程度が(A)～(D)の男性とほとんど変わらなかった。

そして、そういった道具や手段を用いて対象に変化を与える行為の主体を、これらの共感覚者は、主格であるはずの「が」や「は」だけでなく、「の」や「で」など、実に様々な助詞で標識したわけである。これらの共感覚者の世界認識においては、(X-1)のような行動をとるときの主体である「私」のみを、(X-2)～(X-9)の行動をとる「私」と区別することが目的であって、「私α」「私ポ」などという格標識でもよいことになる。「で」でも「が」でも「を」でも、とにかく何か「工具や交通機関や文明の利器を使って対象や自然環境を改

変している、この私」という標識さえあれば、助詞は何でもよいと認識されている。
　そこで、このような(X-1)の「私」を、そうでない「私」や「動植物」や「物体」から区別する文法を持つ言語段階を、「具格言語」と呼ぶことにする。

●(F)及格言語
次に(F)であるが、この言語段階では、(X-1)だけでなく(X-2)の主体である「私」にも特殊な格標識をしようという意志が見受けられた。ここでは、人工的な道具や手段の使用・不使用にかかわらず、他者や対象物に直接的に変化・影響を及ぼす行為を行う主体「私」に、格が与えられることになる。
そして、ここに属する共感覚者も、女性の場合のみ、共感覚の程度が(E)よりは軽く、ある程度の社会生活が可能であることが分かる。男性は、いまだほとんどが知的障害を持っている。
そこで、このような言語を、「及格言語」と名付ける。ここでも絶対格には、「で」や「が」など、どんな助詞でも入り得る他、無標識であってもよいことになる。
　現在の言語学の世界には、「具格」という用語はあり、またそれは現代日本語においては「で」とほぼ一致するが、「及格」なる用語はなく、また、今回の「及格」の概念を表す適切な助詞一文字が見当たらない。しかし、主格言語である現代日本語を母語としていても、世界認識はこの及格言語段階を保っている共感覚者がおり、それは女性に多いであろうという事実、そしてそのような女性が「及格」を一般的な属格「の」や具格「で」を借りて表現しようとする意志は、回答の分布によく見てとれる。

●(G)希格言語
ここでは、「作る」「閉める」「好む」ときの「私」は格標識されるが、「見る」「泣く」ときなどの「私」は標識されず、未だ絶対格で示される。すなわち、行為に利益や被害、好悪や希望・非希望の感情が伴うか否かで「私」が分けられるのである。
この段階になると、女性ではほとんど言語生活に支障がないのに対し、男性ではなお、ほぼ言語障害者や自閉症者と呼ばれている範疇であることに注目すべきである。
この段階を「希格言語」と呼ぶこととする。この言語段階の「私」についても、現代日本語の助詞一つでうまく表せないが、強いて言うなら、「から進んで」であろう。それを、現代日本語の「の」「で」「を」に託して表現しようとする腐心が、回答からうかがえる。

●(H)能格言語
　(X-1)～(X-4)の主体に特別な格を付けるということは、すなわち、「他者や対象に向かって可能な行為」に格標識が付く。自らが希求・要望せずとも可能である行為を示す。「好む」ことは自ら望んで行うことであるが、「見る」行為は、視覚としての「見る」能力がある限り、希求の有無には関係がない。従って、道具や、他への直接的影響や、希求を伴わなく

とも、対象となる他者や物体が存在する限り可能であるような、いわゆる「五感動詞」が指す行動は全てここに含まれると考えてよい。一方、「笑う」や「泣く」など、目的語を伴わない動詞は、いまだ格標識を受けない。

この言語段階のように(X-1)～(X-4)の「私」に格標識を付けた女性になると、ほぼ社会生活に支障がないことが分かる。一方、男性では、未だに社会生活に支障が見られた。筆者の世界認識・共感覚世界はこの段階にあるが、こうして自らの体験を言語化でき、現代日本語での日常会話にも特に困難がない男性は、この段階においては極めて稀有であると思われる。

そして、この言語段階を「能格言語」と名付けることとするが、実は言語学では「能格」も「能格言語」も存在する言葉であり、少し異なった意味に使われている。主格言語や活格言語に当てはまらない言語を、全て能格言語とするのが、現在の言語学の主流であるが、共感覚者である筆者や、今回の筆者の実験からすれば、それらの定義は甚だ不鮮明・不適切である。（能格言語は、「自動詞の主語と他動詞の目的語を絶対格、他動詞の主語を能格で標識する言語）」と定義されている。）私の場合、共感覚者の回答というデータを用いて、いわゆる能格言語を「具格言語」から「意格言語」までに、より正確に分けたことになる

スラフォーリア上級解説（６）

上級解説（６）（意格～主格）

公開: 05/29/2009 20:32:22

●(I)意格言語

この段階では、(X-1)～(X-4)の動詞群だけでなく、「笑う」「泣く」「叫ぶ」などの、主体のみで行う再帰的な動詞が加わった動詞群、すなわち、まとめて意志動詞と呼ぶことができる動詞の主体に格標識が付くことが分かる。「～を見る」「～を聞く」「～を嗅ぐ」といった五感動詞で示されるような、目的語を伴う人類の能力（いつでも発揮できる知覚能力）のみならず、「笑う」「泣く」といった自動詞的な、自分の内側のみに向かう行為や状態の主体にも格標識が付される。

この段階の回答を示した共感覚者女性では、話し言葉を聞いている限りでは、世界認識が一般の非共感覚者と異なっていることは、全く分からないと言ってよい。私が聞いてもそうであった。さらに、大勢の人前での発言や、公的な場での活動・集団活動が可能な女性が、この段階から現れる。男性においてはなお、言語コミュニケーション上の問題があるため、外見上からも分かるほどであった。

この意志動詞に対する主体を格標識する段階を「意格言語」と呼ぶこととする。あえて現代日本語の助詞に当てはめるなら、「から」であろう。

●(J)活格言語

ここでは、(I)に属する動詞群に加えて、非意志的な自動詞も特別に格標識されるようになっている。非意志動詞、不随意動詞で示される行為や状態が追加されるのである。「作る」「閉める」「好む」「見る」「笑う」などは、意志的に行えることであるが、「転ぶ」ことは、意志とは無関係に起こることであって、その場合の主体は、未だ絶対格標識に終始するのである。「座る」であれば、随意的に可能な行為であるから(J)のグループに入るのであるが、「座っている」は状態であり、(K)に入る。すなわち、主体が活動体であるか、または活動的な行為を行う場合にのみ、新たな格を表す接尾語ないし助詞で標識されるのである。

この段階になると、共感覚者女性に加えて一般の女性の回答も見られ、両者の世界認識に大きな差は見られなくなる。この段階においても、なお言語に支障がある可能性の高い我々重度の共感覚者男性とは、対照的な結果である。

そして、この段階を、「活格言語」と呼ぶことにする。「活格」と「活格言語」という用語も、言語学において存在するが、これについても、その不正確さをあとで検証する。ただし、主体が活格をとる場合、対象がとる格は「不活格」と呼ばれることが多い。従って、これまで絶対格と書いてきた格を、便宜上、筆者も不活格と呼ぶことにする。

活動体と不活動体は、一見、有生物と無生物（植物と抽象概念を含む）との対立のように思えるが、(J)ではまだ、不活動の有生物、すなわち状態動詞（「座っている」など）の主体は、不活格（絶対格）をとる。

●(K)主格言語Ⅰ

さらに「座って・いる」「立って・いる」などの状態動詞（日本語ではこのように複合動詞となることが多い）非行為動詞、までが特別に格標識され、主体に立つか立たないかが、明確に人間・有生物か無生物かで区別されるようになる。そして、これら(X-1)～(X-7)の主体が取る格こそ、主格と呼ばれるものであって、一方で(J)で不活格と呼ばれた格は、ここで対格と呼ばれるものになる。ここにおいて、一応の「主格言語」が完成するのである。

そして、女性では、共感覚者だけでなく、一般の女性の回答が見られるが、男性においては、未だ共感覚者のみである。

ただし、この初期段階の主格言語は、未だ「家」や「時間」といった無生物や抽象概念が主格よりも対格をとりやすく、「家が建つ。」とは言わず「家を建てる。」が主流であるため、「主格言語Ⅰ」としておく。

この言語段階で何よりも重要なのは、自動詞と他動詞という概念が初めて成立することである。項を一つだけ持つ（すなわち主語のみを伴う）動詞が自動詞、項を複数持つ（例えば、主語と目的語）のが他動詞である。この段階に至って初めて、例えば「残」という意味が「残る」と「残す」とに分化するのである。ただし、「建つ」（現代では「建つ」と「建てる」）のように、日本語では近世までは、未だ自動詞と他動詞の終止形が同形である動詞が多く、少なくとも動詞に関しては、日本語は近世までは、主格言語に成り切ってい

なかったと言えるのである。

●(L)主格言語Ⅱ

(K)の段階と比べて、形のある無生物が主格として扱われるようになった段階が(L)である。ここには、無生物を主語にとる動詞が含まれる。「建つ」は、「家」「建物」「小屋」などの無生物名詞を主語にとる。「壊れる」「光る」「よどむ」などもここに含まれる。しかし、抽象概念が主格をとることは、まだほとんどない。抽象概念語彙の発達は、当然、その言語話者の社会の文明の程度と関係するから、日本では江戸時代末期までは、この(L)の段階に達しようがないのである。

この段階の言語認識を示す共感覚者女性は、すでにほとんどいない。代わりに、初めて一般男性の中から、この段階に属する人が現れる。

この言語段階を「主格言語Ⅱ」と名付けるとする。現代日本語は、主体の性質に関係なく、あらゆる名詞が主語に立って主格をとり得るし、動詞もほぼ自動詞と他動詞との対立構造となっているため、次の(M)や(N)に属すると言ってしまってよいのであるが、明治時代の日本語では、「時間」や「会議」などという抽象概念が主語に立つことが現在よりも少なかった。例えば、今でこそ、「私が笑う」も「家が壊れる」も「時間が過ぎる」も、同様に使う日本人であるが、「私」「家」といった人体や具体物に比べて、「時間」「原因」「競争」「会議」などといった抽象概念は、本来は日本語では主語に立ちにくい。「会議が終わる」などは、元は英語をはじめとする西洋語の翻訳によって夏目漱石らの手で生まれた文体であって、近代初期までは「会議、終える」と言うのが普通であった。近代日本語は現代日本語に比べて、(X-1)～(X-8)に該当する名詞は主格をとり、(X-9)の名詞は未だ対格をとりやすい段階にあったと言えることになる。従って、(L)の段階は、明治・大正・昭和日本語が辿ってきた段階と言える。

●(M)主格言語Ⅲ

この段階では、もはや(a)の助詞は「が」「は」「の」、(b)の助詞は「を」「は」「が」のみであり、また全ての(a)が主格をとる（抽象概念も主格をとる）ようになっている。

この段階に属する共感覚者は、一人の女性のみであって、一般の男女が主流となる。この段階を「主格言語Ⅲ」とする。

●(N)主格言語Ⅳ

そして、最後に(N)の段階において、主格＝「が・は」、対格＝「を」という、冒頭にも示した厳格な主格・対格言語の文法構造が成立するのである。共感覚者を除くほとんどの一般の男女が、ここに含まれる。

日本語においては「私」「扉」は名詞、「が」や「は」や「を」は助詞という別分類であって、この主格言語Ⅳではその意識が保たれているが、「私が」「私は」「扉を」という厳格な

構造は、表面上はひと固まりであって、「私で」「私に」などを取る共感覚者の世界認識の反映を許さない文法となっており、ほとんど英語の「I open the door.」の「I」「the door」の機能との一致を示している。この段階を「主格言語Ⅳ」とする。

●(O)主格言語Ⅴ
今回の日本人による回答とは関係がないが、(N)の段階からさらに、主格＝「が」、対格＝「を」というように、格機能と助詞とが一対一で対応する規則が強固になった場合、どのような文法構造が成立するかを考えてみる。すると、現代英語や現代欧州語のように、「私」を「が」とつなげて、一単語としてしまうことが考えられる。もっとも、このような傾向は、すでに主格言語Ⅱの段階から見られ始める。

ここでは、「が」以外の格標識の使用は文法違反であると見なされるし、そもそも「が」以外の格標識を使いようがない。
例えば、英語の「I」は、「私」ではなく「主体である私が」であるし、「my」も、「私」ではなく「所有者である私の」である。「I love you.」を「My love your.」と言うと、誤りであることになる。名詞と格機能は強固に結び付いており、逆にそれらを別々に使うことがないがために、そのような文法が可能となるのである。英語圏の幼児は、「My love your.」などの「間違い」を通過して育つことが知られる。このようなことは、日本人には今でも当たり前のことである。

言い方を変えれば、日本人共感覚者の世界認識を正確に表現し得る文法構造は、現代欧州語にはもはや存在しないと言ってよい。従って、現代英語では特に、語順の固定が、主格言語性と同義である。
「flowers」は「花」であるが、「Flowers produce seeds.」（花は種子を生じる。）では、「Flowers」は「花は」であって、同形であっても、機能が異なっている点で、日本語における格助詞と呼ばれるものは存在せず、最初から単語に組み込まれていることが分かる。この「flowers」を、無標の絶対格などと思ってはならない。その反対に、厳格な主格であって、名詞と主格性とを一体化して、その厳格さを極度にまで高めたものである。今日では、格機能が単語の一部（変化または無変化）として組み込まれているこのような言語を「屈折語」と呼んでおり、今でも格機能が単語として独立している日本語のような「膠着語」とは区別される。「屈折語」は、現在のいわゆる西洋文明圏あるいは現代日本の大多数の健常者の世界認識を反映した言語であって、少なくとも(A)から(J)あたりまでの共感覚者の世界認識を忠実に反映する文法構造を持たない。
その点、日本語では「私が好きな花」「私の好きな花」の両方が許され、名詞と格機能との結び付きが緩やかであるため、日本語は(O)段階には達していないと言えるのである。「私で扉の閉じる」などという言い回しをする共感覚者が日本社会でも文法違反であると認識さ

れつつある現状は、むしろ日本人の世界認識が日本語の特質を失って欧米化しつつあることの証左であることが分かる。日本人でも欧米人でも、幼児期や、脳に何らかの支障が出た老齢期にこのような言い回しが増えることが知られるが、現代英語母語社会では明らかな文法違反と見なされるため、むしろ社会からの偏見への対策も早かった。ただし、そのような社会にあっては、こういった世界認識は、「個性」や「障害」と見なされはするが、日本語のように「民族の普遍的な特質」と見なされることはない。

次に、各言語段階において、実際に使われた助詞そのものについて、日本の古語と照らし合わせながら検証する。

スラフォーリア上級解説（７）

上級解説（７）（格標識の分析「Φ」～「の」）

公開: 05/29/2009 20:34:24

●無標（φ）の使われ方

まずは、無標である。名詞と動詞の間に助詞に当たるものを何も入れないという、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性が多く示した構文は、上古代日本語においては、最も一般的なものであったことは言うまでもない。「花無し」「雪降る」などである。

現代日本語でも、話し言葉で助詞を省いて、「私、泣いてしまった。」「私、扉閉めたよ。」「あそこに家建ったね。」のように話す傾向は、共感覚者に限らず、日常的である。にもかかわらず、「助詞を何も入れない」という回答が、一般日本人が圧倒的多数を占める（N）に向かうにつれて減少することは、共感覚者以外の一般の男女においては助詞を省いて会話する場合でも、実際には、あくまでも「が」や「を」の省略であって、主格・対格の厳格な対立構造が日常的に認識されていることを示すであろう。現代の一般日本人には、「雪降る」は「雪（が・主格）降る」であって、筆者を含む共感覚者においては、「雪（無標の絶対格）降る」と認識されていることになる。すなわち、のちに「雪を降る」という対格標識を得ることになる構文である。

さらに、(D)に属する重度の共感覚者において、「私で扉で閉める。」「私の花の好む。」、こういった連続同一の助詞表現が全て「私、扉、作る。」といった無標の文表現と平等に認識されていることは、「で」や「の」を、格助詞ではなく、ただ単語どうしの「つなぎの役割」と認識していることを示している。今でも「一の二の三の・・・」などと数える人がいるが、日本語のあらゆる助詞は、元はこのような「つなぎ」「口調を整える音」でしかなかった。すなわち、あってもなくても同じことである。換言すると、その「ある“つなぎ”の機能」さえ示すことができれば、「が」という形でも「ピ」という形でも、「α」という形でもよいことになる。重度の共感覚者は、いわば日本語の黎明期と同じ言語認識世界にい

ると推定できる。

そして、(E)、(F)と順に、主体が格標識を得ていくのであるが、のちに不活格、対格に発展する(b)の箇所は、「を」が初めて筆頭に立つまでは、無標「φ」が筆頭であり続けるのである。むろん、上古代から江戸時代までの日本語の変遷過程と合致するものである。

●「が」の使われ方

現代の一般日本人には、もっぱら主格を標識すると認識されている「が」であるが、重度の共感覚者ほど、対格でさえも、「を」に頓着せず、むしろどちらも「が」で標識することに違和感がない傾向があった。すなわち、「私が扉が閉める」「私に扉が閉める」といった回答である。

重度の共感覚者は、「閉める」「作る」といった行為を表す動詞の目的語も「が」で標識していることが分かる。主語を標識する助詞と目的語を標識する助詞とが、別物であると認識されていない、言い換えれば、主体と客体なる概念自体が、その世界認識の中に存在しない。

そして、「φ」「の」「で」「を」の使用頻度が、(N)に近づくにつれて減少するのに対し、この「が」は、使用頻度が増して、(N)ではもっぱら(a)すなわち主格標識に特化される。それに伴って、共感覚者の急激な減少と一般日本人の急激な増加が見られる。

しかし、対格に「が」を用いる場合は、現代日本語にもその名残がないわけではない。以下の各文について、一般の男女にどの文を自然と感じるかを尋ねた結果、以下のようになった。

(X-3-1)　私（が・は）花（を）好む。
(X-3-2) 私（が・は）花（が）好む。
(X-7-1) 私が花が好きだ。
(X-7-2) 私は花が好きだ。
(X-7-3) 私が花が好きな理由は、～
(X-7-4) 私は花が好きな理由は、～

(X-4-1)　私（が・は）海（を）見る。
(X-4-2) 私（が・は）海（が）見る。
(X-7-5) 私が花が見たい。
(X-7-6) 私は花が見たい。
(X-7-7) 私が花が見たい理由は、～
(X-7-8) 私は花が見たい理由は、～

一般の非共感覚者は、(X-3-2)と(X-4-2)は不自然な言い回しだと感じている。ところが、「好む」を「好きだ」、「見る」を「見たい」とするだけで、自然な言い回しになったと感じる。さらに、(X-7-1)(X-7-5)をより不自然な言い回し、(X-7-2)(X-7-6)をより自然な言い回しとしている。ところが逆に、「理由は～」をうしろに付けると、(X-7-3)(X-7-7)を自然、(X-7-4)(X-7-8)を不自然と感じるようになる。
重度の共感覚者女性は、これに対し、ここに挙げた例文のどれもが自然であると回答したことを付け加えておく。
現代日本語においても、格標識がいかに不安定なものであるかということ、また、その不安定さは「が」や「は」それ自体ではなく、「私」「花」「理由」「見るのか見たいのか、見たのか、見るだろうなのか」といった名詞や動詞の意味内容、文法用語で時制や相や法と呼ばれるもの自体が決定するものであることを、これらの例は示している。日本語においては現在でも、主格・対格関係、自我・他我関係、語と語の厳格なつながりよりも、語の意味内容が優越している構文が生き残っていることが分かる。

日本語においては、「が」が主格、「を」が対格、といった分類は、実際は不可能・不適切であり、むしろ主題や場や文脈といったものが「が」や「を」の意味を決めていると言える。現代日本語にこのような傾向があることは、日本語にもかつて、主格や対格、ひいては属格や具格などをも明確に区別しなかった時代があったことを物語っている。「水が飲みたい」（願望）、「本が売ってある」（状態）、「字が読める」（可能）、「その絵が気に入った」（嗜好）、これらは全て、現代日本人であっても、「を」の代わりに「が」を日常的に用いている例である。共感覚者では、これらの動詞だけでなく、全ての動詞に対して、目的語の格が「が」でも「を」でも何でもよいという認識が、現在も残っているのである。

「が」は、「の」との関連においても不安定であり、「私が好む人」「私の好きな人」「私の好む人」は自然であって、「が」も「の」も主格標識と認識されるが、「私が好きな人」では「私（のことが）好きな人」とも取れ、現代でも口語においては「が」が対格となりがちである。そうであるにもかかわらず、このたびのような特殊な実験に際しては、ほとんどの非共感覚者が、主格が「が（は）、対格が「を」であるかのように答えるのは、世界認識それ自体は欧米語のそれに移行しているからに他ならないであろう。

●「は」の使われ方

「は」を「が」と同様の主格標識である、かつ「私は」を「私が」と同様に主語であると認識するのは、西洋の厳格な主格言語の影響を受けた現代日本人の特質であって、「は」が主格標識でないことは、既に膨大な先行研究によって示されてきた。有名な「象は鼻が長い」も、その一例に過ぎない。「は」は、場合によって話題格や主題格などと呼ばれ、「象は鼻が長い」は、「鼻が長い」ことが象において成り立つことを示している。現代では、「は」は副助詞に分類されている。むろん、「の」「で」「を」「が」などは格助詞に分類されてい

る。ただし、格助詞と副助詞の境界も、また曖昧なのである。

そこで、重度の共感覚者の回答(D)を見てみると、先述したように、この段階では、男女とも、助詞を「つなぎ」としてしか使っていないのだから、「が」が主格で「は」が話題格であるとの認識もなく、「象は鼻が長い」でも「象の鼻が長い」でも「象を鼻で長い」でも「象、鼻、長い」でも、全て同じと認識される。むしろ、この「は」こそ、絶対格に近いニュアンスを持つものであって、「私は扉は作る」などと単語どうしを全て「は」でつなぐと、重度の共感覚者の世界認識に近づく。

従って、同様に「が」と「は」を混用しているとは言っても、重度の共感覚者と、一般の非共感覚者とでは、その認識の仕方が異なると言ってよいであろう。正確には、「は」のはたらきが格助詞とは異なるものであるとの認識は、明治時代の近代化・西洋化の過程でなされるのであって、上古代では「の」も「で」も「に」も、全ての助詞が「は」の主題格性を持っていた。現代の一般日本人では、主格＝主語との認識が、「が」のみならず「は」にまで広げられる形で、「が」と「は」とを混同していると言える。その混同の仕方は、重度の共感覚者とは対極にある。

●「の」の使われ方

「の」は、(a)において、いくつかの段階で使用頻度が最も高かった助詞である。すなわち、一般の日本人が「が」や「は」を入れた箇所である。共感覚者、特に女性ほど、属格とされる「の」を、主格に当たる位置に使っていることが分かる。

しかし、このような言語認識が決して反日本語的なものでないことは、例えば先のように「私が好む人」「私の好きな人」のように現代日本語でも、ある種の述語を用いた場合に主格に「の」を用いること、何より上古代日本語においては「の」は「が」以上に主格標識として一般的であった事実をもって、自明であろう。例えば、次の二つの「の」を、前者が属格、後者が主格であると峻別するのは現代日本人の視点であって、属格と主格とが分化していない使い方である。

「家のうちなる男君の来ずなりぬる、」（枕草子）

現代日本語では、「の」は属格（英語で言う所有格）にほぼ特化されている。反対に、「が」は「我が心」のように今でも属格に用いる場合があり、そもそも「の」も「が」も、格機能と言うよりは、名詞や動詞といった単語どうしをつなげる、「つなぎ」の役割でしかなかったのである。「私が扉の閉める。」「私が花の見る。」などのように、「の」を対格として用いた回答が多かったことからも、それが見てとれる。このような回答もまた、共感覚者女性に圧倒的であり、にもかかわらず、このような言語認識をしていながら、普段は「が・は」と「を」との対立の明確な現代日本語を意識的に操って、社会生活を難なく送れるのも、女性が圧倒的であった。そして、(N)に近づくほど「の」の使用頻度は少なく、最後は

「が・は」と「を」とに立場を譲って消滅してしまう。

スラフォーリア上級解説（８）
上級解説（８）（格標識の分析「で」～「へ」）
公開: 05/29/2009 20:36:12

●「で」の使われ方
　一般日本人にとって「が」や「は」で表されるような主語を、現在の具格や処格「で」で表そうとするこの一部の共感覚者・自閉症者の世界認識は、あらゆる回答の中でも、現代の一般日本人にはとりわけ認識しがたい例と考えられる。「私で扉作る。」「私で座っている。」などがそれである。
　「で」は「にて」の変化であり、現代日本語ではほとんど具格・処格に特化されている。そこで、一般の男女も含め、補助的に以下の質問を行った。その結果、全ての一般の男女が、「風で扉が」「風が扉を」と「私が扉を」と回答したのに対し、共感覚者では、両方の助詞をそろえようとする意志が強く見られ、「風で扉を・私で扉が・私で扉を」という結果であった。

　風（　）扉（　）ひらく。
　私（　）扉（　）ひらく。

（「ひらく」は、「～が（を）ひらく」「～が（を）閉じる」「～が（を）伴う」など、同形のままで自動詞としても他動詞としても使える動詞であるから、能格動詞、筆者の言う原動詞である。）

　この「ひらく」を、原動詞でない「あける」にすると、途端に一般の男女は主語の変更を行って、「風が扉を」と「私が扉を」と回答する。ところが、共感覚者は、「風で扉が（を）あける」「私で扉が（を）あける」と動じない。

　風（　）扉（　）あける。
　私（　）扉（　）あける。

従って、問題文に対し、重度の共感覚者は、「主格や対格を標識する助詞は何か」「使われている動詞が自動詞か他動詞か」を考えたのではなく、「自分の世界認識を、欧米化している現代日本語で使われている助詞に仕方なく当てはめると、どの助詞に近いか」と考えて回答したとも言える。それが、(E)や(F)の段階における、「で」の優越の理由である。むろ

ん、他の助詞も同様である。日本の共感覚者は、現代日本語を母語とする現代日本人が周りにいる状況で育っているがために、「で」が「道具で」「駅で」など具格・処格標識らしいことはすでに分かっており、それに影響を受けて、「私で」と回答したにすぎない。従って、「で」という回答が多いからと言って、それが一般日本人と全く同じ「で」の意味内容を指していると考えることはできない。現代日本語の「で」に近いであろうことが推定できるのみである。この実験は、現代の一般日本人にとって、「で」は英語の「by」や「with」や「at」などと同格であって、それを日本語に再転用していることを示す良い例である。いずれにせよ、「私は、私という手段で扉を作る」「私は、私という人間において扉を作る」というニュアンスを想定することは誤りではなく、共感覚者は、「風」に対するのと同じように、「私」自身を傍観していると思って頂いてかまわない。「で」が「φ」や「の」など他の助詞との役割の上での区別がない(D)の段階はもちろんだが、「木で扉を作る」「電車で移動する」の「木」や「電車」と同様に「私」を扱う点は、人間と自然、有生物と無生物とを文法でも分けようとしない強い意志が表明されていることを示す。これらの共感覚者の回答を見る限りでも、「主格・対格言語」なるカテゴリーが普遍的なものではないことが暗示される。

●「を」の使われ方

共感覚者が示した主格標識としての「を」も、一般の日本人には認識の難しい例であろう。これらの共感覚者では、一般的には対格の標識と思われている「を」を主格「が・は」の代わりに用いることに抵抗がない傾向にあることが見てとれる。

だが、これについても、特に上古代の和歌では「を」が主語となる名詞に付く例は多いことが知られる。いわば、主格には「が」だけでなく、「を」もあった。例えば、

女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

では、「を」は主語の「名」に付いており、現代の「が」に近い。また、

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

においても、「瀬の流れが速いので」と主語「瀬」を主格化している。「を」が他動詞の対格として特化されるのは、近代化以降である。

現代では、例えば「家を」の場合、他動詞「建てる」をつなげるのが自然であるため、「家を建つ」という共感覚者の世界認識は、いっそう現代の日本語話者には不自然と感じられようが、古語においては自動詞も他動詞も終止形は「建つ」であり（むしろ、動詞の自他

の概念がなかった。非終止形における活用の区別は、自動詞と他動詞による区別ではない）、「家を建つ」としてもおかしくはない。ただし、「家を建つ」では、「家が建つ」のか「家を建てる」のかが判別できないことになるが、言い方を変えれば、上古代日本人にとっては、「（誰かによって）家が建つ」（家が建つことに焦点）ことと、「（誰かが）家を建てる」（家を建てる人に焦点）ことについて、終止形においては文法的に区別がなくとも困らなかったのである。事実、上代では、動詞が終止形である場合には、主体が格標識を受けることはなかった。日本の古語は概して、主格が「φ」「の」「で（にて）」「が」「は」「を」などのいずれであっても、動詞の形を変える傾向にないことが分かる。見方を変えれば、動詞の語形によって主格をどの助詞にするかを考えることがなく、むしろ主語は無標であることが基本である。共感覚者の女性が、「が」「は」「を」などのいずれでもよいと感じていることは、決して奇妙なことではなく、格標識はあってもなくても同じなのである。
「を」は近代化以降、特に対格の標識として特化されるのであるが、抽象概念や無生物を主格に立てることは今の日本語でも少なく、「時間が残る」、「会議が終わる」といった言い方は、明治以降の翻訳文体であることを先に述べた。社会生活に支障が出るほどの重度の共感覚に生きる人は、「が」と「を」の区別さえ曖昧なのに対し、共感覚者女性のうち言語に支障のない女性では、「を」がほぼ対格に移行し、一般女性と同じ世界認識になりつつある、まさにその過渡期にいることが分かる。

●「に」の使われ方

「に」は、現在では与格や処格として用いられることの多い助詞であるが、古語においては現在のように確定的な意味として用いられたのではなかった。

水に洗ひてたのしびとせんよりは、・・・

この場合の「に」は、現在の「で」に近い。すなわち、ほとんど具格と言ってよいものである。重度の共感覚者ほど、「で」に次いで「に」を主体に付した（「私に扉を作る」、「私に結婚する」など）のは、「で」「に」が上古代語的な具格・処格として認識されているからに他ならないであろう。

春の野に若菜つまむと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ

「花に」の「に」は、「花によって」という原因・理由を表しており、このような表現は現在でもしばしば用いることを考えると、共感覚者の「私に（よって）扉を作る」との表現が、決して不自然なものでないことが理解できよう。

●「へ」の使われ方

「へ」は、現在では向格や着格として用いられることが多く、古語においても大方そうであったが、「に」と「へ」の意味の差は、近世まではほとんどなかった。「京へ筑紫に坂東さ」の格言が示すとおり、「に」と「へ」と「さ」の差異は、意味によるものでなく、方言差であって、これは重度の共感覚者が示した、主体の格標識は何でもよいとする傾向を思わせる。

もっとも、上代においては「へ」の使用例は少なく、古代以降に増えてゆくのであるが、注目すべきは、共感覚者の回答でも、(D)から順に、「へ」が増加傾向を見せることである。

さて、ここまで、質問文に用いた動詞の意味と、実際に回答に見られた助詞について、一通り見てきた。このたびの実験で明らかとなったことを、今一度総括しておきたい。

まず、共感覚者の男女と一般の男女の回答の差異を、動詞の意味（道具の有無、他への影響の有無、希求性の有無、能力の有無、意志の有無、行為性の有無、生命性の有無、主格性の有無）に重点を置いて追ってきた。「前言語」→「擬音・擬態言語」→「無格言語」→「識格言語」→「具格言語」→「及格言語」→「希格言語」→「能格言語」（ここまで、言語学で言う能格言語）→「意格言語」→「活格言語」→「主格言語Ⅰ」→「主格言語Ⅱ」→「主格言語Ⅲ」→「主格言語Ⅳ」→「主格言語Ⅴ」がつながり、「前言語」から「識格言語」の段階が最も重度の、社会生活が困難になるほどの共感覚に生きる人の言語認識世界であり、順に共感覚の程度が軽減されていき、「主格言語Ⅰ」において、ほぼ現代日本語の表面上の文法構造との一致、「主格言語Ⅳ」において、ほぼ現代の一般日本人の実際の世界認識との一致が見られることが示された。識格・絶対格言語から主格・対格言語Ⅴに変遷する過程は、「自我が行うこと」「人為的に行うこと」が次第に増えていき、最後にはあらゆる自然・環境を人間が制御し、それを文法にも反映させようとする過程であることが分かる。

助詞については、「単語どうしをつなげるはたらきをするもの」と認識する段階に始まり、やがて「属格や具格といった、人間の原始生活に最低限必要な意味合いを、単語どうしの関係に与えたり、口調を整えたりするもの」との認識を経て、「厳格な主格・対格言語を象徴するはたらきをするもの」と認識するに至るまでの、様々な段階に区分できる。それはまさに、日本語が上古代日本語から現代日本語に至るまでに辿ってきた変遷過程と同一である。

そして、回答者の分布で言うと、「各々の助詞の役割を断定的に見ず、語と語のつなぎの役割であるとする世界認識」、「明らかに人為的な行動以外は、ただの無標φや「の」や「で」などの絶対格として放任しておく世界認識」、「上古代日本語的な世界認識」は、重度の共感覚者の男女に見られ、また絶対的な人数も女性に多い。一方、「一助詞一格という厳格な

世界認識」、「全ての名詞に主格を取らせる世界認識」、「現代日本語・現代欧州語的な世界認識」は、ほとんどの一般の男女に見られ、また絶対的な人数は男性に若干多い。そして、全体として、同じ段階にいる男性と女性とを比べた場合、男性のほうが何らかの言語障害・社会生活での支障を伴いやすいがために、自力で自らの世界認識を言語化できず、それが「共感覚者は女性に多い」という結果につながっているものと考えられる。

最後に付記しておくが、専門家は、文法が混乱するこういった現象を「失文法」「錯文法」と呼んでいるが、結局、(D)における「φ」や全ての助詞は絶対格、(E)の(X-1)の助詞は具格でそれ以外は絶対格、(F)の(X-1)と(X-2)は及格でそれ以外は絶対格・・・と見ていけば、全てが整然と説明できるのであって、ある一時代のみを見て文法認識の正誤を判断することがいかに危ういかを、これらの回答は物語っていると思う。日本語を覚えたての幼児や、脳卒中で言語生活に支障のある老齢期の人々に限らず、重度の共感覚者でさえ、文法を「失って」はいない。文法なる概念がなかったり、その認識の仕方が異なったりしているというのみである。実際、(D)や(E)のような回答を示した女性も、ジェスチャーにおいては、現代日本語の「私が花を見る」が指す内容を正しく示す。少なくとも「失文法」「錯文法」ではなく、「異文法」とすべきである。そして、日本人においては、民族として最も新しく身に付けた欧米的文法や世界認識から順に失っていく点に注目すべきである。すなわち、日本人共感覚者の世界認識を綿密に調べると、共感覚の程度が重いほど、なぜ江戸時代以前ないし戦前の日本人のそれに合致するのか、言語に支障が出るとき、なぜ我々は過去に戻るのか、という点に注目すべきなのだと考える。

スラフォーリア上級解説（９）
上級解説（９）（格の再編）
公開: 05/29/2009 20:48:06

現在の英語をはじめとする欧米語や、現代日本語などの主格言語と異なる文法を持つ自然言語は、今日の言語学では能格言語や活格言語と呼ばれている。先の識格言語や及格言語といった呼称は、筆者による、共感覚者の世界認識を精査した結果を用いての、新たな類型論の提案と言うこともできる。
今一度、現在の言語学における能格言語、活格言語、主格言語の定義について、概観しておく。

能格言語
名詞（絶）＋自動詞。（例：春β来る。）
　名詞（能）＋名詞（絶）＋他動詞。（例：私α花β見る。）

活格言語
名詞（不活）＋自動詞。（例：春β来る。）
名詞（活）＋自動詞。（例：鳥α飛ぶ。）
　名詞（活）＋名詞（不活）＋他動詞。（例：私α花β見る。）

主格言語
名詞（主）＋自動詞。（例：春が来る。）
　名詞（主）＋名詞（対）＋他動詞。（例：私が花を見る。）

　能格言語とは、自動詞の主体 S と他動詞の対象・目的物 O が同じ格標識（絶対格）を受け、他動詞の主体 A がそれらとは異なる格標識（能格）を受ける言語であるとされる。絶対格は、ほとんどの場合、無標である。能格時代の日本語も例外ではない。（「花無し」「雪降る」など。）
先の考察で、「風で」のみならず「私で」という言い方が日本の共感覚者に見られたのは、その世界認識が能格言語話者と同様であるからに他ならない。

ところが、筆者の考察で言えば、グルジア語に関しては、意志的、随意的な行為を表す動詞文は、もはや能格言語の段階にないのだから、グルジア語は意格言語であるという分析ができるのである。
「分裂能格性」なる概念は、あくまで主格言語を母語とする人々（すなわち、動詞を自他に分けたり、森羅万象を主体と対象物、人間と有生物と無生物とに分けたり、時間を直線と見なして過去と現在と未来とに分けたりする世界認識を持つ人々）から能格言語を見た際の分析であって、能格言語話者にはそのような認識はなく、それが一つの言語体系であって、「分裂」でさえないだろう。

　しかし、筆者の言語獲得記憶、そして筆者の実験に示された共感覚者の世界認識に照らして考えると、研究者らが存在を主張する活格言語なる言語は、筆者の考察による識格言語から活格言語までの、どれかの言語を指しているのである。
　「言語は能格→活格→主格言語の順に変遷する」との主張は、近藤健二氏らによってなされており、筆者を含めた共感覚者の幼児記憶にほとんど合致する見事な見解であるが、これは「活格」の定義が筆者とほぼ同じであるからに他ならない。すなわち、能格言語は、「意志的・随意的な行為」にも能格を当てていき、「活動するもの」と「活動しないもの、活動していない有生物」との間に線が引ける段階で活格言語と称されることになる。そこからさらに全ての名詞にも活格が波及して、主格となり、その言語体系は主格言語と称されるようになる。筆者の場合、能格から活格に至るまでに追加される「意志的な行為」を、

「泣く」や「笑う」のような感情的行為と、「転ぶ」や「落ちる」のような純然たる不随意行為とに分けている点で、より細かい基準を設けたのである。

さて、「活格→能格→主格」との主張であるが、これはクリモフらによって展開され、日本の言語学者も多くこれに賛同してきたと思う。しかし、この主張は、「活格」の定義が全く異なるというだけでなく、そもそも人類の言語の変遷過程を見誤っているように思えるし、ごく少数の学者によってそのことが指摘されたのであったが、このたび筆者の実験結果によっても誤りである可能性が示されたのではなかろうか。

まず、「活格」の定義であるが、活格言語話者（例えば、グアラニー語など）は、行為と状態すなわち「動くこと」と「動かないこと」とを区別しているのみであるのに、クリモフらはそれを有生物と無生物の対立であるとしており、能格言語では有性性と無性性の対立はもっと厳しく、それが弱まって成立したのが活格言語であると結論している。近現代的な生命の有無によって名詞を分類するのは、主格言語の発想であって、そのような文法はアメリカ・インディアンには存在しないだろう。ここでクリモフらが言う活格言語とは、筆者の考察で言えば、識格言語から希格言語のいずれかに相当するのであろうが、人類の言語の変遷過程は、有生物と無生物の対立がなくなっていく過程であるとの認識は誤っている。

それにしても、研究者の間で、主格言語に対立する言語が、筆者の言う及格言語でも希格言語でも意格言語でもなく、能格言語であると認識され、様々な議論が能格言語を中心に行われるのはなぜであろうか。

ここで、筆者が出題した質問文を表のように並べ替えてみる。（参考資料の「動詞の連続性」）

識格言語から能格言語までの自動詞文、意格言語から主格言語Ⅲまでの他動詞文を見つけようとすると、非常に少ないことが分かる。

例えば、識格言語の自動詞文を作ると言っても、「目的語を取らない行為のうち、人工的な道具や手段を用いる行為」を表さなければならないが、目的語をとらない文を作ること自体が難しい。例文の「移住する」は、自動詞でありながら、常識的に考えて大がかりな作業と移動とを伴うことから、条件を満たす文の一つではある。しかし、「移住する」を和語に直すと、「住む所を変える」となり、「を」（対格）が現れる。すなわち、識格言語段階において、主体が格標識をとるということは、同時に他動詞ないし他動詞的な意味を暗示させる表面上の自動詞が述語となる、ということに等しい。（そのために、日本語においては目的語をも同時に表現してしまう漢字熟語が多くなってしまうのである。）

反対に、例えば活格言語において、自動詞文「私が転ぶ」に対応する他動詞文、すなわち「行為の対象がありながら、不随意的に起こる行為」を表す文を作ろうと思えば、結果として人体の生理現象などの、主体自身の再帰的な行為が中心となる。

これと同様に文を作っていくと、ちょうど能格言語の段階で、能格主体に続く動詞と、絶対格主体に続く動詞との区切りが、ほぼ他動詞と自動詞との区切りに一致することが分かる。これが原因で、「能格言語は、自動詞と他動詞とで、その主体の格標識が異なる言語」であるとの誤った解釈を言語学者がことごとく与えてしまったというのが、私の見解である。実際は、「能格言語は、対象となる他者や物体や概念があって可能となる行為を表す動詞と、人体や主体自身のみで可能な行為を表す動詞とで、その主体の格標識が異なる言語」なのである。能格言語話者の世界認識は、識格言語から活格言語の流れの中の、一段階であって、動詞の自他など考えてもいない。むしろ、あらゆる動詞が、右の能格動詞的に認識されているのである。

そうなると、動詞の自他という概念が、いかに主格言語のみに適用可能なものであるかがよく分かる。冒頭の模式図は、以下のように書き変えねばならないだろう。

能格言語
名詞（絶）＋行為の対象がない動詞（非能動詞）。（例：春β来る。）
名詞（能）＋名詞（絶）＋行為の対象がある動詞（能動詞）。（例：私α花β見る。）

活格言語
名詞（不活）＋不活動を表す動詞（非活動詞）。（例：春β来る。）
名詞（活）＋名詞（不活）＋活動を表す動詞（活動詞）。（例：鳥α飛ぶ。私α花β見る。）

主格言語
名詞（主）＋自動詞。（例：春が来る。）
名詞（主）＋名詞（対）＋他動詞。（例：私が花を見る。）

ここにおいて、活格言語に見られた不自然な三構文の乱立は、二構文に吸収され、能格言語から主格言語に至る言語連続体の、ある一段階に位置付けられるのである。

筆者が、今回の実験において、自動詞・他動詞・能格動詞の全てを出題した理由は、ここに来て明白となるだろう。
例えば、一般の日本人には、「増す」が能格動詞である以上、「私が（は）悲しさを増す。」（他動詞として使用）と「私の（は）悲しさが増す。」（自動詞として使用）は自然な表現と感じられるが、「私が扉を作る」と「私が扉が作る」では前者のみが自然であると感じられる。もし共感覚者がそれと同じ世界認識を持っているならば、(1-1)～(1-9)、(2-1)～(2-9)、(3-1)～(3-9)のそれぞれで異なる助詞が回答に現れたはずである。ところが、実際には、そのような差が全く出なかった。動詞に自・他・能格という三分類があるという認識自体が、無意識の中にもない。いかなる形の動詞で実験を行っても、助詞の使い方に全く影響が出

なかったことは、重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性たちの世界認識が極めて上古代的であることの証左であろう。

スラフォーリアの根本思想（1）

公開: 05/29/2009 22:57:02

共感覚者である私の幼少期からの個人的な創作言語に過ぎなかったスラフォーリアを、成人した今、日本語や英語と同じく一つの整った「自然言語」として改めて記述しようと思ったきっかけの一つは、私がネットで共感覚を告白し始めてから出会ってきた性犯罪被害者の女性の中に、人前で言葉が話せなくなり、現代日本語や現代英語への理解を失ったにもかかわらず、長らく失っていた幼少期の共感覚が蘇り、同時にこのスラフォーリアの世界観と文法は完全に理解できた女性がいたことによる。そして、これらの女性はその後、そのまま共感覚を失わずして再び現代日本語での「言葉」を取り戻した。虐待被害を受けた女性でも、全く同様であった。

海外の共感覚者には、英語など現代先進諸国語を母語としていながら、その世界観を不満に思ったり、または拒否して自ら言語を作り出す者が存在し、その言語の文法は、日本語的・非欧米先進国語的になることが知られている。例えば、英国の共感覚者ダニエル・タメット氏が制作を続ける Manti は、日本語やフィンランド語・エストニア語などに酷似した文法であることがすでに表明されている。その他、私が交流してきた海外の共感覚者も、全員が現代英語の文法は共感覚者にとって「悲劇的な進化」を遂げたと述べている。
あるいは、私が交流した日本の自閉症の共感覚者男性の中にも、これらの先進諸国の公用語や現代日本語は理解できないのに、スラフォーリアの文法や日本の古語、アメリカ・インディアン語の文法は分かっている男性がいる。さらに、脳卒中などで「失文法・錯文法」と呼ばれる状態に陥り、助詞の使い方が「おかしくなった」人も、高度に抽象論理的な今の先進諸国語から順番に理解できなくなっていき、不思議にも日本の古典や先住の少数民族語、スラフォーリアの文法世界への理解は、完全に保っているのである。
換言すると、これらの人たちは、それまでは共感覚者である私とは違う、「一般的な五感の世界」に生きていながら、何か重大な転機を境に、私がいつも見ている共感覚世界と言語認識世界に前戻っているのである。

しかし、例えば性犯罪被害者女性にとって、現代日本語や現代英語よりも私のスラフォーリアのほうが受け入れやすかったという事実は、スラフォーリアのほうが「言語として」勝っているという意味ではないだろう。そうではなくて、この女性たちの「心」を、何ら

かの形でスラフォーリアが完全に記述し得ているということを意味する。すなわち、「言語」の問題ではなく、「心」の問題である。スラフォーリアは、「心」を記述するための重要な要素を何か含んでいるに違いない。すなわち、言語コミュニケーションが難しくなった性犯罪被害者女性や自閉症者と、いったいどのようにして私が会話したのか、なぜ共感覚研究がそれに有効であるのかを説明するために、スラフォーリアなる言語を持ち出そうとしているにすぎない。

私は、人間の心が「傷付く」あるいは人間が「障害を負う」ことは、すなわち自らの世界認識・言語認識を過去に遡らせることと同義であると考えるようになった。また、これらの「社会的に特殊な」人たちとの出会いは、私がなぜ幼少期ほど日本の古典が理解できたか、なぜ成長するにつれて、いくつかの共感覚を失うとともに現代英語が理解しやすくなったかを、見事に説明してくれた。

共感覚者や読字障害者は、感覚や症状が著しい場合に、しばしば現代英語や現代日本語が理解（読解・読字）できないのに、古代日本語や少数民族の古形言語なら読め、理解できるという驚くべき言語能力を呈することで知られる。

管理人も、現代英語や現代日本語が理解できないにもかかわらず、日本の古典は難なく読めるという逆転現象が、共感覚の著しいとき、特に対女性ミラータッチ共感覚の著しいときに起こる。すなわち、日本人が現代英語を学習するようになったことや、現代日本語を現代英語の文法で記述するようになったことと、共感覚を失ったこととの間には、無視できない密接な関係がある。

●スラフォーリアのクレオール日本語性

クレオール言語とは本来、意思疎通ができない異なる言語の貿易商人らなどの間に自然発生した言語（ピジン言語）が、その話者たちの子供によって母語として話されるようになった言語を指すが、スラフォーリアのクレオール性とは、すなわち、現代英語・現代欧州語の文法に追随し続ける現代日本語に対する日本人共感覚者の違和感を解消し、近世以前の日本人の知覚世界に近いこれら日本人共感覚者の知覚世界を記述し得る言語を、語彙だけは現代日本語をもとにして構築する点にある。

スラフォーリアは、管理人が幼少期に遊戯の中で創作した言語（語彙・文法）を基層とする。（この言語は、のちに学習する近代化以前の日本語、特に奈良・平安日本語の文法構造や、現在の世界の少数民族言語のそれに酷似する。すなわち、名詞や動詞といった単語の音韻構造のみが異なる。）
この上に、当サイトに訪れた共感覚者の世界認識に見出した特徴をも網羅し得る文法構造

を再構築する。

　もっとも、スラフォーリアを習得する際に難しい点は、そもそも日本の古典語の膨大な知識を要求する点である。しかも、正式な表記は、漢字の字体も正字体によっている。すなわち、文法と世界観だけは、完全に性犯罪被害者女性や自閉症者の知覚世界を網羅していながら、語彙と表記については、すでに日本人であること、中でも日本の古典語の教養のあることを要求する。さらには、文法用語などにも、仏典の知識を要求する「言葉遣い」が多い。これは一見すると、「柔らかい」スラフォーリアの目的に反するが、しかしスラフォーリアは、一般の医者や心理カウンセラーが性犯罪被害者女性に話しかけても効果のなかったところに、なぜ共感覚者である私の世界認識が「効いたか」、どうして実際にそういうことが起こり得るかを、あえて説明するための言語であって、最初からエスペラントやロジバンのような日常語化を志向するものではない。むしろ、日本語についての高い教養を持った日本人が、先述のような人たちの知覚世界を「内側から」語れるかという試みなのである。

スラフォーリアの難点（2009 年時点）

公開: 05/30/2009 00:06:07

現在の最大の難点・課題を挙げておきます。（なんだか自虐的ですが・・・。）

共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・脳卒中患者などには、助詞の使い方がまるで変わってしまう症状が見られます。これを失文法と呼んでいます。

「今日、私が外を歩いているとき、強い風が吹いてきた。」
「今日、私の外で歩いているとき、強い風で吹いてきた。」

ただし、僕はこの症状は、「失文法」や「言語障害」ではなく、「文法の原始退行」にすぎないと思っています。

一方、単語（特に名詞）自体が言えなくなる症状があります。これは、先に挙げた人のうち、脳卒中患者ばかりに起こります。（「吃音」「どもり」とは違います。）

「今日、私がそちゅ、そき、そぐ、そとを歩いているとき、強いかちょ、かぶ、かぜが吹

いてきた。」

http://stkenshikai.fc2web.com/shitsugoshoh.htm（失語症の例）
http://www.geocities.jp/hiichan39/tsugihagi.st5.html（失語症の例）

そして、当然、スラフォーリアは日本語の語彙に頼っているので、後者の症状を持つ人には効果があまりないと言えます。ただし、言語というのは、現在ではほとんど文法そのものと言えます。次の文章を読んで、英単語が多いからと言って英語だと言う人がいるでしょうか。

「カーレースのフォーミュラ・ワンにエントリーするには、ドライバーはスーパーライセンスを持っていなければならない。」

例えば、「もの」「おひさま」という単語を原始日本まで遡ることには意味がありますが、「ぶったい」「たいよう」という単語の音声の意味を遡ることには意味がありません。単に明治以降に「物体」「太陽」という語を、有識者が漢語由来の音を組み合わせて作ったものです。単語の発音ができないことは、世界認識の方法の変容（文法の退行）とは関係がありません。性犯罪被害を受けて、名詞そのものが発音できなくなる女性があまりいなくて、助詞の使い方が突如としておかしくなるケースが多いのは、偶然ではないと僕は思っています。

スラフォーリア上級解説（参考資料）

公開: 05/30/2009 00:07:16

スラフォーリアの論拠となった、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性に対する質問の回答結果表などを掲げる。
全て、ユーザー名「syn」、パスワード「ippan」でご覧になれます。

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_kaku.pdf（格に関する質問の回答）

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_3doshi.pdf（動詞の連続性）

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_nenpyo.pdf（スラフォーリアの格詞年表と日本史などとの対応）

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_ga.pdf（真格と主格との関係）

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_to.pdf（スラフォーリアの燈詞変化一覧）

スラフォーリア上級解説（11）
上級解説（11）（擬音語・擬態語）
公開: 05/30/2009 00:11:34

これまで、上古代から現代に至るまでの日本語の変遷過程が、日本人の幼児期の言語獲得過程と一致すること、細かな助詞の使い方（主格の「φ、の、が」の変遷など）までが一致すること、さらに重度の共感覚者・自閉症者の場合、その変遷の速度が遅く、成人以後も江戸時代以前のどこかの段階にとどまっており、一様に明治時代以降の日本語の段階に進もうとしないこと、性犯罪被害者では江戸時代以前の日本人の世界認識に前戻る場合があること、などを示した。

次に、現在の言語学の言う能格言語や活格言語の段階、すなわち筆者が前言語から活格言語まで細かく分けた言語の話者の世界認識と、主格言語話者の世界認識との違いを詳しく見ていく。それはすなわち、筆者の先の実験から言えば、現代日本の重度の共感覚者たちの世界認識と、一般の男女のそれとの違いでもあることになる。

まず、全ての基本となる、非主格言語話者と主格言語話者の人間観・自然観の相違を模式的に示す。非主格言語話者とは、筆者の言う前言語から活格言語までの言語の母語話者のことである。
非主格言語と主格言語の違いを一言で言うとすれば、非主格言語話者においては、人類は自然の一部であって、近現代的な「個」「自我」の概念を持たないということに尽きる。これに対して、主格言語話者においては、確固たる個人の存在があり、自分と他者、人類と自然の関係は、すなわち主体と客体との対立的関係であって、さらに人類が自然の上位に置かれる。主格言語が、一神教、特にキリスト教文明圏において主要な言語となっていることは、偶然でないことが分かる。

★非主格言語話者、江戸時代までの日本人、近現代日本の共感覚者、仏教文化圏の世界認識

自然～自分～他者～動植物

★主格言語話者、近現代の日本人、キリスト教文明圏の世界認識

人間　←――――→　自然
自分（自我）
他者（他我）

●前言語から単語羅列言語の時代

今の目的は、非主格言語と主格言語との違いを見ることであるから、主格言語以外は全て一くくりにして語るべきだし、実際にそれも可能なのであるが、まず、最初の三つの時代について見ておこう。前言語、擬音・擬態言語、空格言語の時代である。

以下は、共感覚者・自閉症者の女性から得られた、擬音語・擬態語表現である。

「昨日は、景色がボラボラして悲しかったです。」
「ハムスターの表情がソセソセしていて可愛かった。」
「花の表情がリセ、リセ、リセという感じでした。」

（以下三例は、女性が月経中の体調を自ら表現したもの。）
「体がヌンヌンする。」
「モユモユした曇り空のような感じ。」
「ゾネゾネしてしんどい。」

「ママ、レンジでチンするの？」
「ブーブー来たね。」
「紐がクルクルだ。」

我々の言語は、まずは泣き声や笑い声、唸り声やささやき声で始まる。そしてある程度整った擬音・擬態語が見られるようになる。やがて、簡単な単語の羅列の時代を迎える。これこそが、日本語史や世界の言語史、一般の幼児の言語獲得過程、筆者を含めた共感覚者の記憶の三つ巴の研究から見出されるべき普遍の法則なのだろうと思う。
人類が初めて使った言語がいかなるものであったか、それを寸分の狂いもなく再現することは不可能だが、現代の言語学が言う「擬音語・擬態語」を中心とするものであったろう

ことまでは、誰でも予想が付く。また、これは幼児が言語を獲得する過程（「ブーブー」→「くるま」、「ワンちゃん」→「いぬ」など）の最初の段階にも重ねることができるだろうという点についても、予想が付く。このことから、普遍的な音象徴（鶏の鳴き声には、「コケコッコー」「コッカドゥードゥルドゥー」など、必ず「k」音や「d」音が入るのではないか、など）を想定する向きもある。また、特に擬態語については、星の光（視覚）を「キラキラ」（聴覚）と言うなど、共感覚の原点であると見る向きがある。しかし、まずはこういった普遍的な音象徴を（言語学者のみならず）我々がぼんやりと意識して生活し、外国語を意識していることが、本当に時代を問わず変化しないものであったかについて、反証を加えたい。擬音語や擬態語を、今日ではまとめてオノマトペと呼んでおり、ここでもそれに従う。

これらのオノマトペを見て、「そんなオノマトペは聞いたことがない」と言う人がいたならば、その人にとってのオノマトペとは、これらの共感覚者・自閉症者から見れば、すでに厳格な西洋主格言語的な文法分析に基づく単語としか言いようがない、との結論を筆者は下したく思う。

共感覚者の中には、共感覚が強い日には会話の意味がうまく聞き取れない人がいる。私の場合は、中学・高校の頃がそのピークであった。こういった状況で私の身に起こっていたのは、「オノマトペとそれ以外の語彙の区別がなくなって感じられる」ということである。

人類の原初の言語にオノマトペしかなかったにしても、それがオノマトペである、ということ自体も人類は考えていなかったはずで、私の言語感覚も、十代後半までそれに類似したものであったと言えるだろう。

私や周りの共感覚者が訴える「共感覚」と、言語学で言う「共感覚」とは、かなり様相が違っている。私が一番話題に上らせたい私の「共感覚」というのは、「輝く星を見てキラキラという感じがする」ということとは、実はあまり関係がない。むしろ、それよりももっと手前の、原初的な感覚である。もちろん、私も星を見て「キラキラ」とは感じるけれども「ニョロニョロ」とは感じない、というのは当たってはいるが、これは私にとって、「私が訴えたい共感覚」と違って、後天的・社会的なものだと感じられている。そもそも、今の「私も星を見てキラキラとは・・・」というフレーズ自体にも、私は色や音が見えてしまうのが、私や共感覚者・自閉症者の訴える感覚世界である。（「私」という漢字は肌色、「も」はツツジの花の色・・・というように。）

従って、例えば「コンコン」の「コ」と、「恐い」の「コ」との区別自体ができなくなるときがある、とでも言えば、分かりやすいかもしれない。それが私や私が出会った共感覚者・自閉症者の言語感覚であり、「オノマトペとそれ以外」という分け方自体が、本当に我々の感覚世界の記述にとって正しいのかどうか、という、ある意味では「オノマトペという概念の是非から問い直す」のが私の探究方法である。「オノマトペとそれ以外」が別物と認識されるようになったこと自体が、人類が共感覚を失った根本原因であるとも言えるので

あり、この分け方が、西洋あるいは近代以降の日本にしか無い世界認識だ、ということを念頭に置いていく必要がある。

オノマトペは、その他の語彙よりも世界的に普遍性があるのではないかと、私も以前は考えていたが、民族ごとに厳格な壁ができているようなところもあって、突き詰めていくと、「ニョロニョロ」のニュアンスが伝達可能なのは「ニョロニョロ」というオノマトペを共有している日本人のみである、というトートロジーになってしまう。私は、母語の中に「ニョロニョロ」という語があって、その中で育つがために「ニョロニョロ」と感じられる「ようになる」という、後天的な要因がほとんどであると考える。ヘビや柔らかい物体自体が「ニョロニョロ」という性質を持っているからだ、という言説は、実はむしろ、共感覚者の感覚世界に対して大きな暴力を振るうことになるであろう。

日本の子どもは、「くるま」なる名詞を覚える前に「ブーブー」というオノマトペを発するが、この「ブーブー」自体が、すでに多分に物心付く前の環境、周りの日本人がしゃべる（欧州語に多分に影響を受けた）現代日本語に束縛された音象徴にすぎない。むしろ、車のエンジン音を聞いて、「ズーズー」や「バーバー」、あるいは「トンギンガー」や「クジャンララー」などとしゃべる子どもこそ、環境的要因を排除した、人類普遍の音象徴を示しているとも言えるのである。ある車種のエンジン音は「ゾンゾー」だが、別の車種のエンジン音は「ケンゲー」だと言う子どももいるはずである。そういった子どもから見れば、周りの子どもの多くがしゃべる「ブーブー」なるオノマトペ自体が、すでにオノマトペではなく「名詞」である。自分が「ゾンゾー」をしゃべったときには、周りの子どもはすでに「ブーブー」をしゃべり、自分が「ブーブー」をしゃべったときには、周りの子どもはすでに「くるま」なる単語を覚えている。ましてや、「レンジでチン」の「チン」が「客観的・普遍的」な音象徴であると心理学者や言語学者が断定的に言ってしまえる、その根拠は、どこにあるだろうか。現代の欧米先進諸国や現代日本人（特に非共感覚者）にしか通用しないのではないか、というのが、私の考えである。こういった連続体こそ、私や特に共感覚者が実感していることである。

例に挙げた「ボラボラ」や「ヌンヌン」のほうが特定の日本人女性のみに当てはまる個人的感覚で、「(体が）ゾクゾク」や「(お腹が）キリキリ」などの一般的なオノマトペのほうが日本人に普遍のオノマトペであると言ってよい根拠は、どこにもない。「ボラボラ」や「ヌンヌン」といった自由なオノマトペが、スラフォーリアでは許される。

私の場合、例えばＡさんという女性を見ると、「フィステファンデオン」という色彩や音を感覚し、これらの微妙な変化で排卵を感知するが、これを「私のオノマトペだ」と主張しても、一般の非共感覚者には通じないと思う。現代日本人と外国人の間に起こっている「感覚の差」が、私と他の現代日本人でも起こっている、ということが言えるだろう。厳密には、私が女性の月経周期に見ているものは、オノマトペとそれ以外の語彙との間の概念と言ってもよい。

むろん、日本語の恐るべきところは、オノマトペに「する」をそのまま付けて動詞にして

しまうところで、「キラキラした星」「鼻でクンクンする」などと言えてしまう。しかし、それが許されるなら、私が「私は昨日、Ａさんを目でフィステファンデオンした。」などという言い方が許されるはずである。スラフォーリアでは、こういう言い方を許してしまおうというわけである。
この私の感覚に似たものは、かつての日本にもあって、「枕詞」と言われるものがそれに当たる。「白妙の（シロタヘノ）」と言った時点で、「袖」や「雪」にかかることは、互いに了解されていた。つまり、「シロ」や「タエ」という語自体が、いわばオノマトペと認識されていた、というのが、私の考えである。誤解を恐れずに言うなら、これはほとんど呪文と言ってもよいものであろう。幸田露伴は、「音幻論」の中で、「風（カゼ）」を「東風（コチ）」や「嵐（アラシ）」などと言うように、「風」に当たるものを我々日本人はかつて「thi」のような音で呼んでいて、それが「ゼ」「チ」「シ」などに分化したのだと述べている。すなわち、「カゼ」なる単語と「ビュービュー」なるオノマトペとが別々に感じられるほとんどの現代日本人は、西洋的論理によってしか日本語を認識できないのである。
　どこの国・民族でも、日常で使う言葉を調べたら、オノマトペの使用量は女性が圧倒しているそうである。「景色がボラボラする」、「花の表情がリセ、リセ、リセ」などという表現は、今のところ共感覚者の女性しか使ったのを見たことがない。だが、こういった世界認識が、あくまで「個人的・主観的」で、「普遍的・客観的」でない理由は、どこにあろう。女性の月経周期の例に至っては、体が音を象徴した擬音語でも、体の見た目や触った感じを象徴した擬態語でもなく、それらを統合し、自分の体の深部感覚を象徴した「擬体語」とも言える。そして、このような共感覚者の女性の世界認識こそ、筆者が(A)で示した段階にあると言えるのである。赤ん坊が「ブーブー」としゃべったからと言って、これを「初語」だなどと喜んでいる母親は、赤ん坊の世界認識が(A)の「ズーズー」や「トンギンガー」の時代から(B)の「ブーブー」の「いっそう抽象化された世界認識」に移ったにすぎないことを知らないのである。赤ん坊の「言語」はそこから始まるかもしれないが、「世界認識」はそれよりも前、受精卵のときから存するのである。これまでに日本や世界で為されてきたオノマトペ研究は、言語の古い姿の研究と言うよりは、人類の言語獲得過程の一時期を切り取って、それをオノマトペと名付けているにすぎない。言い換えれば、オノマトペと、それ以外の名詞や動詞といった品詞の境界を設けること自体、西洋の主格言語にのみ適用できる論理であって、それで日本の古語を語ろうとすることは、避けるべきなのだと思う。

スラフォーリア上級解説（12）
上級解説（12）（生命性解釈の再編）
公開: 05/30/2009 00:17:09

　さて、非主格言語の中でも最初の三期に特徴的な「擬音語・擬態語」を取り出して述べ

てきたが、結局はこれらの三期と、それ以降の識格言語から活格言語までは、一貫して先の自然観に乗った連続的変化なのである。
単語羅列言語（空格言語）のあと、今度はその並べられた単語どうしの関係を認識しながら言語を話す時代となる。単語どうしの関係を認識するということは、生物や物体の名称と、その動作を表す語、すなわち名詞と動詞程度の区別が生じるということである。例えば、「私、石器、落ちる」に当たる三単語と「石器、落ちる」に当たる二単語が発せられた場合、当然ここで言う「私」は対自然としての「人間」ではなく、「自然・動物の一種としての私」であるから、どちらも自然（人類を含めた）が行った行為と認識されるが、「私」があることで、「私が石器を落とす」という、より複雑な現象を指していると認識される。このとき、「私」「石器」のあとに、無標の格表示（絶対格）があると考えて、これを筆者は識格言語と名付けたのであった。「私」「石器」と言った瞬間に、意識がそれらに向かって収束するということに加えて、「私」「石器」「落ちる」という語同士の関係が表されるという点で、単なる単語の羅列とは違う。こうして、自分たちが他の動植物や物質と異なる意識を持って言語を主体的に操る存在であることがようやく意識される。ただし、それぞれの単語自体は、現在から見ると、ほぼ全てオノマトペ的に聞こえるものであったのである。

次から、非主格言語話者の世界認識と主格言語話者のそれとの違いを、より綿密に検証していこう。

●有生物と無生物の対立の有無

重度の共感覚者が、有生物名詞と無生物名詞を区別していないことは、能格動詞を用いた次の実験によって明らかとなる。

風（　）扉（　）ひらく。
皆（　）扉（　）ひらく。
二人（　）扉（　）ひらく。
彼（　）扉（　）ひらく。

これに対して、「彼」のあとにも「で」を付して、「彼で扉がひらく」と答えてしまうのが、重度の共感覚者・自閉症者の特徴であることを先に示した。

非主格言語の特徴の一つ目として、人間を中心とする有生物と、植物・無生物・抽象概

念との文法上の峻別がないことが挙げられる。主格言語は、これらを峻別する言語である。名詞の性（文法性）が消滅した現代英語では特に、人間と人間以外の動物との境界も明確であって、代名詞 it の使用領域がそれを示している。

そもそも、名詞に性（最初は、男性・女性・中性の三種あった）が生じたのは、あらゆる自然物、物体に主格を取らせる、すなわち代名詞で受けることを可能にするための人為的措置であって、いわゆる印欧語の祖語は、紀元前にすでにその段階に達していた。現在では、この三性全てを残している印欧語のほうが珍しく（サンスクリット・ギリシャ語・ラテン語・ドイツ語など）、多くの印欧語で男性と女性のみ（フランス語など）、通性と中性のみ（オランダ語など）に整理・統合されており、現代英語に至っては、性が消滅して完全に全ての自然物や抽象概念が、人間と同様に主格を得るようになっている。

近藤健二は「能格的なものの発展をめぐって（９）」の中で、印欧祖語においては、有性・無性の対立が厳しくなったその時期に、すでに名詞の男性・女性・中性の区別が生じ始めていたと推定している。

ちなみに、筆者の言う識格言語や及格言語に属する言語では、名詞を数十にも分類する言語があるが、これが有生物と無生物の対立を意味するものでは全くないことを指摘しておきたい。クリモフらは、こういった言語を類別言語として、ここから有生物と無生物の厳格な対立が失われたのが活格言語、そこから能格言語と主格言語とが生まれると説いているが、大変な誤りであると思う。そもそも、人類の言語が活格言語→能格言語→主格言語と変遷するという説自体の誤りと言うよりも、その根底から誤っていると思えて仕方がない。

まず、人類の言語の黎明期には、名詞・動詞に分類はない。先のように、「石器が私を落とす」のではないこと、すなわち「私」が「石器」とは異なる存在であることが認識されているのみである。そこから段階を経るに従って、一般に「私、他者、動物、植物、無生物、抽象概念」の順に、主格に立つようになっていくのである。その間、人間と動物一般の全てが主格に立つようになった時期に、初めて、命ある人間や動物と命なき植物や無生物との区別が生まれ、しかも人間が動物の上に立つとの認識が生じたのである。印欧祖語はこの時期を紀元前五千年あたりにすでに通過しているが、日本語は江戸時代末期まではそのような世界認識を持たなかった。

活格言語の時代について、付け加えておくが、この時代には、行為の主体になるか、状態の主体になるかで名詞が分けられる。有生か無生かで分けているというのがクリモフの説であるが、有生物は行為の主体になりやすく、無生物は状態でありやすい、ということにすぎない。生命の有無で主体を分類するのは主格言語以降であって、活格言語圏の民族は、そのようには認識していない。

主題優勢言語では、無生物や抽象名詞は主語に立たない傾向がある。日本語でも、「会議が開かれた」などは翻訳体として生まれた文体だが、今では普通に使う。その意味では、現代日本語は、本来は西洋の抽象概念名詞が全くうまく乗らない文法に、強引にそれらの名

詞を組み込んだ結果できた、世界でも極めて異質な言語なのである。現代日本語は、文法は主格言語ⅠやⅡあたりだが、ほとんどの話者の意識は主格言語ⅣやⅤであることは、先の実験で示した。もっとも、現代日本人にとっては、自然に対する人間の西洋的「個」としての自分の存在が意識されているから、現代日本語の異質さに気付かない。
このように、人類の言語の主格言語化の過程は、人間のみを自然から取り出して上位に立たせ、人間の世界認識に自然を組み込んでゆく過程なのである。

スラフォーリア上級解説（13）
上級解説（13）（動詞の自他の不問）
公開: 05/30/2009 00:29:12

●自動詞と他動詞の分類の有無

日本人の重度の共感覚者・自閉症者が自動詞と他動詞の区別をしていないことは、先の筆者の実験によって示された通りである。
「作る」は、一般日本人にとっては、「～を作る」という他動詞である。ところが、自閉症状の著しい人では特に、本来なら「私が扉を作る」と他動詞で言うか、「私によって扉が作られる」と受動態で言うところを、「私で扉が作る」と自動詞のように扱う。こういった人たちは、一通りの社会生活が送れる場合は、単語羅列の空格言語しか解さない重度障害者に比べれば名詞と動詞の区別は付いているが、動詞をただ「動作・行為を表す」とのみ認識していて、それを二種類に分類するということがない。
むろん、主格言語に近い活格言語や意格言語段階の人であれば、「私が扉、作る」「私、扉を作る」などと、比較的に回答が絞られてくる上、自閉症の程度も少ない人が増えるのであるが、識格言語や及格言語段階の人では、あらゆる助詞が同様に使われ、動詞の形には全く影響されない。

スラフォーリアでも、ある一つの動作や行為を表す動詞は、一つの形しか持たず、自動詞と他動詞の別という概念がないことが、特徴として挙げられる。
動詞の自他なる概念が、主格言語になって初めて生じたものであることは、すでに何度も述べた。
生物や物体に名称を付けるだけでなく、それがいかなる動作をしているかということまでをも言語化するようになった時代、すなわち名詞と動詞の区別が初めて付いた時代は、識格言語なのであるが、この時代においては、未だ全ての動詞が、「アル」型として使われる。すなわち、人間が自然に対して「スル」随意的行為や随意的状態が存在しない。現在言うところの自動詞の主体、他動詞の主体と被動者・対象者（物）が全て異なる格をとるか、

全て格が付かないかのどちらかしかない。人為的に行ったことが、全て自然の行いであると認識される時代である。すなわち、自然を大幅に改変するような人為的行為自体が存在しない時代、あるいは民族、地域には、このような文法を見出すことができる。

シベリアのハンティ人の話すハンティ語では、S、A、O が全て異なる格標識を受ける言語である。S は無標であり、絶対格と呼ばれる。　同じくオビ・ウゴル諸語に属するマンシ（ヴォグル）語も、処格や奪格と並んで具格が主語となり得る。これらの言語は、主格言語とされるが、主格を具格と区別して、後者が主語のときを能格言語的であると説明するのは、主格主語を明確に認めたいという我々の願望にすぎない。これらの主格・対格・属格（これら三者は全て同形）・具格は、オーストロネシア語族の焦点標識と同等である。その中で具格が特に強調されるのである。「老人は斧で木を切った」「女の子が着物を着た」「私は老いた老人と食卓についた」の「斧で」「着物を」「老人と」は全て具格で標識される。

タジキスタンで話されているイラン語派のルシャン語では、S の標識が異なり、A と O の標識は同じである。　共感覚者の中に、「私座っている。」「私は扉が閉じる。」と答えた人、「私の座っている。」「私を扉を閉じる。」と答えた人がいたが、それぞれ、ハンティ語とルシャン語の格標識に完全に合致していることが分かる。

日本語の動詞の分類も、自動詞と他動詞という概念で説明できないことは、三上章をはじめ多くの言語学者によって指摘されてきた。これを発展させて、金谷武洋は、「日本語における自動詞と他動詞の差は、自然がそう“ある”か、人間が自然に対して“する”のかの差である」と述べている（金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社）。私の場合、自動詞と他動詞という語さえ廃して、動詞は元々全て「自然がそう“アル”ことを示す単語」であったと考えるため、筆者のほうが通時的観点を加味しているという点で、金谷氏と差があるが、基本的に述べていることは同じである。それを筆者は、共感覚者の実際の回答を用いて、より細かい言語段階を見出し、その変化を実証的に記述したということである。筆者の言い方で言えば、参考資料の年表の青い部分の文の動詞は「自然詞」、灰色の部分の文の動詞は「人為詞」とでも言えるだろう。

明治時代以降、西洋の言語論理を日本語に適用するようになって、日本語の動詞の変化の速度は異常と呼べるほど速かった。漢語動詞に至っては、明治時代には、自動詞としても他動詞としても使える動詞（「(～を）感動する」「(～を）変更する」など）が、現代では自動詞専用か他動詞専用に分裂していることが知られる（例えば、永澤済　「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』第 3 巻 4 号（『国語学』通巻 231 号）／2007 年)。先の例では、現在は「感動する」は自動詞として、「変更する」は他動詞としてしか使えない。自動詞と他動詞の概念が日本には存在しなかったことを示す、良い例である。

なお、自他両用動詞から自動詞専用になった動詞は、「動揺する」「運動する」「影響する」など多々あるが、他動詞専用になった動詞は、「変更する」「隔離する」など、かなり少な

いことが知られる。これは、例えば、明治時代の「風が吹き、風車が回転する」という文の「回転する」を他動詞として使うと、「風が吹き、風車を回転する」または「風が吹き、風車が回転される」となるが、後者の言い方では「誰によって」という行為者の存在を感じさせ、不自然となってしまう。従って、「変更する」「隔離する」など、明らかに人為的行為を表す動詞以外は、基本的に漢語動詞が他動詞専用になることはないのである。
また、「風が吹き、」といったん区切って複文としたが、「風で風車が回転する」ではどうだろうか。これを他動詞として使うと、「風で風車を回転する」または「風で風車が回転される」となる。後者の受動態の説明はあとに譲るとして、「風で風車を回転する」なる言い方は、先の重度共感覚者の世界認識に沿った言い方であることに気付くだろう。重度共感覚者の世界認識と、江戸時代・明治時代初期までの日本人全体の世界認識とが、いかに合致しているか、動詞に関しては、いかに自動詞と他動詞なる区別もなかったかが分かるであろう。

自動詞と他動詞の区別が今でも曖昧な言語の例を示すのに、世界最古の言語の一つと見られる中国語を挙げないわけにはゆくまい。中国語は最も原始的な孤立語であって、動詞に活用がないのだから、全ての動詞が能格動詞であると言えるわけである。もっとも、かつては中国語にも格標識や動詞の活用があったとされるが、おそらくは筆者が言うところの識格言語を出るものではなく、名詞と動詞の違いが認識されている程度であって、語順はSVOを基準として自由であったろう。例えば、

他推窗戸。（彼は窓を押す。）
窗戸開。（窓が開く。）

の二つの文を合体させて、

他推開窗戸。（彼は窓を押し開ける。）

という文を作ることができる。漢民族には、上記の二つの文が、それぞれ自動詞、他動詞と認識されているわけではない。このような漢語の特徴も、しばしば動詞の自他及び能格性といった用語で説明されることがあるが 、A、S、Oの全てが無標の絶対格標識を受けていると見なすべきであって、日本語訳としては、「彼で窓が押す。」「窓開く。」などでもよいのである。

スラフォーリア上級解説（14）
上級解説（14）（能動・受動両態の区別の破棄）
公開: 05/30/2009 00:34:35

●能動態と受動態の分類の有無

さて、非主格言語において、自動詞と他動詞の区別がないということは、態で言えば能動態と受動態の区別がないことと同じである。「甲さんが乙さんに動作を“する”」ことと、「乙さんが甲さんに動作を“される”」こととの間に、文法的に全く区別がない言語である。「オーストロネシア語族（特に台湾、フィリピン、ポリネシア、インドネシアなど）に見られる、いわゆるフィリピン型格配列は、この語族が識格言語や及格言語あたりの最古の形態を未だ維持していることの証左であろう。従来、「焦点」という概念が用いられ、主格言語における能動態と受動態との区別が行われてきた。筆者の考察によれば、この「焦点」は、この時代の名詞の格標識である数々の絶対格の中の、強調形であると説明することが可能となる。例えば、台湾南部のパイワン語では、普通名詞に付く a、人名単数に付く ti、人名複数に付く tia は主格とされているが、これこそ焦点と呼ぶべきものであり、筆者の考察では絶対格の一種であるということになる。これを「視点」と新たに呼ぶ動きもある（近藤健二　1999　「能格的なものの発展をめぐって（7）」）。

日本語は、実は現在でも焦点、視点、筆者の言うところの絶対格が残っている言語であると見ることができる。

私ね、花を見ているの。
私が、花を見ている。

今では後者の「が」は主格、「を」は対格とされるところだが、上の「ね」や「の」を絶対格と見なせば、「が」や「を」でさえ、絶対格と見なすことも可能である。「私ね」について、「私が」から主格の「が」が抜け落ちて、そこに「ね」が加わったと見なすのは、主格言語的な発想であって、「私ね」と「私が」は、我々重度の共感覚者には同等であると日常的に認識されており、「ね」は特に強調形の絶対格であると感じられているにすぎない。多くの共感覚者、特に女性が、「私で花を見る。」「私を花見る。」などと答えたのは、これら「φ」「で」「ね」「の」「が」「を」などを全て同じ「つなぎの音」「口調を整える音」「特に単語を強調する音」程度の感覚で答えたからに他なるまい。現代日本語の、特に女性言葉に付けられる「ね」「の」「わ」「かしら」などと、オーストロネシア語族に残る焦点格ないし絶対格とは、機能的に見て同等であり、同時にそれらは言語の原始的形態を残すものと見てよいであろう。もし筆者のアンケート質問文の中に、「ね」「よ」「の」わ」などが入っていたら、むしろ多くの共感覚者女性は、「私ね、扉、閉める。」などと答えたであろう。
この傾向は、幼児の言語獲得過程にも現れる。

ねこがねずみにおいかけられました。（猫が鼠を追いかけた、の意で発言。）
花が雨に降っちゃった。（花が雨に降られた、の意で発言。）

幼児には、「猫、鼠、追いかける」「花、雨、降る」の単語が含まれることが重要なのであり、またそれらの単語がありさえすれば、文意は通じるのであって、「猫が鼠を追いかけた」（能動態）と「鼠が猫に追いかけられた」（受動態）、「雨が花に降った」（能動態）と「花が雨に降られた」（受動態）とに区別はない。自動詞と他動詞の区別がない言語であることと、能動態と受動態の区別がない言語であることが、同一の概念であることがよく分かる例である。

スラフォーリア上級解説（10）
上級解説（10）（社会的少数者の実証例）
公開: 05/30/2009 00:44:28

ここまでは、筆者を含めた日本の共感覚者の現在の世界認識が、日本語が辿ってきた変遷過程の途上（上古代日本語や近世日本語）にとどまっていることについて述べてきた。
ここからは、一個人が成長過程で言語を獲得するに当たって、どのような変遷過程を辿るかを検証し、その過程もまた、日本語の歴史的な変遷過程に合致することを示す。さらに、共感覚者や言語障害者では、その幼児記憶が、一般日本人よりも鮮明であることを示す。
一個人が母語を獲得する際に、どのような過程を辿るか、従来の研究で分かっていることを、いくつか示しておく。むろん、これらは全て、非共感覚者、幼児記憶のない研究者による研究結果であろうが、一個人の母語獲得過程と日本語の歴史との合致を示すものである。
幼児の現代日本語の獲得過程では、主格について、最初から大人のように「が」を用いるのではなく、まず無標が基本であって、やがて「の」が属格標識、具格標識らしきものとして現れ、それが主格を表すようになり、そこに「が」が重なって、最後は「が」は主格標識に落ち着くという、上古代日本語から現代日本語に至る主格成立の変遷と全く同じ過程を辿ること、その変遷の途中で能格言語（筆者の言い方では、活格言語以前の段階）の世界認識を経験することは、すでに先行研究によって明らかにされている。（例えば、鈴木猛（2006）「日本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」）　むろん、幼児は、実際の日本語の変遷過程に関する知識があるわけではなく、周りの現代日本語話者の持っている助詞の使い方から影響を受けるのみであり、その中で、上古代日本語から順に、助詞の変遷過程を辿るのである。これと同様の結果は、筆者自身の母語獲得過程の研究（幼少期のテープやビデオを使用）、及び筆者以外の共感覚者（女性三名）においても、全く同じ結果が

得られている。

また、手話に接したことのない先天聾の幼児（民族・国籍問わず）のジェスチャーが、能格言語の特徴を示し、主格言語に移行せずに手前の段階でとどまることが知られている。どんなに高度な主格言語に達している言語圏であっても、先天聾の子どもは必ず、人類の言語獲得過程と同じ変遷を最初から経験し、かつ現代欧米語の文法（筆者の言う主格言語Ⅰ～Ⅴ）には達しないことが明らかになっている。これは、先天聾の幼児の親の母語や、幼児が属する国の公用語や民族言語がもはや主格言語である場合であっても関係なく、「能格言語性は人類にとって生得的・普遍的である」との同様の結果が得られている。（例えば、櫻井彰人 & 酒井邦嘉（2000）「言語獲得のモデル」）

さらに、まさに共感覚者の例であるが、現在の欧米語（英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語など）を母語とし、操っている共感覚者であっても、その母語の文法構造にしばしば違和感を覚え、個人的な楽しみとして創作言語を生み出すことが知られるが、その言語は主格言語ⅣやⅤの構造を排除して、主格言語Ⅰ～Ⅲ、時に私の言う能格言語周辺の文法に前戻ることが知られる。（例えば、英国の共感覚者ダニエル・タメットの創作言語 Manti は、膠着語であり、本人の母語である英語の文法を持たず、フィンランド語やエストニア語、日本語に近い文法を持つ。）

筆者の母語獲得に関する記憶や、大勢の日本人共感覚者に関する筆者の独自の研究においても、これらと全く同じ結果が得られたことを紹介する。

まず、共感覚者の母語獲得過程であるが、次の年表に、どの言語段階にどの年齢層の共感覚者が分布しているかを、その平均年齢によって示した。（参考資料の「スラフォーリアの格詞年表と日本史などとの対応」）

共感覚の程度と年齢とにほぼ関連はないが、多少、年齢が高いほど、あとの段階の言語、特に「主格言語」が認識できるようになっていることが分かる。

筆者は、共感覚者一個人の成長過程での言語の変遷を調べるため、共感覚者本人、特に上古代日本語的な世界認識を強く示す共感覚者女性に、言語獲得に関する幼児記憶を尋ねた。そうしたところ、主格言語Ⅰよりも前の段階、特に能格言語以前の段階にとどまっている女性の場合、幼児期に母語を獲得する際に、自らの世界認識にどのような変化が起こっているかを、かなりの程度、意識の上で記憶していることが分かった。どの言語段階をどの年齢のときに通過したかを尋ねた結果、言語活動・社会生活に支障がない、より軽度の共感覚者女性ほど、速く主格言語の段階に達することが分かった。例えば、能格言語的な回答を示した 24 歳女性（アスペルガー症候群・離人症を持つ）は、現在の段階に達するまでに 0 歳～およそ 7 歳までの 7 年かかっており、かつその後はその段階にとどまり、現代日本語が属する主格言語の段階に達しなかったのに対し、社会生活を自力で送ることが

できている 26 歳女性は、5 歳頃にすでに主格言語 I の段階に達し、その後、英語の文法も平均以上に習得している。

さらに、その隣に、筆者が今でも記憶している自らの言語獲得過程を描き込んだ（幼少期・小学校期のテープ・ビデオ・写真など使用）。そして、一般の非共感覚者の男女の成長過程をも、描き込んだ。一般の男女は、初めて喃語を発し、初語をしゃべって以降、たった 5 年ほどで現代日本語のあらゆる文法を獲得して主格言語 I に達し、生活に必要な一通りの言葉を小学校の終わりまでに獲得、最終的にはほとんど英語の文法と同じ世界認識に達することが分かる。男児においても、一般に女児よりも多少遅れるという以外は、主格言語 I に達するのに 5 年しかかかっていないことが分かる。

さらに重要なことは、現代の一般日本人は、主格言語以外の段階について、一切記憶しておらず、特に 0 歳から 3・4 歳あたりに起こったことを自ら説明できない、すなわち、4・5 歳頃を過ぎると、もはや成人まで、自らが話している言語の文法に関する何の変化も意識上では経験していない点である。一部の共感覚者の女性及び筆者の私においては、一般の男女において物心付く以前に展開することが、そのあとの意識上で展開されており、なおかつ世界認識自体は今もそこにとどまっており、その世界認識に現代日本語の文法が合致していないことを常に意識しつつ、現代日本語を母語として生活している、と言うことができる。

冒頭の問題文に対する一般の日本人の回答が、(N)のようになり、そこからほとんど外れなかった理由は、ほぼ完全に主格言語Ⅳの世界認識によって回答がなされたためであると言えるであろう。一方、特に共感覚者女性において、普段の社会生活で用いている現代日本語とは異なる自然な回答が得られたことは、共感覚者、特に女性は、共感覚の程度が著しい場合ほど、普段から何らかの認識の調整・制御を行って周辺の現代日本語に合わせて生活していることを物語るであろう。そして、男性の場合は自らそれをコントロールできず、結果として障害者とされることが多いのであろう。

このように、共感覚者女性や極めて限られた共感覚者男性が現在とどまっている言語段階は、一般の日本人の男女が幼児期において無意識に経験したことの途上にあって、長い時間をかけてもその初期段階にとどまっている共感覚者ほど、共感覚を強度に残しており、言語にも何らかのいわゆる障害が出やすく、また一般の社会生活も困難であることが分かる。

さらに、日本語に加えて、現代英語や現代欧州語を同等に解し、流暢に話すことのできる男性は、たとえ基本的な共感覚は持っていても、女性の排卵や月経を感知できる原初的な共感覚を持っている人が全く見当たらなかった。女性においても、現代英語や現代欧州語を母語である日本語と同等に解し、話す女性の場合、活格言語以前の回答を示した女性は一人も見当たらなかった。

日本人共感覚者、特に女性において、表面上の文法よりはずっと欧米的な世界認識にある一般日本人の日本語に違和感を覚えて、自ら創作言語を生み出す人を、筆者も見てきたが、そういった女性たちの創作言語の文法は、奈良・平安日本語や江戸日本語の特徴を呈している。以下に一例を示す。

23 歳の共感覚者女性（アスペルガー症候群を持つ）は、所有している人形に幼い頃より創作言語をしゃべらせて遊んでいた上、成長した現在でも軽度の言語支障を抱えるが、彼女の創作言語は意格言語的な構造を有していることが分かった。

Sara na suyasuya shiteimasu.　（サラは眠っています。）
Sara no shaberimasu.　（サラはしゃべります。）
Sara no pera na shaberimasu.　（サラは言葉をしゃべります。）
（状態を表す「眠っている」の主体と能動行為を表す「しゃべる」の対象が、同じ格標識となっている。）

さらに、筆者にも、幼少時に玩具のフィギュアにしゃべらせていた言語があり、現在、この言語が、あとで考察する対女性共感覚（女性の排卵と月経とを察知する共感覚）をなるべく忠実に写し取るのにふさわしい文法を有するものであったことを再発見し、書き留めているが、この言語は基本的に能格言語の構造を持っていたことが分かった。

Wogun kozo meruna no　φan φisu sentuworu.
私ンコゾ女性ノ性周期感ツォル。（私はこの女性の性周期を共感覚で感じる。）
ウォグンコゾメルナノファンフィスセントゥヲル。
Wogu　φerinesu.
私傷ネス。（私は傷つく。）
ウォグフェリネス。

前者のニュアンスを、最も近い現代日本語の語彙によって表すならば、「私には、私という手段によって、あの女性の性周期が感じられる。」となるであろう。ここで主語としてはたらいているのは、「性周期」のほうであって、「私」ではない。「私」を自然の中の一員と見て自我を突き放し、無我に立っているかのようなこの文法は、近現代の主格言語圏にあっては個人の創作言語にすぎないが、こういった共感覚が男性の自然の能力であった時代には、一部族や一民族の言語として存在し得たであろう。

ただし、自ら進んで意図的に行為を行っていることを強調する場合には、絶対格を有標化することがある。現在の自動詞でも他動詞でも同様のことが起こるため、のちにスラフォーリアの原形となるこの創作言語は、能格構造を中心として、希格構造や意格構造に波及する言語であると結論することができる。

Wiu se φ ira　φ orishite φ irisu.（私は月を見ています。）
Wiun se φ ira　φ orishite φ irisuno.（私はね、月を見ているのよ。）

また、少女期・思春期または成人を迎えた直後に、性犯罪の被害を受けた女性の場合、しばしば共感覚の減退がそこで止まり、世界認識や文法構造も近世以前の日本語の段階にとどまることが分かった。表面的には現代日本語で話し、文章を書いていても、筆者の先の質問では、助詞の使い方がほとんど平安時代女性のそれに一致していた。

この年表において、例えば、平安時代の女性の世界認識にとどまっている共感覚者女性について考えると、平安時代の「が」は、まだ主格標識ではなく、能格（筆者の言う希格か能格）の段階にあったのであるから、たとえ現在、この共感覚者女性が「私が」などと「が」を使って日常会話を行ってはいても、それを他の一般日本人の用いている「が」と同一視してはならないことになる。また、この女性の世界認識が平安時代の女性と同等の段階にとどまっていることは、筆者の行ったような実験において、この女性が「が」を抽象概念主体や状態主体には付けないことからも、明らかになるのである。

以上、一個人の母語獲得過程が人類の自然言語の変遷過程に合致することが、共感覚者においても例外ではなく、むしろ共感覚者の場合は、一般の男女よりも文法の変遷が遅く、さらに成人後も主格言語の段階に達しないため、母語獲得過程についての記憶も正確であることが示された。そして、何より、同じ現代日本語を母語として用いてはいても、一般の男女と、共感覚者とでは、実際の世界認識が大きく異なることが浮き彫りとなったのではなかろうか。

スラフォーリア上級解説（15）
上級解説（15）（中我態）
公開: 05/30/2009 00:58:26

中間構文

能動態と受動態の区別、「自分が他者にはたらきかけること」と「他者が自分によってはたらきかけられること」との区別が、いかに近現代の主格言語にしかない概念かということを言うには、中間構文を語らねばならない。例えば、次の二文を検証する。重度の自閉

症者には、これらの区別が付かないことが知られるが、重度の共感覚者・解離性障害者・性犯罪被害者女性などでも、全く同様のことが起こる。

私は髪を切った。
私は目を閉じた。

一般の日本人は、文法的には全く差異のないこの二つの文を読んだとき、前者を「私は美容師に髪を切られた」、後者を「私は自分で自分の目を閉じた」と理解する。すなわち、動作主の「自他」の区別を無意識に行っている。前者では、「髪を短くしたい」と思った意志者は私、「髪を切った」行為者は美容師であり、後者では意志者（目を閉じたい）・行為者（目を閉じた）ともに私である。
会話の当事者同士でこのような抽象的な思考と状況把握が可能となるには、「髪は床屋や美容院で切ってもらうものである。」あるいは「自分の目を他人に閉じてもらう状況は、一般の社会生活では、まずあり得ない。」といった認識が、当事者同士に共有されていることが必要となる。一般の日本人の場合、この種の「文法への無頓着」は、多分に「後天的・社会的に」身に付いたものであることが分かる。すなわち、日本人の世界認識の驚異的な西洋化・主格言語化に、日本語の文法のほうが追い付いていない。
同様の例としては、「昨日、車を修理したんだ。」、「先日、手術をしたんだ。」、「旅行先で写真を撮った」などがある。車を修理した人、手術をした人、写真の撮影者が、話者本人でなく、修理工や医者、同行した話者の家族などであることは、聞き手に問題なく伝わる。
また、例えば「彼女は服を着た」の文について、この「彼女」が成人である場合には、「彼女は他人の手によって服を着せられた」の意に解する人は、ほぼいないだろう。もし「彼女は髪を切った」（背後に美容師の存在を想起させる）と同様に、「彼女に服を着せた人」の存在が想起されたとすれば、親が子に服を着せる、着付け師が女性に着物を着せる、など、特殊な状況で発話された場合であろう。あるいは、自分で服を着たのでない場合は、「着物を着せてもらった」（「もらい」構文）、「服を着せられた」（受身構文）などと、明確に表現するだろう。「私は着物を着て、記念写真を撮りました」の場合は「着物を自分に着せた」のは着付け師、「私は制服を着て学校へ行った」の場合は「制服を自分に着せた」のが彼女自身であることは、一般日本人には何の問題もなく理解されるだろう。一般日本人がやっているこのような不自然な作業（世界認識と文法とが一致していない）は、我々共感覚者や自閉症者からすれば、驚異的なことである。親や他人にしてもらっていた「服を着る」行為を、成長につれて自分自身でするようになるのと違って、「散髪」という行為が、成長過程あるいは時代を経ても、なお他人の手によってなされる行為であるがために、「私は美容師に髪を切ってもらった」、「私の髪は美容師によって切られた」などという言い方をしなくても、コミュニケーションに支障がないというわけである。
また、同様の差異は体の部位によっても見られ、「彼女は爪を切った」の場合は、容易に「彼

女自身が爪を切った」の意に解される。話者が行為を及ぼそうとする対象（ここでは彼女自身の身体部位）が、話者自身の身体能力の範囲内、あるいは話者自身の年齢において可能な行為の範囲内にあるためである。髪を切ることや手術をすることは、たとえ大人であっても、この限りではない。また、「少女は、爪を切ってから、外で元気に遊びました」のような場合は、背後に「その子を外に出す前に、爪を切ったお母さん」の存在が想起されるために、「爪を切ってから」の箇所は、事実上「爪を切ってもらってから」「爪を切られてから」と解されている。
現代日本人は、このような複雑な西洋的世界認識を、瞬時のうちに行って文明生活を営んでいる。言い換えれば、口から発せられるセンテンス（文）の構造は、日本語古来のそれ（受身を能動文で表現する）を保っていながら、実際の世界認識は、日本語の文法よりも印欧語ないし英語的なそれそのものと言える。むしろ、自民族古来の言語の文法を変えずに欧米文明に親和できた民族は、まことに稀有である、あるいは日本人しかいないと言って過言ではないであろう。ところが実は、重度の共感覚者、対人恐怖症者、自閉症者などには、先の二文の違いが分からない。分からないほうが当たり前なのである。日本語の文法は、まだ潜在的にはこういった人々の世界認識を適切に表現し得る力を何とか残しているのである。
　世界の少数・先住民族や東南アジアの言語は別にして、いわゆる先進国の言語でありながら、このような文法構造を残している国（ないし民族）は、日本をおいて他にはなく、現欧州語においては、古典ギリシア語まで遡らなければ、現代日本語と同じような中間構文的な世界認識が見当たらない。古典ギリシア語では、受身的な意味を能動文で表現するこの構文を「中動態」と呼び、能動態や受動態と区別している。一般には「中間構文」「能動受動態」などと呼ぶ。新訳聖書では「福音を述べ伝える」意の動詞「エヴァンゲリゾー」が中動態で多用される。すなわち、自分が他者に一方的に伝えるのでも、他者によって一方的に伝えられるのでもなく、自他が福音を共有することに重点が置かれる。現代において中動態ないし中間構文を残している言語は、例外なく能動と受動の厳しい対立に移行しつつあり、欧米語と同様の道を辿っている。
日本語は、元々この中間構文を持つ言語であり、日本人の世界認識もそうであったが、能動態と受動態の区別しかない欧州語（特に英語）圏で発達した「自我」「個人」といった概念を急速に輸入したために、「言語」と「世界認識」とが今でも乖離している。

　英語では、「I cut my hair.」と言って「私は美容師に髪を切ってもらった」を意味することはできない。英語の「I」は「私」ではなく、主語と主格と動作主体とが一致することを示す人称代名詞である。「I had my hair cut.」すなわち「私は、美容師から髪を切られた、という状態にある。」と、自我と他我との区別を文法上でも明確に表明する。我々共感覚者・自閉症者からすれば、一般日本人は、本当はそういう日本語をしゃべるべきなのである。そうしてくれない限り、事態把握が困難である。「This book sells well.」（この本はよく売

れる）や「This knife cuts well.」（このナイフはよく切れる）など、現代英語にも中間構文に似た構文はあるように思えるが、本を買う不特定多数の人々やナイフを使う人が誰かということは重要ではなく、英語では多くは無生物が主語に立つことになり、日本語の中間構文的な表現とは全く異なる。「私は髪を切ったんだ。」に該当する現代英語ないし現代印欧語は存在しない。「I had my hair cut.」の主語は確固たる個としての「我」を持つ「I」であり、「私は髪を切ったんだ。」の主語は「場」でしかない。

私が出会った一部の共感覚者の女性や離人症の女性、自閉症の女性の中には、冒頭の「彼女は髪を切った。」と「彼女は目を閉じた。」の文の意味上の動作主が異なることが全く理解できない女性がいる。彼女たちには、今の一般の日本人が英語的に前者を受動文、後者を能動文と瞬時に（無意識に）把握していることが理解されない。すなわち、「髪を切った」のが自分であるのか他者であるのか、「目を閉じた」のが自分であるのか他者であるのかが、世界認識の中心にない。こういった世界認識の仕方は、地域社会が一定の伝統や風習を守っている状況では支障がないが、「個人」対「個人」が厳しく対立する分業化社会では、満足に生活を送ることを難しくする。従って、こういった女性たちに「私は髪を切った」、「私は目を閉じた」とだけ言うと、「髪を切りたい」「目を閉じたい」と思った意志者が「私」であることまでは理解できても、前者の行為者を確固たる他者である美容師に、後者の行為者を確固たる自分である私自身に収束させることができない。その中で、明治以降ないし戦後の欧米的世界認識に立脚した現代日本語を母語として生活することを余儀なくされる。こういった上古代日本語的な世界認識を残していることが原因で公的な場においてパニックに陥る（人前で話せない、電車に乗れない、など）ケースが、特に共感覚者の女性に多いことを確認した。男性の場合、このような世界認識を持つ場合は、ほぼ必ず言語障害ないし知的障害を伴っているようで、体験を自らの力で言語化できる私のような男性は、今ではほとんど残っていないと思われる。その結果、「対人恐怖症」や「うつ病」など心の病に関する誤ったレッテルが女性に対して多く貼られる一方で、「自閉症」や「言語障害」など脳と体そのものの障害に関する誤ったレッテルは男性に対して多く貼られることとなるのであろう。

「中間構文」的な世界認識を今でも日常的に行っている言語の一例として、マレー語を挙げておく。むろん、このような言語圏においては、自閉症や離人症、共感覚者なる概念自体が存在しない。

Saya membaca buku itu.　（私・読む・本・その）
Buku itu say abaca.　（本・その・私・読む）

多くの現代日本人なら、前者を「私はその本を読む」、後者を「その本は私によって読まれ

る」と訳したくなるところだが、マレー民族の世界認識には能動や受動という区別がない。西洋の言語学者は、常に能動と受動、すなわち自我と他我との区別によって世界の言語を解釈してきたが、現代の日本人も、現代マレー語の世界認識が古代日本語にもあったことが理解できなくなっている。このマレー語についても、「me」が付くのが、能動行為を表すときなのか、行為動詞には全て付くのか、それ以外であるのか、西洋の言語学は結論できないでいる。「能動か受動か」という問い自体が不適切であることに、現欧米語話者は気付かない。

ただし、現代日本語でも、口語では「私、本読む。」などと言う。「私は本を読む。」と主語や目的語を明示しなくとも、あるいは「本、私読む。」と語順を入れ替えてもコミュニケーションが可能であることは、日本人が今でも深層意識では能動と受動の区別を行っていないことを暗示する。先のマレー語の訳は、助詞を用いない「私、本読む。」に近いと言える。しかし、少なくとも中間構文的な世界認識に生きる筆者の私から見る限り、あるいは私が共感覚者・自閉症者の日本人の言語の特徴を見た上で一般の日本人の世界認識に立ちかえる限り、一般の現代日本人は、「私、本読む。」において、主語を「私」、目的語を「本」と認識しているだろうと思う。

私自身の共感覚について言えば、対女性共感覚は、極めて中間構文的な様態を呈していると感じられている。例えば、ある女性が月経にさしかかっていることが私に分かったとき、「私はその女性の月経を発した」なる中間構文を使いたくなる。「私は髪を切った」が、「私は髪を（理髪師によって）切られた」、「私は髪を（理髪師の手に委ねて）切った」ことを意味するのと同じく、「私はその女性の月経を発した」も、「私はその女性の月経を（その女性によって）発せられた」、「私はその女性の月経を（その女性自身に委ねて）私に向かって発した」ことを意味している。言い換えれば、かつては男性が広く持っていたであろう、女性の身体情報を感知するこの能力は、男性にとっては「自分の意志が為す能力」とも「女性自身の意志が為す能力」とも感じられておらず、ただ「自然の一員としてのオスである自分が為す能力」としか感じられていなかったであろう。このことから、少なくとも私の対女性共感覚を表す文法は、現代日本語や欧州語には存在し得ない。このような中間構文を現在でも有するマレー語、インドネシア語は、筆者にとっては羨ましくてならない。

しかしながら、現代日本語では、そういった世界認識が全く反映されないかと言えば、かろうじて残っているのである。
日本語においては、自発・可能・受身・尊敬の四つの意味が、助動詞「る」と「らる」によって表されるとされてきたが、これも非常に西洋的な手法での分析の結果であって、やはり上古代日本人はこれら四つの違いを認識していなかったと見るべきである。
次の現代日本語を見てみる。

「展示品をこのように並べたほうが、お客様にインパクトが与えられるでしょう。」

これは、筆者が実際に耳にした言葉であるが、これを口語として聞いたとき、不自然であると感じる日本人は、現代でも少ないであろう。先の説明によれば、この例文は次のように分析できるはずである。

「お客様にインパクトが自然と与えられる（自発）」
「お客様にインパクトを与えることができる（可能）」
「お客様がインパクトを与えられる（受身）」

先のように話したある日本人は、これらの区別を全く考えずに言葉を発したはずである。なぜならば、先に見たように、述語が可能表現であるときには、対格として「が」を使うこともある上、この文の助詞の使い方では自発と受身の違いはそもそも明確でない。「に」を「お客様におかれましては」と取るならば、「尊敬」とも取れてしまう。むろん、こういった世界認識は現代英語や現代欧州語の母語話者には存在しないものであって、今の例文は、今でも日本人は、「る」「らる」（「れる」「られる」）を時に上古代的な世界認識のままで用いることがあることを示す、良い例である。事実、これら三つの意味の混合した状態を、聞き手側もそのまま認識するのだから、コミュニケーションには何の支障もない。

受動態は、自我と他我、自分と他者とが対立的に把握される世界認識のもとで発達する文法であるから、印欧語が祖語の段階からそうであるのは言うまでもなく、日本語でも武家政権の誕生とともに文法が急に変化し、受身表現が比較的明確になり始めたのは当然である。しかしそれは、あくまでも「受身」であって、印欧語的な受動態ではあり得ない。印欧語では、話し言葉と書き言葉とで、受動態の用い方が変わらない。

「私は驚いた。」
「私は驚かされた。」
「I was surprized.」

日本語では、現在でも「私は驚かされた。」を単文として話す人はいないであろう。現代英語では、「I was surprized.」しかない。すなわち、自発的に驚くということはなく、驚くという心理状態は、必ず「～によって」という、他者や対象物との対立的関係を前提としている。

もっとも、「る」「らる」は、最初は自発の意味として生じ、のちに可能・受身・尊敬の意味が加わったと説明されるのが一般的である。受身としては、無生物に用いられることは中世になるまでは少ないと言われてきた。しかし、実際は、それまでにも無生物主体の

「る」「らる」表現は話し言葉を中心に見られ、中世になると無生物においても「受身」の意味が独立してきた、と見るべきなのである。実際、上古代にも無生物主体の受身的表現が多かったことは、文献の緻密な分析によって明らかになってきた。
（宮地幸一（1968）　「非情の受身表現考」『近代語研究　第二集』　武蔵野書院
小杉商一（1979）　「非情の受身について」『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社
奥津敬一郎（1983）　「何故受身か― 視点からのケース・スタディー」『国語学　第三十二集』）

日本語は、話し言葉での無生物主体の受身表現の使用頻度は上古代からあまり変わらず、ひとえに書き言葉では受身表現の使用頻度が高い。田中道治氏は、「非情受身とその類似機能表現」（2002）の中で、有対自動詞の存在と話し言葉でのその多用が、無生物主体の受身表現の使用頻度が少ない要因である、と述べている。

スラフォーリア上級解説（16）
上級解説（16）（斜格の優越性）
公開: 05/30/2009 01:04:06

●斜格の従属性の有無

あらゆる言語において、無標・絶対格の次に、初めて明確な形で現れる格標識は、具格であると言って差し支えない。現在では、例えば英語では、具格的な意味は主に by、ラテン語では奪格的な意味を持つ ab で表されるが、これは主格言語の能動態と受動態の区別におけるはたらきであって、今言う具格言語とは、のちの主格の原点となる格が初めて絶対格と区別される形で現れた、それを筆者は具格と呼ぶのである。
古形の具格標識を現在でも残すウラル諸語を見てみる。ハンティ語においては、名詞の格と呼べるものは与格 a の他には具格 nəしかない。「私はあなたに魚を与える」「犬があなたを噛む」において、「私は」「犬が」は具格をとる点は、筆者の実験で共感覚者・自閉症者が示した結果と合致する。（「私で扉が作る」「私で花が見る」など。）

具格が主語に立つことは、その言語が具格言語である証拠であるが、トゥルン語では、三人称を主語とする他動詞文でのみ、主語が具格と同形の能格をとるとされる。だが、能格と具格が同形であるのではなく、それはすなわち具格であって、トゥルン語が筆者の言う識格言語と具格言語との中間に位置することを意味する。

mü_ü-ka go laura¯-ka yal-ŋiri
男- 能格私棒- 具格打つ- ３単・１単・過去
「男が私を棒で打った」

共感覚者の中で、「私で扉で作る」と答えた女性が多かったが、トゥルン語の世界認識とほぼ同等である。彼女たちはこれを絶対格的に把握しているため（「私で扉で作る」と答えた女性は、必ず「私の扉の作る」も併記した、など）、筆者はこれを識格言語の結果に入れたわけだが、トゥルン語では ka は「～によって」に当たる意味に認識されており、能格と言うよりは、まさに筆者が具格言語と言うときの具格に等しい。上の例文は、「男によって、私、棒によって、打つ」である。

中国雲南省・四川省・貴州省・広西チワン族自治区に住む彝族が話すロロ語は、二人称単数以外は、主格・対格・属格が全て同形という特徴を持つ。

ロロ語の人称代名詞
単数双数複数
１人称 ŋa ŋai ŋoγo
２人称 nɯ／ni（属格） nɯi noγo
３人称 tsh_ tsh_ni tshoγo

しかし、ロロ語には具格・能格同形の kɯなる接辞があることから、主格・対格・属格は絶対格と呼ぶべきものであることが分かる。共感覚者の中に、(1)の(a)のみを「で」とし、それ以外は無標か全て同じ助詞を入れた人が多かったが、このロロ語も、いかに一個人の言語獲得過程の幼児期に該当する段階を呈しているかがよく分かる。

具格がのちの主格の原点であった痕跡は、現代日本語にも残っていないわけではない。

風（　）扉（　）ひらく。
皆（　）扉（　）ひらく。
二人（　）扉（　）ひらく。
私（　）扉（　）ひらく。

一般の男女では、「皆で扉を（が）」「皆が（は）扉を」「二人で扉を（が）」「二人が（は）扉を」「私が（は）扉を」「風で扉が（は）」「風が（は）扉を」のどれかに回答が収まったのに対し、共感覚者では「私で扉が（は）」を加えて、四例とも一様の回答にしてしまう。言うまでもなく、一般の日本人は、無意識のうちに、確固たる「私」と他者、有生物と無生物とを峻別するがために（正確には、自然現象に対して生命性を感じなくなったために）、「私」にのみ具格標識を付けないのである。

上古代日本語に「私で」なる表現がなかったのは、むしろ「が」が、元は絶対格、のちに属格や具格のはたらきをする接辞であったからで、「が」が主格に特化されたがゆえに、「で」が具格となったのである。「私で扉が」と回答した共感覚者は、上古代日本人の世界認識に合致する。

オビ・ウゴル諸語に属するマンシ（ヴォグル）語では、処格や奪格と並んで具格が主語となり得るが、これは筆者の言う及格に近い。この言語は、主格言語とされるが、主格を具格と区別して、後者が主語のときを能格言語的であると説明するのは、主格主語を明確に認めたいからにすぎない。これらの主格・対格・属格（これら三者は全て同形）・具格（及格）は、オーストロネシア語族の焦点標識と同等である。その中で具格が特に強調されるのである。「老人は斧で木を切った」「女の子が着物を着た」「私は老いた老人と食卓についた」の「斧で」「着物を」「老人と」は全て具格で標識される。対象物や他者に変化・影響を与えるという点で、筆者の言う及格とよく合致する。

スラフォーリア上級解説（17）

上級解説（17）（時間の非直線性）

公開: 05/30/2009 01:17:01

●時間の非直線性

文法において「時間」なる概念がどのように反映されているかを示す指標には、時制、相、法といった概念がある。時制とは過去・現在・未来、相とは進行・完了、法とは直接法・接続法などを表す。しかし、これらに共通していることは、時間を「過去から未来に向かって直線的に流れるもの」と見なす民族や宗教圏でしか成立し得ない論理であるということである。事実、時制、相、法の概念は、主格言語特有の論理でしかない。

印欧祖語では、すでに紀元前に時制、相、法は別々の概念として独立しており、それはここ数千年を経て、現代英語のように時間を幾何学的に区切る世界認識へと到達した。現代英語においては、時制・相・法が互いに混ざり合うことはなく、「do」から「will have been doing」まで、極めて分析的な時間感覚を持っていることは言うまでもない。

現代フランス語のように、現在形と進行形とを文法上は区別しない印欧系言語もあるが、むろんこれは、時制・相・法の区別が明確となったあとの時期に起こった変化であって、非主格言語の時間感覚とは似て非なるものである。

非主格言語の時間認識の特徴は、そもそも時間と空間とを別物と思わない相対論的な認識を持っていること、過去・現在・未来という概念がなく、過去と未来とは等しく「現在から見た距離感」でしかないこと、過去や未来という概念がないのだから、むしろ行為の

進行性や完了性にのみこだわること、などが挙げられる。

まず、日本語で見てみよう。現代日本語では、「私は座っている」と言ったとき、「まさに座ろうとしているときの動作」ではなく、「座った状態にある」ことを意味する。明確に動作を表す動詞（走っている、食べている、など）では、「～ている」は進行を表すが、「座っている」では完了の継続を表す。進行を表すには、「座ろうとしている最中である」などと言わねばならない。しかし、こういった特徴は、英語・欧米語の時間感覚が輸入された明治時代以降にのみ見られるものである。

本来、日本語は、過去や未来といった直線的な時間認識を持たず、進行と完了とを区別する言語である。現在でも西日本ではその残影が見られ、「座りょおる」は進行・継続、「座っとる」は完了・状態を表す。これは、「座り・居る」と「座り・て・居る」、すなわち接続助詞「て」の有無の違いによる。筆者の故郷岡山では、現代でも、南部の都市部であってもこれらを区別するほか、山陰や四国・九州の過疎地域でも、これらを区別している。古語の「り」「たり」は、完了と進行を表すと言われるが、厳密には「むらさきだちたる雲の細くたなびきたる」のように、むしろ存続という概念がふさわしい。それだけ日本人の行動様式には、瞬時に大きな動きをするような「進行形」的な行為がなかったということになるが、元々、進行・存続・継続・完了といった概念は、人間も含めた自然現象（風雨・雪月花・男女関係の有りようなど）を写し取ったものであったと筆者は考える。そうしたところに、急激に西洋文明を輸入したために、外界に急変を与える進行的な行為と、穏やかに存続している状態とを、区別する必要に迫られた。そのために、「座りょおる」と「座っとる」が生じ、それがしばらく続いたのだが、ついに欧米文明の影響を最も受けた東京語が全国語となるにつれて、「座っている」の単一表現となった。これこそ、現代フランス語や現代ドイツ語や現代イタリア語や現代スペイン語が、現在形と現在進行形とを区別しないのと、同じ現象なのである。現代英語の現在進行形「be ～ing」は、そのさらにあとの時期、筆者の言う主格言語の時期に生じた文法変化である。日本語の「座りょおる」と「座っとる」の区別は、活格言語時代までの特徴であって、「座っている」に一本化されたとき、日本語は主格言語Ｉに達したのである。従って、現代日本語の「私は走っている」と「I’m runnning」とは、実は全く異なる時空観に基づいた表現であって、本来は翻訳不可能であることが分かる。

日本語の進行形と英語の進行形が、全く異なる世界認識に基づいていることは、その成りたちを見てもすぐに判明する。

ここで朝鮮語を見てみる。朝鮮語は、今でも半島全体を通じて、進行と完了とを区別する言語である。進行形は「Ｉ-고 있」、完了形は「Ⅲ-있다」である。これらの使い方は、先の西日本方言に残る進行と完了の区別の仕方と同様の現象である。

中国語も、進行と完了とを区別する言語である。進行は「在、正、正在、呢」、完了は「着」で示される。これら朝鮮語の例も、中国語の例も、現在の英語はじめ印欧語系

の言語における進行と完了の区別とは、全く異なる時空観に基づいているものである。

一方で興味深い現象もあり、日本語においては印欧語文明の影響を受けやすい都市部から順に、その文法も印欧語化していくのに対し、印欧語文明圏では反対に、農村部から順に、非印欧語的な特徴に後退する例が見受けられる。例えば、ドイツ語においては、厳格な時制、相、法の区別を廃して、再び進行と完了とを活格言語的に区別しようとする動きが見られ、ラインラント地方にその傾向が大きいことから、ラインラント進行形（rheinische Verlaufsform）なる表現が生じた。進行相を「sein ＋ am または beim ＋動名詞」とするもので、「私は読んでいる」の意味で"ich bin am Lesen"、"ich bin beim Lesen"などと表現する。これは何よりも、現代英語のように直線的な時間認識の結果生じた進行形ではなく、むしろ俗語的、反印欧語的な表現に前戻っているという意味で、興味深いのである。

さて、進行と完了とを区別するということが、本来は活格言語時代までの特徴であり、ひとえに現代英語やその周辺の印欧語の進行と完了の区別のみが、異なる段階を進んでいるものであることは、示されたことになるが、進行と完了とに区別があるのならば、その行為の主体の格標識にも区別があるはずである。さらに、活格言語とは、主体の状態・存続については、未だ自然の成すことと認識され、主体が人間であっても格標識が付かない言語段階なのであるから、「私が扉を作りょおる」「私が座りょおる」と、「私、座っとる」の区別に該当する区別を持つ言語が活格言語ということになる。そして、そういった言語が現在でも存在するという例を挙げておこう。

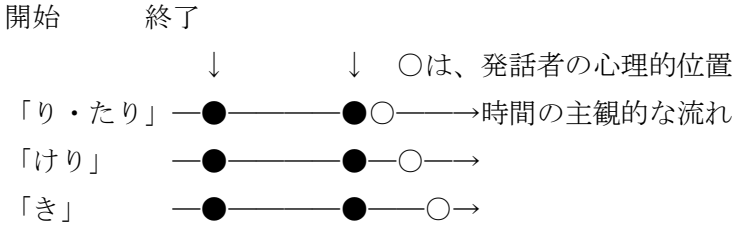
wa-t’i（私は住む）
ma-sica（私は悪い）
ma-ya-k’te（私はあなたを殺す）

これは、スー語族に属するダコタ語の例である。「私は」を表す「wa」と「ma」に注目すると、他者に影響を与えない状態であるはずの「住む」と「悪い」とで、主体の格標識が変わっていることが分かる。

●過去

上古代日本人の時間認識についてしばしば議論に上るものに、「き」「けり」の違いというものがある。「き」は経験過去で「けり」は伝聞過去という説、または事実過去（過去の事実）と発見過去（あとからそうと気付いた過去）という説、完了過去と存続という説など、西洋の言語学の時制、相、法が複雑に混ざり合った多くの説が出されているが、その正誤を判定することは大変に困難な状況にある。しかし、筆者が共感覚者に対して行った実験に基づいて作成したこの人類の言語変遷過程表に従えば、実に整然と説明されうると思う。

行為・状態の



「り」「たり」は一般に完了・存続と見なされているが、「き」「けり」の議論に重ね合わせて、それら三者は「行為・状態の終わった時点と発話者の現時点との主観的時間的距離感」の違いと見なすことができる。そうすれば、「り」「たり」は、必然的に存続・完了に多用され、「けり」は現在と心理的につながっている過去として多用され、「き」はそれよりもさらに心理的に遠い単純過去として多用される、という説明が付くのも頷けることになる。

現在では、「り・たり」を相の問題、「き」「けり」を時制の問題として西洋の時間認識に当てはめるから、説明が付かないのであって、時制と相とを混ぜてとらえるということが必要であろう。

もっとも、現代日本語の過去形「た」は、「たり」の変化したものであり、このように完了の接辞が過去の接辞に転化していく傾向は、印欧語にも見られるとの見解があるが（松本克己 (2006), "言語圏として見たヨーロッパ") , 世界言語への視座 —歴史言語学と言語類型論—, 東京: 三省堂、これも、通時的な人類の言語変遷過程を見誤った結果ではないかと思う。完了・存続の「たり」が過去の「た」になったような変化は、印欧祖語においては紀元前の有史以前に終わったものと筆者は見ている。日本語の「た」の誕生とそれに伴う時制と相と法の分裂、現代日本語性の確立は、印欧語圏においては、印欧祖語、少し甘く見てもラテン語やサンスクリットの成立の時期に当たる。印欧祖語の、ゲルマン語やラテン語やインド・イラン語への分裂は全て、時制、相、法の厳格な独立のもとに起こったものであるから、それらの言語には、時制、相、法の概念を難なく適用することが可能なのは、当然のことなのである。（もっとも、印欧語の仲間であるサンスクリットは、言語それ自体としては厳格な時制、相、法の文法構造を持っていながら、相対論的時空観を持つ仏教を記述した言語である。これについては機を改めて論じる。）
現在の印欧語で、時制と相とが必ずしも独立的でないように見えるのは、まさに我々日本人の世界認識の仕方で印欧語を見るからなのであって、「現在の結果や状態をもたらした行為は、必ず過去に始まり、過去に起こったことである」ということから、時制と相はお互いに密接に関係している、というのみである。

例えば、フランス語では、現在完了形が過去として日常的に使われ始め、単純過去は歴史的事実、普遍的事実などに限定されるようになったが、これはむしろ、過去・現在・未来を厳格に区別するようになって実生活にそぐわなくなってきたため、再び過去における進行と完了とを区別する方法を獲得しようとして生じた変化である。これを、江戸日本語から明治日本語に至る、「たり」から「た」への変化と同等に扱うなどというのは、それを

見る我々現代日本人の世界認識自体の欧米化の結果にすぎない。もっとも、現代日本語は、「書く」と「書いた」、「走る」と「走った」を、概ね現在形と過去形として使い分けているから、時間を「過去から未来へと直線的に流れるもの」と見なす主格言語であると言うほかない。

●未来

現代日本語で未来を表す表現は、「う」「よう」である。これらは、推量と意志のどちらにも使える。例えば、「書くだろう」は推量を表すが、断定の「だ」を省いて、「書こう」とすると途端に意志的な表現となる。「そういうこともあり得るだろう」とすると推量であるが、「あり得よう」も、同じ推量として使える。いずれにせよ、現代日本語の母語話者の世界認識では、推量と意志とは互いに独立していて、主に前者は「だろう」、後者は「う・よう」で表されることが分かる。

江戸時代中期頃までの日本人は、推量と意志との区別を認識しておらず、どちらも「む」で表し、区別しようという意識も見られないことに注目したい。意志的に行う行為と非意識的な行為とが区別されるようになった時期とは、筆者の言う意格言語の時期である。すなわち、「笑う」「泣く」といった行為は、「転ぶ」「落ちる」などと同様に、能格言語の時代では未だ「自然現象」としてしか認識されていなかったのが、それらが区別されるようになった時期である。こういった分化は、印欧語では祖語の段階でそれが起こったが、我が国では江戸時代に入ってもしばらくは「む」が推量と意志の両方を表していた。

ここで再び、現代英語の「will」も未来と意志とを表すではないかとの反論があろうが、これも先の過去の説明と同様である。「will」が表すのは、推量ではなく、あくまでも未来である。古英語の時点で、すでに時制、相、法は完全に独立した概念であって、「will」は意志、「shall」（聖書に多用）は義務を表すというような役割分担さえあった。これらがのちに未来の意味を表すようになったのが、現代英語の「will」と「shall」であって、これらは本当は「だろう」や「しよう」と訳すことができないものである。

スラフォーリア上級解説（18）

上級解説（18）（証拠性と蓋然性の連続）

公開: 05/30/2009 01:18:12

●証拠性と蓋然性の区別の有無

非主格言語の今一つの特徴は、証拠性が、名詞や動詞ではなく、接辞（日本語の助詞や助動詞）で表現されることである。証拠性とは、述語における証拠の種類を表す概念であ

り、現代日本語では「するそうだ（伝聞）」「しそうだ（様態）」「ようだ（不確実断定）」「らしい（推定）」などがそれに当たる。日本語ではこのように、証拠性は基本的に助動詞で示される。筆者の言語変遷表では、これらは全て、名詞と動詞の区別もない単語羅列言語時代から識格言語にかけて名詞や動詞といった区別がぼんやりと現れる中で、その中間的な品詞として生じた品詞（今の助動詞）に端を発すると見ることができる。

例えば、「石、落」という単語の羅列があったとして、それが識格言語時代に「石、落ちた」となる。この中には、「石、落ちた、ようだ」といったある種の表現があり、これが助詞からも動詞からも区別されて助動詞という概念に至ったと考えられる。

一方、現代英語においては、証拠性表現は実に乏しい。証拠性をどうしても表現しようとするならば、「look、seem、sound、feel」といった感覚動詞を用いる以外にないことは周知の通りである。あるいは、大勢の人は認めるだろうという意味で仮想の大衆を想定して「They say～」などと言ったり、「今にも～しそうだ」というのを「on the verge of doing」（～することの寸前に位置している）と言う。このように、現代英語、現代欧州語では、証拠性は、確固たる品詞としての名詞や動詞の、分析的な組み合わせによる表現でしかない。現代日本語の「雨が降りそうだ」に該当する表現はなく、「雨が降るということの直前に我々は位置している」といった表現に該当する表現しかない。

証拠性と間違いやすい概念として、蓋然性がある。これは、述語の可能性を示すもので、「だろう」「かもしれない」「にちがいない」などに当たるとされる。これらについては、現代英語でも「would」「might」「must」などの助動詞で表現される。ところが、上古代日本語では、そもそも証拠性と蓋然性との区別がない。それらは全て、「む」「むず」「まし」「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」「けむ」「べし」「らむ」「らし」「めり」などの使い分けで、連続的に認識されるものである。

なぜ現代英語や現代欧州語で証拠性と蓋然性とが区別されているかと言えば、時間認識の仕方が直線的であるからに他ならない。証拠性は、現時点でどれくらいのことを見聞きして知っているかということから過去時制と関係し、蓋然性は、これから起こることがどれくらい確実かということから未来時制に関係する。「すでに客観的に実在する事態や物体を主体がどれくらい知っているか」を表すのが証拠性であり、「文明技術の発展によって、近い将来客観的に予測可能であるはずのことが、現時点で主体にはどのくらい予測されているか」ということを表すのが蓋然性である。そうであるから、現代欧州語の文法というのは、主体がいようがいまいが、常に事態の実在性が揺るがないという前提に立っている。しかし、上古代日本語では、過去か未来かに関係なく、事態の判断は主観的・相対的であり、主体との心理的・時空的な距離感がそのまま事態の確実さや自分の意志の強さになる。そうであるから、例えば、推量と意志とが混ざった心境を表す「む」が、自分が昔に経験したり伝聞したりしたことに向けて使われれば、「け・む」となる。

もっとも、現代英語でも、接続法（いわゆる仮定法）では、未来を表すにも「would」「should」など過去形を使うではないかという反論もあろう。確かに、現代欧州語の時制を意味する

「テンス（tense）」は、元々「緊張」の意味であり、現時点の主体の位置との心理的距離を表しているように見える。そうすれば、仮定法で「If you wolud～」というのは、実現の可能性が低くても仕方がないという相手との距離感を反映しているとの見方が可能となるし、「would you～」が「will you～」よりも丁寧なのは、相手との距離を置いているからだという説明が可能となる。しかし、そうだからと言って、現代欧州語の母語話者自身たちが主張する時制、相、法の概念の独立性を揺るがすものではないだろう。現代欧州語の言う「時制」とは、時計の刻む等速的な時間に基づく過去、現在、未来であるし、相とはその時間認識に乗った進行と完了であり、法もまた、そういった時間認識の中で、ある一定の時間をかけて起こった（起こるであろう）客観的事態に対する主体の既知度や実現度を表すのだろう。

専門家からのご指摘

公開: 05/30/2009 12:00:58

サイトの一環として立ち上げたこの言語スラフォーリアのブログですが、早速、言語学の専門の方々（や、そうと思われる方々）からご意見を頂きました。

あえて私の言語への批判的意見をとりあげて、おおまかに分けますと、二点になると思います。

「このような言語を構築して、本当に共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性たちが自立意識を持てるだろうか。あるいは、社会に再び出ていける助けになるだろうか」

「従来の言語学用語から大幅に外れているところが多々あるが、どう折り合いをつけるのか」

まず、前者からですが、確かにそれができれば一番よいのかもしれませんが、私のスラフォーリアは、そこまでは問えないと思います。むしろ、私としては、そういった人たちが社会とうまくやっていけるようにするにはどうすればよいかを言語から考えたいとの思いは全くなくて、今のままで、共感覚者や被害者の頭や体のはたらきが、言語の歴史においてはどこに位置するのかを、一緒に知りたい、という思いが強いです。また、こういった方々が社会に出るようにするということも、あまり正しいことだとは考えていないふしがあります。

この言語の試みは、非常に珍しい、おそらくは「ここがゴールだ」などという時点がない試みだとは思うのですが、本当に悩み苦しんでいらっしゃる方々の内面を、それを現代日本語で説明できる（言語障害のない）共感覚者である私が説明してみたい、という欲求がずっとあります。

それから、後者ですが、例えば、今の言語学で「能格」という概念で表される範疇は、私の言語では「空格」「識格」・・・「意格」「活格」などと多数に分かれています。そして、この根拠は、言語学的分析ではなくて、実際の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・日本の幼児との交流の結果として、考え出してみた概念です。そうなると、「能格」という考え方も、正しいと言うよりは、現在の言語学が達している一抹の「よどみ」にすぎないのではないでしょうか。

実際に、その後に「活格」という概念が編み出されましたが、それでもまだ言語学者によっては、「能格」よりも原始的な概念が「活格」だと言う人もいますし、いや、「能格」よりも後に出てきたのが「活格」だ、と言う人もいます。私は、「能格」や「活格」という概念にも、実はあまり首肯できていないんです。言語の実態が変わっているのではなく、解釈とネーミングが変わっているだけだと思います。例えば、私は、ほとんどの日本人には「が」が「主格」だと認識されているが、重度の共感覚者には今でも「能格」と認識されていると感じています。それに、主格言語の成立過程には、私がメインブログで書いたような「西洋的自我」の成立、及びキリスト教の世界観とのかかわりがあるような気がしていますし、そこまでを記述すると、あまりにも膨大な言語論になりそうです。

「性犯罪被害を受けた女性の世界認識は、能格的である」
などという私の説が妥当かどうかは、言語学的にではなくて、そういった女性との実際の交流によって判断されるべきである気がしています。

そういう意味で、従来の言語学に当てはまるかどうかと言うよりも、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性たちの言うことを、言語障害なき重度共感覚者である私がそのまま書き綴ったら、どうなるか、ということを、そういった人たちと一緒に知っていければと思います。言語学そのものを目的とするなら、もちろんそれでよいのですが、私としては、本当にそういった人たちに使ってみて「安心感を覚える」言語探究でなければならないと思います。

いずれにしても、共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者からは賛同を得るのに、言語学に詳しい方々からは非難を受ける箇所がある言語観というのは、実は非常に面白いことなので

はないか、と感じています。

スラフォーリア上級解説（19）
上級解説（19）（真格と動詞の使い方）
公開: 05/30/2009 16:37:14

さて、ここからスラフォーリアの実践に入りたい。

■「切る」という現代日本語の単語と、それが表す意味について考えてみよう。

（A）自分で爪を切った場合
「私は爪を切った。」＝一般日本人健常者の日本語（主題格・対格、他動詞、能動態）
↓
一般日本人健常者には、「私」は近代西洋的自我・自分の身体の範囲内にピタリと一致している。
↓
重度の共感覚者・自閉症者には、「私」は近代的自我ではなく、「空我」から「活我」の連続体のどれかと自覚されている。このままでは、誰が私の爪を切ったかが分からない。
↓
分からないという状態をそのまま記述することを許すのがスラフォーリア。
↓
「私んの爪切りんたん。」（希格・絶対格、希動詞、心描言）
Wiunno tume kirintan.（ウィウンノトゥメキリンタン。）
（例えばこのように、希我のときは、希格を用いる。なぜならば、希我は、自分に利益が生じるようなときに意識される「我」であるから。例えば、人類が貨幣で交易を始めたような時代には、これと全く同じ文法の言語が行われていた。
インドネシア語・マレー語などは、今でもその文法を残す稀有な言語である。
Saya membaca buku itu.（私、その本を読む。）
Buku itu saya baca.（その本、私は読む。）
この二文について、現行の言語学は、どちらが主格か能格か、能動文か受動文かと議論しているが、例えば「能格」「意格」「活格」のどれかと見なすのがスラフォーリアの言語観である。
「爪」は無標の絶対格。）

（B）自分で木の枝を切った場合

「私は木の枝を切った。」＝一般日本人健常者の日本語（主題格・対格、他動詞、能動態）
↓
重度の共感覚者・自閉症者には、「私」は近代的自我ではなく、「空我」から「活我」のどれかと自覚されているが、木の枝を切る行為は、道具を使って自然界に影響を与える行為であるから、ここでは具格が最もふさわしかろう。
↓
従って、「私んで木の枝切りんたん。」とする。（具格・絶対格、心描言）
Wiunde kinoeda kirintan.（ウィウンデキノエダキリンタン。）

（C）美容室で髪を切ってもらった場合。

「私は髪を切った。」＝一般日本人健常者の日本語（主題格・対格、他動詞、中間構文）
↓
実際に頭の中で起こっている把握
「私は髪を切られた。」（主格・対格、他動詞、受動態）
「私は髪を切ってもらった。」（主格・対格、他動詞、「もらい」構文）
↓
現代日本の一般健常者では、文法（古形を維持）と世界認識（ほとんど英語的）とが大幅にずれている。
↓
重度の共感覚者・自閉症者は、「私、髪を切ったんだ。」の動作主を「私、爪を切ったんだ。」と同じく「私」ととらえ、美容師という他者・他我の存在を理解できず、「君が誰の髪を切ったって？」などと聞き返す傾向が見られる。
↓
スラフォーリアでは、世界認識が英語的で文法は古風な「中間構文」に代わって、「中我態」を設け、共感覚者・自閉症者に対して自我と他我の区別を要求しない。
「私は髪を切った。」「私は髪を切られた。」「私は髪を切ってもらった。」は、例えば希格を使えば、全て「私んの髪切りんたん。」に統一される。この場合の「私」は、近代的自我・自分の身体範囲とは無関係に自覚される、利益を感じる「我」である。
Wiunno kami kirintan.（ウィウンノカミキリンタン。）
↓
稀に、重度の共感覚者・自閉症者は、「私は爪を切った。」「私は木の枝を切った。」も「爪を切られた。」「木の枝を切られた。」などと把握する場合があり、前者は「他人に切ってもらった。」、後者は「自分に属する（自我が及んでいる）木の枝が切られて、痛い。」と認識される。スラフォーリアでは、（A）（B）（C）の文法上の区別がないだけでなく、知覚世界上の区別がなくてもよいことになる。

（D）手紙の封を切った場合
「私は手紙の封を切った。」＝一般日本人健常者の日本語（主題格・対格、他動詞、能動態）
↓
先の「木の枝」とは違って「手紙の封」という人工物であること、ここでの動詞「切る」は比喩的で、ほとんど「開ける」の意味であることなどから、重度の共感覚者・自閉症者にとっては概念把握が難しいことがある。
↓
こういう場合は、空格から活格までを自由に使い分けられる。
「私んで手紙が封切りんたん。」（具格・絶対格、具動詞、心描言）
・・・はじめてハサミという道具を使って手紙を開けることができた喜び、というニュアンス。
「私んが手紙の封切りいたん。」（意格・絶対格、意動詞、抽化言）
・・・切ろうという意志を持って外界を改変した、というニュアンス。動詞「切る」も「切断する」「cut」に近くなるので、抽化言活用をとる。心描・抽化・抽出の使い分けも自由である。）

（E）人との縁を切った場合
「私はAさんと縁を切った。」＝一般日本人健常者の日本語（主題格・対格、他動詞、能動態）
↓
「切る」対象が目に見えない抽象概念であり、重度の共感覚者・自閉症者には極めて理解困難。私純一のように、何の知的・言語障害もなく理解できる重度共感覚者男性は稀有。
↓
「私がAさん、縁を切りあたん。」（主格・対格、他動詞、常観言）＝今の日本語とほぼ同じ。
（この構文を使うだけで、重度共感覚者・自閉症者自身は「自分には理解が難しい概念である」ことを健常者に対して表明し、私のような言語障害なき共感覚者・アスペルガー症候群者は、自分よりも重度の共感覚者・自閉症者の世界認識はこういうものであるということを一般日本人健常者に対して主張することができる。）
↓
「と」を入れてもよい。（日本人は、幼少期には、「の」「が」の使い方があいまいだが、「も」「と」など、一部の格助詞は幼少期から間違いが少ないことは実証されているため。）
「私がAさんと縁を切りあたん。」
↓

「切りあたん」を「切る」に戻すと、一般健常者から見れば、普通の現代日本語を使えているように錯覚される（知覚世界が異なることが伝達できない）ため、スラフォーリアでは避けられる。
↓
さらに、「が」を「は」に戻すとどうなるか。
「私が A さんと縁を切る。」（主格）
「私は A さんと縁を切る。」（主題格）
一般健常者には、前者「が」のほうが「私こそが」との強調形と感じられるが、重度の共感覚者・自閉症者、さらに十代までの私純一には、どちらも主題格「は」のニュアンスと感じられており、我々にとっては変えても意味がない。重度の自閉症者は、「が」「は」のどちらかを入れろとの、しばしば小学時に出される問題を理解できない。換言すれば、今の一般日本人にとっては、「が」のほうはほとんど英語の「I」である。

■以上の例文を、英語にしてみよう。

（英語母語話者、及び一般の日本人が獲得する英語）
My hair was cut.（主格、他動詞、受動態）「私は髪を切った。」
I had my hair cut. （主格・対格、他動詞、能動態）「私は髪を切った。」
I cut my nails.（主格・対格、他動詞）「私は爪を切った。」
I cut branches.（主格・対格、他動詞）「私は木の枝を切った。」
I opened the letter.（主格・対格、他動詞）「私は手紙の封を切った。」
I broke off relations with A. （主格・対格、他動詞）「私は A さんと縁を切った。」

（重度の共感覚者・一般の自閉症者・世界中の幼児（英語圏も）・解離性障害者・脳卒中患者・性犯罪被害者などに見られる英語の間違い）
「私は髪を切った。」
I cut my hair .（中間構文のつもり）
I was cut my hair.（受動態のつもり）
I cut I hair. My cut me hair. Me cut I hair.（代名詞の自由な変更）
My hair cut I. I my hair cut.（語順の自由な変更）
I cut my hair. My hair cut.
（能動態と受動態の区別なし＝中間構文＝語順の自由な変更と同義）
I am my hair was cut. （髪を切られた状態に今ある。）

スラフォーリアは、これらの間違いを間違いとせず、全て許してしまう構文を基本構文として持つ。

「私んの髪切りんたん。」

スラフォーリア五十音図

公開: 05/30/2009 17:51:37

あいうえお　a,i,u,e,o
かきくけこ　ka,ki,ku,ke,ko
さしすせそ　sa,si,su,se,so（∫a,∫i,∫u,∫e,∫o）
たちつてと　ta,ti,tu,te,to
なにぬねの　na,ni,nu,ne,no
はひふへほ　φa,φi,φu,φe,φo（ha, çi,φu,he,ho）
まみむめも　ma,mi,mu,me,mo
やゆよ　ja,ju,jo
らりるれろ　ra,ri,ru,re,ro
わゐゑを　wa,wi,we,wo
がぎぐげご　ga,gi,gu,ge,go
ざじずぜぞ　za,zi,zu,ze,zo
だぢづでど　da,di,du,de,do
ばびぶべぼ　ba,bi,bu,be,bo
ぱぴぷぺぽ　pa,pi,pu,pe,po
ん　n

●サ行の発音は、現代日本語のサ行またはシャ行。重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・離人症者などの中に、区別が付かない人がいるため。（時代を遡ったり、女児退行を起こしたりする。）
中国地方方言にも、形骸化したものの、残存する。（広島方言の「～しなさい」＝「～しんしゃい」など。）
なお、アイヌ民族は、明治以降までサ行とシャ行の区別が聴覚上も付かなかった。近代化された日本語を母語とする人が増えて、その伝統的音韻体系は失われた。

●タ行の「チツ」は、現代日本語の「ティトゥ」（近世以前日本語の「チツ」）で発音。

●ハ行の子音は、現代日本語では「ハヘホ」と「ヒ」と「フ」で全く異なっている。「フ」

は「ク」からほど遠いが、「ヒ」はほとんど「キ」に近く、時代が下るにつれてどんどん両者は近づいている。
ところが、私は、重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・離人症者などにおいて、ハ行の発音が平安時代以前の発音（今のファ行やパ行発音）に戻る人がいることを確認した。（このことは、日本語のハ行が、かつてファ行やパ行であったとの定説を、さらに根拠付けるかもしれない。）
もっとも、幼児においては、まず「m」「p」「b」音の単語を発し（ママ・マンマ・ポッポ・ブーブー）、「h」音の発音は困難で、随分あとから身に付く。（幼児は、英語の「ママ」をしゃべっているわけではなく、発音しやすい音を発したら英語の「ママ」に聞こえているだけである。）
「重度の共感覚者・自閉症者などの知覚・世界認識のあり方や、性犯罪被害者女性における精神的な損傷の度合」と、「日常生活における実際の発音に見られる音韻体系の日本語史遡及・幼児退行」とが、密接に結び付いており、一方の度合いを見ればもう一方の度合いをある程度推し量ることができるとの拙説は、かなり真である可能性が高いのではないかと自分では見ている。
そのため、スラフォーリアでは、ハ行は、現代日本語のファ行（平安日本語のハ行）で発音することを許し、むしろこれを主とする。ただし、奈良時代のパ行発音にまで遡ると、今の外来語（ポットなど）が表せなくなるので、ファ行とは別に、明確な「p」を子音とするパ行を設ける。

●ザ行の「ジズ」とダ行の「ヂヅ」は、現代日本語では同じ発音であるが、戦前までは両者を区別する人が多く、現在では、山梨県奈良田方言など、一部にしか残されていないものの、重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・離人症者では、これらの区別が再び生じることがある。（ただし、「藤（ふぢ）」と「富士（ふじ）」といった古語の知識が必ずしもあるわけではなく、それが無くとも、普段の口の動き・発音において、「zi,zu,di,du」が現れる、との意味である。つまり、「藤」も「富士」も、「ふぢ」「ふじ」と言うことがある。古語の知識無しに時代を遡る事実が、かえってダ行の「ヂヅ」が「ディドゥ」であったことの根拠となっているように思う。）

http://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/narada/narada_tu&du.html（山梨県奈良田方言を話す男性の音声ファイル）
この発音は、重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性・離人症者などの発音に似ている。

●表記例
言語名「スラフォーリア」を表記すると、次のようになる。（元は、「スラポヲリア」であ

ったが、「スラフォーリア」となり、万葉仮名表記では長音「ー」を表記しなくなった。）

「寿羅穂（遠）里阿・須羅保（緒）李愛」：万葉仮名
「スラフォーリア」「すらふぉーりあ」：現代日本語
「スラホヲリア」「すらほをりあ」：平安日本語（「ホ」は「フォ」と発音）
「Sura Foria」：ローマ字
「Sura Φoria」：国際音声記号

スラフォーリアは対女性共感覚を記述できるか

公開: 05/30/2009 22:39:55

●対女性共感覚とは

衣類を身に付けたままの女性の身体情報、特に排卵と月経を、十数メートル遠方から、その女性に触れることなく共感覚（女性の身体情報が成す色や音）によって感知することができるという、現在では極めて限られた男性のみが保持する能力がある。私がこの共感覚を、「対女性共感覚」と名付けて研究してきたことは、すでに何度もサイトなどで紹介してきた。

私が持つこの共感覚は、私自身の研究によって、現在のところ、私を含め数人の日本人男性に確認されているが、ほとんどの男性は、言語コミュニケーション自体が困難な重度の自閉症を抱えている。何の知的障害もない場合でも、私を除いて、すでに十代前半でこの感覚を失い、現在まで持ち続ける「文字に色が見える」などの一般的な共感覚の端々にかつての対女性共感覚の残影を見るのみであると言う。このことは、私（二十六歳）ものちにこの共感覚を失い、何らかの記録に残さない限り想起不能になる可能性があることを意味している。ただし、これらの男性に共通しているのは、言語能力自体に問題があるのではなく、現代の男性社会に求められる人前でのコミュニケーションが極度に不得手である、という点である。このことは、私自身も、たとえこうして言語を操ってはいても、その世界認識が、現代先進諸国一般の価値観のもとに健常者と呼ばれる男性に比して、すでに何らかの著しい差異を呈していることを示唆する。

この対女性共感覚が、男性・オスのあらゆる共感覚の始原であること、全ての男児において生得的であること、また、現代のほとんどの男性においては誕生してから数年の間に盛衰し、物心が付く前に完全に消失すること、さらにこの対女性共感覚の発揮の程度や盛衰の速さは、多分にその男性の母語の文法、男性の属する民族特有の世界認識によって制御されており、現代英語・現代欧州語や現代日本語の母語話者の男性においては、対女性共

感覚保持者は、生まれて二年後以降はほとんど存在しない可能性を、今後とも検証したい。

●対女性共感覚の反主格言語性

私を含めたこのような男性において、日本の上古代語ないし近世（江戸時代）までの日本語、また、現在の非印欧語系の先住民族言語（アメリカ・インディアンの言語など）の文法について、母語として習得したはずの現代日本語の文法よりも、より生得的・本能的な知覚や対女性共感覚に合致すると認識していることに、私は注目した。いわば、表面的に話している語彙や音韻体系は現代日本語であっても、「見聞きしている」世界が、他の一般男性とは異なっている可能性である。換言すれば、一般の日本人が現代英語を確固たる外国語、日本の古語を外国語であるかのように認識しているのと同様に、私とそれらの男性は現代日本語を外国語のようにとらえており、自らの知覚世界がうまく現代日本語に乗らない違和感を共通して持っている。むろん、現代日本語は、西洋語の影響を多分に受けており、語彙の半数以上を占める漢字熟語は、西洋文明の様々な概念の翻訳である。従って、少なくとも私のような日本人男性による対女性共感覚は、大和言葉や呉音読みの漢語が優勢であった時代の日本人男性の世界認識と密接に結び付いていると考えることができる。もし現代英語や現代日本語のような文法よりも、上古代日本語や現在の地方に残る日本語の方言、消滅しつつある東南アジアや中国やアフリカや極寒の地の少数民族言語の文法のほうが、男性の根源的な能力を表現するのにふさわしく、また、そもそも自然言語の文法がそのような男性の共感覚を反映して成ったのだとすれば、反対に、そのような文法を現在でも多分に残す言語を母語とする民族の男性には、対女性共感覚が多く残っているだろうことを類推することは可能である。また、この共感覚が、男性の感覚として普遍であった時代が有史以前に数十万年に渡ってあったことが言語学的手法によっても示されることとなり、現代の先進文明諸国に限れば、欧米人男性よりも日本人男性のほうが対女性共感覚を残しやすい理由も明らかとなる。

●対女性共感覚保持者の男性の自閉症傾向

共感覚者に女性が多いということ、「音に色を見る」共感覚に至っては男女比 1 対 20 とも言われること、これらは言い方を変えれば、共感覚を持つ男性は言語障害など何らかの障害を持ちやすく（障害者と扱われやすく）、私のように自らの共感覚を言語化して語れるケースは極めて稀有であることを意味している。女性に対する何らかの共感覚を、いわゆる現在の重度の言語障害者の男性全てが残しているとは考え難いが、共感覚としばしば結び付けて語られる自閉症者は男性が女性の 3〜4 倍いることからしても、また私自身の経験か

らしても、共感覚の男女差の大きさ（共感覚者女性の多さ、共感覚者男性の感覚の異質さ）は否定しがたいものがある。従って、「男性では言語に支障が出るが女性ではそうならないような、ある共感覚の領域」があって、その領域については、未だに私の研究・調査の対象が、私以外は全て女性となっているのが現状である。
しかし、共感覚者の女性も、そうでない女性と比べて傾向がないはずはなく、むしろ男性である私の共感覚世界に近い点もあるのであって、言語活動・社会生活に何らかの支障（アスペルガー症候群・レット症候群・離人症など）を持つ共感覚者女性の世界認識の仕方が、特にある一定の傾向を示している。さらに、成人の前後に、図らずも性犯罪の被害者となった女性において、五感の分化がそこで止まり、母語である現代日本語の文法を上古代日本語的に認識していることが私の研究によって明らかとなった。これらの女性の世界認識や言語感覚を、私の対女性共感覚と徹底的に比較することによって、一般の言語活動や社会生活が全くできない男性の見ている世界を類推することも可能であろう。

●文化依存症候群

文化依存症候群なる概念は、私や一部の共感覚者男性の持つ女性の排卵・月経への感知能力の文化依存性を、より明確にするであろう。すなわち、現代の先進諸国の中で、かろうじて非印欧語的文法を残す現代日本語を母語とする日本人男性のほうが、現代欧米人の男性よりもおしなべて、この排卵・月経感知能力を脳と身体に残しやすい理由が明らかとなるからである。

もっとも、対人恐怖症が日本民族にしか起こり得なかったり、イムと呼ばれるヒステリーがアイヌ民族の女性に偏って見られたり、ピブロクトと呼ばれるヒステリーがイヌイットにしか存在しなかったりすることは確かであっても、その該当地域に居住する別の民族（日本に住むアメリカ人、など）がこういった症状を示すことはない。その意味では、文化依存症候群は、民族依存症候群と呼称すべきであろう。

重度の共感覚者が対人恐怖症、離人症、鬱症状、強迫神経症など、文化依存症候群的な症状を必ず伴っていることは、そもそも共感覚とそれらの症状との境界を設けることの是非を、脳科学者や心理学者に対して問い直すものである。これらの症状が、日本の急速な欧米化に対する少数の日本人の自己防御反応であると説明されていることは言うまでもない。

現代日本人の全員が罹患する症状でないにもかかわらず、対人恐怖症や「あがり症」などが我々日本人の精神的特質を物語っているのと同様、「いかなる共感覚能力が最も日本人男性が日本人男性たる特質であるか」の問いの答えは、現代の日本人男性のうち大半を占める非共感覚者男性の精神性や知覚能力を見ていても判明しない。皮肉にも、その民族特有の知覚能力や精神性は、むしろ、それらを有する人々が少数となったときに露わになり、

「対人恐怖症」などと命名されるのである。対女性共感覚についても然りである。
私や一部の共感覚者男性が残す女性の排卵・月経への感知能力が、ある時代までの日本民族の男性が多少なりとも共有していた「文化依存共感覚」とでも呼ぶべきものであるならば、現代日本人男性におけるこの能力の極端な消失を、現代日本語の欧米依存性、現代日本人男性の欧米人志向がもたらしたものとして捉え直す必要があるだろう。

サピア・ウォーフの仮説とスラフォーリア

公開: 05/30/2009 22:50:15

サピア・ウォーフの言語的相対論の「強い仮説」においては、思考は言語と一致する。言語を離れた思考の存在は否定される。一方、「弱い仮説」においては、非言語的な思考については譲歩して認めるが、それでも人間の思考が言語（母語）によって制限・束縛を受けることは否定しない。「強い仮説」に全面的に与する学者もいないが、言語を離れた、人類に普遍的な思考を認める学者は、もはやいない。
もし「強い仮説」に近寄るとするなら、例えば、現在も生き残る少数民族の世界認識が現代欧米文明圏の言語の母語話者には存在しないとの主張に与することになるし、上古代日本人の恋愛感情が、英語の影響を受けた現代日本語を母語とする現代日本人には存在しないとの主張にも与することになる。さらに、上古代日本人男性的な対女性認識世界は、上古代日本語のほうが現代日本語よりも自らの世界認識に合致していると自覚している特定の現代日本人男性にしか体験できないとの主張にも、与することになる。そして、本スラフォーリアの試みで取り上げる筆者の研究は、一見極論に思えるこの「強い仮説」に、まず共感覚という新しい観点から、さらなる根拠を与え、そして現代の非英語母語話者、非欧米先進諸国語母語話者の言語と世界認識こそが、人類の思考の普遍性を記述するのにふさわしい言語であることを示し、さらに「強い仮説」と「弱い仮説」との対立の立て方そのものが、極めて現欧米的なものであって、共感覚者の世界認識こそが人類・動物に普遍的なものであったとの結論を下すことになるであろう。
現代日本語と現代欧米語とは、実際には大きく異なる文法を持ってはいるが、現代の一般の日本人は、言語・知能に何らかの障害がない限りは、母語である現代日本語を、いったん英語的世界認識に翻訳して認識していると言ってよいであろう。すなわち、現代一般の日本人が従っている「言語」とは、「日本語」ではなく、「英語的世界認識で記述された日本語」である。我々が日本語にも存在すると認識している主語と述語と目的語の関係、自動詞と他動詞の分類、能動態と受動態の区別、過去・現在・未来を直線的にとらえて疑わない時制なる概念、時制から完全に独立した相なる概念、こういった文法範疇は、全て日本語には存在しないはずの、外国語の文法論理と世界認識に基づくものである。今、筆

者はこのように外国語、特に現代英語や現代欧州語の文法論理と世界認識によって記述される日本語、今のほとんどの日本人の世界認識に基づく日本語を、「現代日本語」と呼称するのである。そうとすれば、「否応無しに現代日本語を母語としつつも、そこから放り出される少数の日本人」が発生しているはずである。この点で、サピア・ウォーフの仮説の是非と、「我々の母語は現代日本語であるから、我々の思考は現代日本語の範囲内にある」ことの是非とは、全く異なった命題である。すなわち、日常生活においては、重度の言語障害もなく平然と現代日本語を操っているように見えても、ある特定の条件を付けた実験を目の前にした場合には、現代日本語の文法に反するかのように見える回答を示すこともあるのである。
事実、女性に対する排卵・月経感知能力を持つ筆者を含めたごく限られた日本人男性や、重度の共感覚を持つ日本人女性の世界認識は、サピア・ウォーフの仮説を支持しないように見えるし、事実、「弱い仮説」にしか与しないのである。しかしそれは、現代日本や現代欧米の一般健常者の普遍的な言語コミュニケーション能力に、共感覚者であっても、あるいは自閉症など言語に何らかの障害があっても、訓練で達することができるということを意味するものではない。むしろ、現代日本人・現代欧米人の世界認識のほうが、人類の言語史上、極めて異質な事態を呈するのであって、共感覚者・自閉症者の世界認識、江戸時代までの日本人の世界認識こそが人類にとって普遍的な世界認識に沿ったものであるということを、筆者の研究は示しているのである。
そして、現代日本の一般健常者は、現代日本語の文法、さらに古典日本語の文法をも、英語・欧米語の論理に従って記述していると述べたが、これは「そのような現代日本人の脳であっても、今なお潜在的には日本語的な日本語を失ってはいない」という楽観的な態度をさえ許すものではない。むしろ、現代日本の一般健常者のほとんどの世界認識それ自体が、ほとんど現代欧米人のそれに移行していることを、いくつかの実験は示している。すなわち、現代日本人、特に共感覚を失った今の日本人男性の世界認識の特徴は、世界的に見ても、サピア・ウォーフの「強い仮説」を支持する好例の一つであると見ざるを得ない。
我々日本人男性が、現代英語・現代欧州語化された日本語を用いて生活し、女性なる性を認識し、自然風景を目にしていることがいかなることであるか、今一度見直さなければならない。

スラフォーリアの発想と制作方法

公開: 05/31/2009 00:18:35

スラフォーリアの発想と構築過程は、他の人口言語とは異なるアプローチを取っている。また、スラフォーリアは、基本的には共感覚者や自閉症者・性犯罪被害者女性と、私との

交流を主に元に作られており、その手法も現在の脳科学・心理学では全く見られないアプローチだと思う。

以下に、その一つを簡単に示す。

詳細は、
http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura1.pdf
http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura2.pdf（執筆中）
http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura3.pdf（執筆中）
を参照されたい。（パスワードはサイトトップにあり。）

私とコンタクトを取った E さんは、性犯罪被害に遭ってから、幼少期の共感覚が蘇った女性である。一例として、私がこの女性とどう向き合い、スラフォーリアを用いて治るまでに至ったかを、書いておきたい。最初にブログに来て下さったときの E さんの言葉遣い・文章を見たとき、以下のような状態であった。

「はじめまして。私の共感覚者です。文字が色が見えます。あおぞらというじはかならずしもあおでありません。ごめんなさい。またいろがみえたられんらこ（＊連絡のこと）します。」など。

ここで私は、この女性の頭（脳）に何が起こっているのかがこれまでの共感覚研究によって理解できたため、E さんに次のような質問を考えて出題し、助詞を入れてもらった。

私（　）扉（　）ひらく。
風（　）扉（　）ひらく。

「ひらく」は「～がひらく（自動詞）」と「～をひらく（他動詞）」とで形が変わらない。このような動詞を言語学では「能格動詞」と言う。「～があく」と「～をあける」だと、形が違うので、そうは言わない。つまり、「ひらく」だと、直前の（　）には「が」も「を」も入り得る。

まず私は、身の周りの数十人の一般女性に試した。すると、以下のような回答であった。第一に答えたのは、一般女性では、以下の回答のどれかであった。

「私が扉をひらく」「私は扉をひらく」

「風で扉がひらく」「風が扉をひらく」「風は扉をひらく」

ところが、E さんは違った。一般女性の回答に加えて、次の三つが加わった。

「私で扉をひらく」「私で扉がひらく」
「風で扉をひらく」

つまり、E さんは、主語が「私」か「風」かに関係なく、助詞を全て統一してしまう。そして、E さんは、強姦被害直後、日本語や日本の古語は理解できるのに、英語が理解できない状態となったが、これが偶然ではないことが分かる。英語では、「I open～」と言うときの「I」は、「私が」と「が」までを含んでおり、「私が好きな花」「私の好きな花」といった、日本語では許される助詞の変化は、ただちに文法違反となる。例えば、英語圏の子どもは、「I love you.」を「My love your.」などと間違える時期を通過して育つ。これについては、すでに海外でも膨大な数の論文が出ているが、スラフォーリアでは、このような間違いを間違いと見なさず、幼児期に普遍の世界認識であると見なして許す立場に立つ。

「性犯罪被害者女性の世界認識は、それだけですでに非英語的である」ということが言える。「私で扉を」とは、まるで自分を傍観したような言い方であるし（性的被害で傷付いた自分を傍観する）、「風で扉を」とは、自分が風を操ったり風になりきっているかのようである（性的被害で傷付いた自我を大自然に没入させる）。ただ、こういうことが脳卒中患者でも起こる（失文法）ことを知っていた私は、今のような質問を何十個も考えた。

「私」と「風」の区別を文法上でも付けない言語は、先進国ではグルジア語やバスク語など、先住民の言語にしか残っていない。つまり、強姦被害に遭った一部の女性の脳は、精神的な傷を軽減しようと壮絶な努力を払うあまり、原始的な言語や女児の言語認識世界に前戻る、ということを、多くの質問によって見出したと言える。

普段、我々はどうして「私が扉を」「風で扉が」と言い分けることができるか。それは、「私」が生命体で、「風」は生命体ではない、という判断を無意識に行っているからである。このような区別は、動物としては「異常な」ことだと言える。つまり、文法を分析していくと、自然物を生物と無生物に分けるようになったことや、近現代西洋的な「自我」が成立したことと、動詞に自動詞と他動詞の区別が付いたこととは、同じことであることが導き出される。時制や態といった概念も同様である。すなわち、性犯罪被害を受け、幼児期の共感覚が蘇るほどの精神的な裂傷を経験した女性の言語認識は、現代欧米語の文法記述によっては説明できない。ところが、そういった女性や自閉症男性などへのカウンセリングやリ

ハビリは、現代英語の文法用語で記述される現代日本語である。ここに壮大な矛盾がある。

そこで私は、E さんに、「助詞の使い方などかまわず、思うことを名詞と動詞だけで話してくれればいい」と助言した。「私、扉、ひらく。私、買い物、好き。」などである。「私ポ買い物キョ好き」でもいいわけである。

これは実は、奇妙な日本語でも何でもない。昔は「花咲く」「風吹く」などと助詞を抜くのが一般的であった。そして、これらが「花が咲く」「風が吹く」の省略ではない、というところが重要である。つまり、江戸時代の終わりまでの日本人は、「花が咲く」、「花の咲く」、「花で咲く」の区別が無かった。そこで、「E さんの世界知覚は、昔の日本人女性に近い」ということが言える。

今の主流の脳卒中のリハビリにおいては、「扉を」「扉を」、「ひらく」「ひらく」というように、患者にリピートさせるだけで、文法というものを考えない。それを私は逆手に取り、「助詞機能（格機能）の原始性を文法違反としない」という発想によって、重度の共感覚者男性である私が、「内側から」共感覚者や性犯罪被害者女性の知覚世界を記述しようというのが、スラフォーリアの試みである。

これらの方法を何度も E さんに繰り返した結果、精神科・心理カウンセラーにかかっても軽減されなかった精神的な傷も、次第に収まり、今では普通に元の日本語を取り戻した。

しかし、一人だけならば偶然の可能性もあるから、今度は同様の性的被害に遭った女性 Y さんに、色々と試みた。そうしたところ、Y さんも同様の過程を通って精神的に回復し、さらに共感覚者・性犯罪被害者女性・自閉症者男性の何人かが、現代英語は理解できないのに、スラフォーリアの文法は理解できる状態を通過するという共通性・普遍性があることが分かった。

このような過程を複雑に繰り返して、実際に共感覚者や性犯罪被害者女性に効果があったものを、文法として記述していくのが、スラフォーリアの試みである。

スラフォーリアの特徴

公開: 05/31/2009 00:19:16

●現代英語や現代欧州語、及びそれらの文法用語によって記述されている現代日本語が聞

き取れない、理解できない、話せない、という状態に陥るほどの精神的ダメージ（性犯罪・鬱など）を体験したり、またそのような状態に生きているいわゆる知的障害者には、スラフォーリアの文法は簡単に理解できるにもかかわらず、いわゆる主格言語の文法を容易には理解できない。

また、先進国でも、グルジア人やバスク人などには、比較的簡単に理解できると考えられる。アメリカ・インディアン語、台湾原住民語、フィリピンのタガログ語などを母語とする場合も、理解は簡単であると考えられる。

スラフォーリアとは

公開: 05/31/2009 00:20:13

SURA ΦORIA　寿羅穂里阿

ユーザー名は syn、パスワードは ippan です。
●考案者：純一のサイト（スラフォーリア理解に必要な、共感覚・自閉症・離人症などの知識は、こちらをご参照下さい。）
http://www.ij-art-music.com/（サイト）
http://ij-art-music.sblo.jp/（ブログ）

●スラフォーリア（「壮大な人生」）は、共感覚者である私純一（1982 年生まれ）が、共感覚者・自閉症者・アスペルガー症候群者・解離性障害者・性犯罪被害者・不思議の国のアリス症候群者・脳卒中患者などの方々との交流をもとに、考案している言語です。研究が進むにつれ、文法も少し変わる可能性があります。

●このサイトをお読みになるには、共感覚の知識は最低限必要で、自閉症・解離性障害・不思議の国のアリス症候群などの珍しい感覚・症状を断りなく扱い、かなり高度な内容になっています。ご了承下さい。また、言語学はもちろん、哲学・東洋思想・仏教・神道・日本史・日本語史・文語和歌などの知識があると、なお良いかもしれません。

●スラフォーリア基礎データ
系統：日本語族（最類似言語は、平安日本語・台湾原住民諸語・アイヌ語・バスク語など）
表記：漢字仮名混じり（正式：正字体・正仮名遣い）
形態：膠着語（こうちゃくご）
優勢要素：主題優勢言語
文法格：非主格・非対格型
語順：SOV 型
目的：符牒型・思想型の芸術言語・後験語

●ロゴは、スラフォーリアの頭文字「す」と元の万葉仮名「寸」の組み合わせ、神社の鳥居、仏教の法輪「〇」を表し、スラフォーリアが立脚する東洋的世界観・人間観を反映している。

●スラフォーリア話者の会「空木会（うつぎかい）」

今のところ、ほんの数人でこじんまり。

スラフォーリアには共感覚の実感と言語学的思考の両方が必要

公開: 06/11/2009 00:24:51

当ページは一応、ブログの形式になっているので、日々考えていることを書いていきたいと思います。言語学に詳しい方だけに向けてと言うよりは、僕と同じく言語に深い思慮のある共感覚者・自閉症者に向けて書くということを兼ねたいと思います。

最近、言語学に詳しい方から僕と同じ共感覚者・アスペルガー症候群の方まで、色々な方からメールを頂いています。例えば、以下はロジバンという人工言語の掲示板で、スラフォーリアの話題が出ています。ロジバンは、自然言語の文法として自然発生することはあり得ない文法を持ちますが、主格言語話者にも能格言語話者にも対等で、西洋的世界認識・西洋的「自我」に特化したエスペラントとは異質の人工言語です。

http://www4.rocketbbs.com/141/lojban.html

（引用はじめ）

トラウマによる精神障害を被っているAさんが“主格”の部分を伏せて言う klaku so'ida は文法的なロジバン表現です。klaku の x1 はそもそも主格でも能格でもないですから、たとえ mi klaku so'ida としても、 mi はAさんにとっては（純一さんがスラフォーリアの解説で指摘なされたように）「私で」などとされ、「私が」とはされません。「で」か「が」か、といった要素をロジバンの PS は指定しません。そういった助詞の選択がロジバンでは強要されないのです。
（引用終わり）

僕はロジバン話者ではないので、ロジバン自体にはあまり詳しくないですが、上記の方の言う通りです。

現在は、いわゆる自然言語というのは、主格言語・能格言語のいずれかに収束させて説明するのが一般的で、最近は活格言語という解釈が出てきました。ただし、それらはあくまでも人類が言語というものを持ってから今までの、ある時代の一点を共時的に区切ってその言語を解釈したときの、文法の記述です。それを通時的に、連続体としてとらえて、「格という概念は、常にとどまることがない」ということを、僕ら共感覚者や自閉症者に対するアンケートが実証してしまったのではないかというのが、僕の試みということになるでしょう。

ここにあるように、「風、吹く」という語が与えられたとき、古語のように「風吹く」「風ぞ吹く」と言ったり、今の言い方で「風が吹く」と我々は解釈します。ところが、我々重度の共感覚者や自閉症者・性犯罪被害者などには、実際に「風で吹く」という現代日本語に近い感覚として認識されていることを実証しようというのが、スラフォーリアの試みです。

これに従えば、例えば藤原定家の次の歌、

白妙の袖の別れに露落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く

などは、

白妙の袖の別れに露で落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く

という解釈が成立します。つまり、何の格標識もないところは、単なる字数合わせではなく、「の」や「ぞ」よりも非主格的・遠主格的である、という解釈を下すわけです。詠み手の「自我」と自然物である「露」との間には、主客関係ではなく、梵我一如的な一体性が

自覚されています。

また、何人かの方から、「私が扉を」「風で扉が」と言い分けないグルジア語やバスク語の話者は、「私」が生命体で「風」は生命体ではないことを認識しないのか、というご質問を受けました。これは、重度の共感覚者・自閉症者・脳卒中患者などに、生命体と非生命体との区別を理解しない人がいる、ということによって説明が付きます。つまり、生命体と非生命体の厳格な区別自体が、主格言語化した西洋の価値観によって発生したものです。

僕がこれまでに三人ほど出会った共感覚者の女性なのですが、「物体の境界線」が分からない、という人がいます。 例えば、机の上に本が置いてあるとします。 一般の人は、「机」と「本」という名前を、それぞれに与えます。それが、いわゆる名詞の始まりです。

ところが、これらの共感覚者女性は、例えば、机のうちの横に平らな上部（天板）と、本とを、まとめて「A」、机の残りの脚部分を「B」という名付け方をします。好きなように物体を区切るように指示したら、そういう分け方をします。 こういう方で、自力で社会生活を送れる方はほとんどいませんが、女性ですと、全体として「障害者」「自閉症者」と呼ばれる方が少ないために、自分の言葉でそういう知覚世界を言える方がいます。 「机」と「本」とを別の物体であると断定する根拠は、ミクロレベルでは証明のしようが無いと思います。組成は違っても、水素原子・炭素原子など（あるいは素粒子）同じものでできているわけです。

このように、「物体の境界線が全く無い状態（前言語時代・幼児期）に戻る」、「自我と他の物体との境界線が分からない」 といった共感覚者は、「風、吹く」という言葉が与えられると、実際に「風が吹く」だけでなく、「風で吹く」「風を吹く」と答えます。助詞の「間違い」の頻度は、共感覚・自閉症の程度に比例します。それを詳細に調べ上げたのが、参考資料に掲載したものです。彼女たちの使う「で」や「を」は、もちろん、普段の周りの健常者に合わせた生活で用いている現代日本語から来ています。上代日本語には、「い」という格標識らしきものがあり、「風い吹く」とも言えますが、なぜ彼女たちがそう答えないかと言えば、「い」を周りの日本人が使わないからです。また、「ぽ」や「ち」などといった音も使いません。すなわち、「風で吹く」というのは、主格のニュアンスで「で」と言ったのではなく、実際に「風」に、周りの現代日本人健常者が使っている具格・処格に当たる音声を付けるべきだと自覚して「で」と言ったのだということが分かります。

言語学的観点からのご指摘は、言語学を専門に勉強したのではない僕にとって大変に参考になるものですが、「私」「自我」「個人」という概念が今の我々の個人の身体にピタリと一致している感覚は西洋でさえここ数百年の産物でしかないこと、本当に共感覚者と呼ばれ

る我々のような人が実在するのだということ、そういったことは既に前提としてスラフォーリアを語っているものですから、むしろ私の研究は、「共感覚者でない言語学家」と「言語学に明るくない共感覚者」のどちらにも分かりにくい語り口調だと思います。

スラフォーリアは、我々重度の共感覚者や、自閉症者・性犯罪被害者・脳卒中患者などの世界認識を実際に写し取ったらどうなるかということを語ろうとしています。例えば、希格言語から能格言語への移行は、おそらくは幼児や原始人が、“「自分の希求したこと」が「人為的に可能になる」ような社会状況・文明”を迎えたときに起こった変化であろうと推測することができます。これによって、従来の言語学の能格という概念、または能格言語話者の世界認識・自我意識は、スラフォーリアで言う希格という概念、または動作主である「自分」に希格を付けようとする（「希望」しない動作をする「自分」には格を付けない）重度の共感覚者・自閉症者の世界認識の、あとに生じたものであろうことが推測できます。これによって、今でも能格構造を潜在的に有する日本語を実質的な公用語とする日本で、どうして共感覚や自閉症が長らく「病理」と扱われなかったかが説明できます。

もし今後、我々の現代日本語が変化して現代アメリカ英語的文法に接近し、その現代英語もさらに厳格な主格主語を持った孤立語的屈折語に変化してゆくなら、今の現代英語の主格もまた、将来の英語から見れば、「能格的な古き良き味わい」と映るときが来るに違いないでしょう。僕も今後、共感覚研究の一環としてのスラフォーリア制作の試みがどうなっていくか、楽しみにしたいと思います。

スラフォーリア上級解説（20）
上級解説（20）（「私」「我」の流動性）
公開: 06/14/2009 18:42:56

■スラフォーリアにおける「私」「我」の流動性

さらに新たな例文を考えてみる。

1.「私はあなたを好く。」（動的）
2.「私はあなたを好きだ。」（静的）
3.「私はあなたが好く。」（動的）
4.「私はあなたが好きだ。」（静的）

一般の日本人は、3 のみを不自然とし、1、2、4 は文法的に自然で正しいと判断する。しか

し、重度共感覚者・自閉症者・解離性障害者などは、1 から 4 の全てを「自然で対等の表現」であると判断する場合がある。スラフォーリア作者の私自身、幼児期にはそうであり、思春期頃にようやく、周りの日本人が 3 のみについて「不自然」との判断を下していることを知った。このことは、生理学的には精神病理や言語遅滞・発達障害に起因するものと見なされ、カウンセリングやリハビリでも矯正の対象となる。

ここには二点の留意点がある。幼児期には、「動的現象（動詞など）と静的現象（形容詞や一部の形容動詞など）に区別がないこと」、「格（日本語では「が」や「を」といった助詞）の区別がないこと」である。

スラフォーリアにおいて、これを見てみる。まず、一般的な意味での「格」に当たるものを取り去って、項の要素のみを残してみる。
「私、あなた、好く（好きだ）。」
（以下、「格」とはスラフォーリアにおける「格」である。）

「特定の人を好きになる」のは、「一定の主体性を持った自らが希求・願望して成し得る感情」であるから、「私」に希格「んの」を付けて「私んの」としてみる。「特定の人を好きになる」感情は、不特定多数の異性を性的対象とした（いわば全ての異性を好きであった）原始人や、異性を意識しない幼児期に起こることではないから、スラフォーリアにおける空格・識格・具格・及格あたりの格は、ここでの「私」には付かないと言える。ただし、ニュアンスを変えたい場合には、この限りではなく、自由である。
（「私」は、スラフォーリア固有語を持つ単語で、「をぐ」（男性語）、「ゐう」（女性語）なので、読みは wogunno や wiunno となる。日本語で watasinno としてもよい。）
「私んのあなた、好く（好きだ）。」

「私」が希格の「私」（希我）として「私」自身に認識されるとき、「好かれる人」に当たる「あなた」は対格として認識されていないことは、参考資料欄に実証的に示した通りである。ここでは、「あなた」は絶対格なのであるから、標識は何も付けない。
「私んのあなた好く（好きだ）。」

同時に、ここで「私」の語で表された概念は、西洋的な「自我」「個人」を意味しない。スラフォーリアにおける「をぐ」や「ゐう」（＝私）は、人称代名詞ではあり得ない。かろうじて人称代名詞に近いはたらきをしているように見えるのは、意格か活格の段階以降である。例えば、「社会通念」「契約」「貨幣価値」「駆け引き」などの近代的概念は理解できない適応障害を持つけれども「特定の異性を好きになる」感情は持っている自閉症者・アスペルガー症候群者が、「私んのあなた好く」と言った場合、すでにそれらの複雑な不安感と

恐怖感とをこの一文が内包しており、一般日本人の「私はあなたを好く」との区別化を図ることができる。

また、希格の「私」においては、「好く」という動作は確固たる「主我（自我）」の存立無しに起こるから、述語は心描言か抽化言かのどちらかが多いことになる。
A-1「私んのあなた好くん。」
A-2「私んのあなた好くい。」
B-1「私んのあなた好きん。」
B-2「私んのあなた好きい。」
（希我には、A-1 と B-1 の間、A-2 と B-2 の間には差は感じられない。むしろ、A-1 と A-2、B-1 と B-2 の対比こそ重要である。）

ここで、「私があなたを抱きしめる」と述語を変えると、どうなるだろう。
「抱きしめる」行為は、好き嫌いに関係なく可能な行為、あるいは「私」の意志があれば相手の承諾無しに実行できる行為であるから、「私」には能格または意格が付く。述語も、希格よりも抽象概念性が増して、抽化言「い」か抽出言「あ」が多く用いられることになる。
「私のあなたを抱きしめるい。」
「私んがあなたを抱きしめるあ。」

すなわち、スラフォーリアでは、「好く」「抱きしめる」といった述語の指す概念が、ヒトの進化史上のどの段階で我々に把握されたか、ヒトの幼児はそれらをどのように把握して成長していくか、を重視する。さらに、それを逆手に取って、原始退行・幼児退行を許容する。スラフォーリアでは、「動詞」という概念も、空我から主格に近づくにつれて、より独立的要素として意識されていく概念であるというにすぎない。従って、希我が意識する「動詞」は、能我や意我が意識する「動詞」よりも、「動静一体的である」。空我においては、名詞・動詞・形容詞といった区別は完全に失われ、「私」「あなた」「好きであること」の三者は、具体生命体と抽象概念、実在と非実在の区別をも越えて、「色即是空」の「色」として取り出した概念にすぎない。

ここで、極端な例を考えてみる。

「私あなた好くあ。」（識格・抽出言）
これを、例えば重度の解離性障害者が発したとすると、
「私は、識我しか自覚し得ないほどの解離的状態に今はあるのだが、懸命な努力を払って現代日本語の「好き」という語の概念を理解しようと努め、社会に適用できる「人の好き

になり方」を実践しようとしていて苦痛である。」という翻訳になる。

「私があなた好くん。」（主格・心描言）
これを、例えば一般健常者が自閉症者に対して発したとすると、
「私は、自閉症者ではなく、西洋的自我を失っていないいわゆる健常者であるが、心底あなたを好きになってしまい、取るものも手に付かない。」
という翻訳になる。

すなわち、スラフォーリアにおいては、例えば動作主に希格を用いた場合、「want」に当たる概念が、すでに格の内部に含有され得る。なぜならば、「want（欲する・望む・願う）」ことは、「can（できる）」ことや、「will・shall（意図する）」ことよりも先立って人類に自覚される精神作用だからである。このように、空格から主格に至るまでのスラフォーリアの「格」概念は、現代英語では全く別の品詞（動詞や助動詞）と概念（時制・相・態・法など）で表される。現代英語における時制・相・態・法の概念を、スラフォーリア（すなわち、我々重度共感覚者・自閉症者らの世界認識）は解体してしまい、代わりに「西洋的自我」の芽生えの通時的過程をそのまま文法にし、なおかつ「西洋的自我」の成立を要求しない。

掲示板を設置しました

公開: 06/14/2009 19:39:35

掲示板を設置しました。
もし言語学・人工言語関連で来て下さっている方で、共感覚や人間の知覚・認知全般と関連した話題・ご質問などありましたら、どうぞお使い下さい。

http://ij-art-music.sakura.ne.jp/light/light.cgi（掲示板）

スラフォーリア上級解説（21）
上級解説（21）（話題格性としての「我」）
公開: 06/15/2009 22:38:23

■話題格「は」（スラフォーリアでは「ファ（φa）」と発音）
話題格解釈の図を参照。

今回は、スラフォーリアの文法が、「我々ヒトの外界認識はそれを“観測”する際の我々の知覚が左右しているという視点」すなわち「あらゆる自然的・人為的現象を相対化する視点」に立脚していることを、有名な話題格「は」によって説明する。

「私は男だ」の「は」が主格主語でないことは、しばしば「象は鼻が長い」を例に説明される。日本語では主に、「は」は話題格、「が」は主格を表してきたとされ、この解釈は三上章に代表される。

しかし、スラフォーリアでは、「象は鼻が長い」の「は」と「が」が、話題格と主格であるか、そうでないか、あるいはどちらも同じはたらきをしているか、といったことは、この文を発した話者の「自我」のあり方によって変化する。

まず、スラフォーリアの主我においては、現代日本語と同じ構文を取り、むしろ「象は」が文全体の「場」として「鼻が長い」を包み込んでいる。ここまでは問題ない。
「象は鼻が長い。」

一方、空我、すなわち、重度の共感覚者や自閉症者・解離性障害者などが陥った「我」「私」のあり方においては、先の「私、あなた、好く」においては、各項の格は無標で、「私あなた好く」となるのであった。ここでは、「私があなたを好く」のか「あなたが私を好く」のかということさえ不明瞭であってもかまわない。一部の解離性障害者、コタール症候群、カプグラ症候群、性犯罪被害者などにおいては、自他の「我」の区別がない症状が、なお日本語を失っていない状態で出ることがあるのであり、「私」と「あなた」との間に「好」という関係が存することだけを、空我構文は物語るのである。従って、空我構文では、語順もほとんど問われない。「あなた私好く」でも可である。これによって、「私には西洋近代的自我が理解されない」ことを表明することができる。作者の私自身、ある一人の重度解離性障害者とこうしてメールをし合った。

従って、「象は鼻が長い」を空我構文にした場合も、「象鼻長い」となるのである。ここでは、「象」「鼻」「長い」のどれが述語であるか、話題であるか、といったことは認識されない。全てが述語であり、話題である。

さて、具我構文になるとどうか。
「象は鼻んで長い。」

これは一見すると「正しい」文であるが、「鼻」に具格「んで」が付くためには、アンケー

ト結果に示したように、「長い」という状態を実行するために「鼻」が一定以上の高度な道具・手段を用いなければならないような場合である。しかし、「鼻が」「長い」ことは、象にとってすでに生得的な特徴である。従って、「象は鼻長い」とするべきだということになる。
一方、「象は」であるが、この「象」も「鼻が」「長い」状態を実行するために道具を使うわけではなく、「長い」ことが「鼻」の属性であるのと同様、「鼻が」「長い」ことは「象」の属性である。従って、日本語の「象は鼻が長い」は、「象鼻長い」とすればよいのである。

よって、現代日本語においては、同じ話題格「は」で表される
「私はあなたを好く。」（「私」の知覚する感情）
「象は鼻が長い。」（「私」の知覚する象についての命題）
という内容が、
スラフォーリアではこのようになる。
「私んのあなた好くん。」
「象鼻長いい（長いあ）。」（→発音は「長いー（長いあ）」）

なぜならば、スラフォーリアの文法は、現代日本語を以下のようにとらえ直すことによって成り立っているからである。
「私はあなたを好く。」（私においてはあなたを好く。）
「私は象は鼻が長い。」（私の知覚の範囲内における象という動物においては鼻が長い。）

すなわち、スラフォーリアでは、「象は鼻が長い」ことが客観的事実であるという判断を下さずに、人間である「私」の知覚世界の属性と見るのである。「長い」に続く抽化言（抽出言）の「い（あ）」は、一般日本人健常者にとっても「象は鼻が長い」ことが共有されているだろうことの表明標識である。従って、スラフォーリアでは「象は鼻が長い。」という現代日本語文は、このことを述べる空我としての「私」を省略したものと見なし、「（私）象鼻長い。」となるのである。

よって、「象は鼻が長い」「鼻は象で長い」「長いは象の鼻」などは、スラフォーリアでは、全て「象鼻長い」「象、鼻、長い」で許容される。ここには、「省略された話題格性」としての「空我」の存在があり、「象は鼻が長い」ことのほうが流動的で、むしろ重度の共感覚者・自閉症者らの「空我」を普遍視している。前者を客観的・普遍的事実と見なし、後者を言語遅滞者と見なす現代英語・現代日本語的文法とは対照的である。

このように見てくると、現代日本語の「は」は、現代英語のような厳格な主格主語を有する言語に比べれば古形を保っているようでありながら、実は「は」が話題格で「が」が主

格であるという解釈は、その解釈を下している現代日本人の多くの世界認識そのものが紛れもなく主格言語的・欧米言語的になっていて、重度の共感覚者や自閉症者を取り残して成立していることの証左であることが分かる。すなわち、「は」と「が」がどちらも話題格的に認識されているという自覚から逃れられない社会的少数者の世界認識を想定していない。

スラフォーリアでは、「は」は、「んで」「の」「が」といった他の格に対して特権的ではなく、むしろ真格として使われる「んで」「の」「が」なども話題格的なふるまいをする。空格段階においては、話題格と真格との区別が消失して、全て無標となり、名詞の羅列文となる。このことの根底には、「あらゆる文の行われる“場”は“私自身の意識世界”である」というスラフォーリアの東洋的世界観がある。これは、井筒俊彦氏がかつて『意識と本質』の中で述べた「言語アラヤ識」の思想にも矛盾しない。空我の段階では、「場」である「私」はほとんど「自然界」に一体化している。意格や活格の段階になって、ようやく話題格「は」と、意格「んが」や活格「が」との間に、差が現れるのである。

スラフォーリア上級解説（22）

上級解説（22）（上古代日本語・能格言語の再解釈）

公開: 06/17/2009 17:23:23

■スラフォーリアにおける、上古代日本語の「係り結び」やタガログ語のマーカー「フィリピン型格配列」の再解釈

スラフォーリアの格の使い分けは、現代日本一般の健常者からすれば、むしろ高度で複雑・難解なことに映り、とても言語遅滞者・知的障害者のやることとは思えないかもしれないが、我々や上古代日本人にとってはごく自然な反応である。特に重度の共感覚者や自閉症者、解離性障害者、性犯罪被害者ほど、述語の意味によって、主体がとる格を、ほとんど本能的に変化させる。例えば、「自分」なる概念がスラフォーリアの「具我」の段階にある、重度の共感覚・離人症を抱えるある男性の場合、次の例文では、「私は絵を描く」の「は」のみが自然で適切であり、他の文の「は」と全ての「が」「を」を不自然で「いらない」と感じる。

私は背が低い。ウサギは耳が長い。
私は絵を描く。ウサギはカゴを壊す。

換言すれば、「絵を描く」という、対自然界的な人為行為にのみ「は」なる標識が必要だと

感じる。「描く」「壊す」という概念理解を失っていない状態で、このことが起こる。全ての日本語について、このような判断を日常的に繰り返して生きているのが我々社会的少数者であり、この言語の創案者である私ほどに現代日本語を自由に操れる重度の共感覚者・自閉症者は、ほとんどいないと思われる。「自分」なる概念がスラフォーリアで言う具我の段階にある人の世界認識は、スラフォーリアで以下のように記述される。「色絵筆という道具を使った自分」にのみ具格を付けたことを表している。現代日本一般の健常者なら、全ての「私」「ウサギ」に「が（は）」を付けるところである。

私、背、低い。ウサギ、耳、長い。
私んで絵、描く。ウサギ、カゴ、壊す。（述語動詞に心描言「ん」などを付けてもよい。）

スラフォーリアでは、特に具我や及我までの段階を軸とする場合、主体が「私」「あなた」「彼」などの人間でない限り、主体にはほとんどの場合は「格」が付かない。ただし、動物には付くことがあるが、「人間である自分」と「周辺の動物」とに区別が自覚されない重度の共感覚者・自閉症者ほど、全ての項が無格（空格か識格）をとる空我・識格構文になる傾向があることになる。
これこそが、一般の能格言語において分裂能格と呼ばれる現象である。「分裂している」との感覚は、主格言語話者の解釈であって、それによれば「私」は主格主体、「ウサギ」は能格主体であると説明されるところが、スラフォーリアでは、この話者は真格の流れのどこかに位置しているという分析になる。

日本の古語でも同じことが起こってきた。日本語の格について、一般的な日本語学で実証的に判明していることと、重度の共感覚者・自閉症者や日本の幼児の言語認識様態に基づくこのスラフォーリアの言語観との両方をブレンドした結果を、いくつか挙げてみたい。

■上古代では、主語と目的語は基本的に無標識であり、時代が下るにつれて、一人称（我、余、私）から順に「の」「ぞ」「が」などが付いていく。二人称、人間全体、動物、植物、物体と順に広がっていき、最後に「会議が」「契約が」などの抽象概念の主格主語化が、明治以降に起こる。

■上古代では、「の」（属格）と「が」（主格）の区別が曖昧であり、さらに、文字として記述される以前の日本語では、それらは具格とも区別が無かった可能性がある。（スラフォーリアの視点で言いかえると、上古代日本語では、「の」と「が」は、属格でも主格でもなかった。また、それよりも前では、具格とも区別がなく、具格なる概念自体の自覚もなかった。）

■その証拠に、スラフォーリアの「具格」ないし「及格」と全く同じ標識らしきものが、上古代日本語にも見られる。この「い」は、のちの「の」「ぞ」「が」よりもずっと原始から日本語にあったものである。ただしこれは、主格主語だと解釈されるのが一般的であるが、スラフォーリアで言う「具格」「及格」であると解釈すべきものではないか。すなわち、「天仰ぎ叫びおらび足ずりし」「乱れ来む」「守れ」といった、強く自己意識を自覚させる行動が、話者（詠者）の心に（のちに主格に発展してゆく）この格標識「い」を付けさせたと見るべきではないか。そして、この「い」は、スラフォーリアの抽化言「い」の元になっており、そこから心描言「ん」、抽出言「あ」も派生している。

●妹が去ぬれば血沼男その夜夢に見取り続き追ひ行きければ後れたる菟原男い天仰ぎ叫びおらび足ずりし（『万葉集』巻 9、1809）
●うらぶれてかれにし袖をまたまかば過ぎにし恋い乱れ来むかも（『万葉集』巻 12、2927）
●筑波嶺のをてもこのもに守部すゑ母い守れども魂ぞ会ひにける（『万葉集』巻 14、3393）
●我等四王と及無量百千の神と并せて国土を護る諸の旧の善神とい遠離して去らむ時には、是等の如き無量百千の安怪悪事を生ぜむ（『西本願寺本金光明最勝王経平安初期点』）
●此を持ついは称を到し、拾（すつ）るいは謗を招きつ（『続紀宣命』）
●此の経を一たび読まむいは菩提の心を発して（『金剛般若経』）

■「の」と「が」の使い分けは、主体の意味的要因（主体性の強さ）による。（これはまさに、スラフォーリアにおける「んで」「で」・・・「んが」「が」の使い分けに一致する。）

■係り結びは、上古代ほど発達しており、中世に衰退する。（スラフォーリアの視点では、日本語に見られたこの「係り結び」という現象は、話者が主体性（「我」のあり方）の強弱の程度を表明する標識である、とする。）

■その証拠として、「の」や「が」が主体に付くのは、述語の動詞や形容詞が終止形以外の場合に限られる。終止形の場合、その主体には長らく何の標識も付かなかった。（これをスラフォーリアでは、終止形述語を持つ主体は、「主体」ではなかった（確固たる自己意識を持たなかった）と分析するのである。つまり、話者が自ら道具を用いたり人為的行為を意図したりなど、自己意識の強化・自我化を表明するために、主体に「の」「が」を付け、述語も非終止形にするのである。この「の」や「が」こそスラフォーリアの「んで」・・・「が」であり、非終止形述語こそスラフォーリアの「ん」（心描言）・「い」（抽化言）・「あ」（抽出言）である。）

従って、「ぞ」「なむ」→連体形、「こそ」→已然形、などの「係り結び」という現象も、そもそも「話者は、自己意識を強調する場合には、主体と述語に何らかの目印を設ける」と

いう普遍的規則の一環に過ぎない。そうであるから、スラフォーリアの「格」（真格）と「言（げん）」（心描～抽出）とは、全て上古代日本語の「係り結び」であると言える。

これと全く同じ方法でタガログ語を見ると、「タガログ語は能格言語（スラフォーリアにおける希格段階か能格段階）である」または、「タガログ語母語話者の自己意識は、今でも及我・希我ないし能我であって、西洋的な自我ではない」という分析さえできる。なぜならば、英語の「the」に相当するとか日本語の話題格の「は」に相当すると解釈されるマーカーについて、ang 形を絶対格（スラフォーリアの「無標」または「は」）、ng 形を能格（スラフォーリアの真格「んで」～「が」）と見ることができるからである。

そして、なぜタガログ語母語話者の自己意識が、スラフォーリアで言う「及我」か「希我」の段階になおとどまっていると分析できるかと言えば、タガログ語母語話者が、ある特定の人や物事について、それ以外の他者や物事と比べて「好きか嫌いか」、「自分に必要かどうか」、「希求しているかいないか」、「その人や物事が自分に利益・恩恵をもたらすかどうか」に非常にこだわり、これによって文法が変化するからである。例えば、

Gutom ako.「私はお腹がすいている。」（絶対格）
Gusto ko noon.「私はあれが好きだ。」（能格（スラフォーリアの希格））
Ayaw ko itong pabango.「私はこの香水が嫌いだ。」（同上）
Kailangan ko ng mas malaking bahay.「私にはもっと大きな家が必要だ。」（同上）

などである。ここで、「ako」とはスラフォーリアの「私」、「ko」とは「私んの」と思っていただいてかまわない。すなわち、「お腹がすいている」ことを自覚している「私」は、確固たる自我を持たない。タガログ語は今でも、「文明の発展によって、ようやく自分と他者との関係が損得感情に左右され始めた時代の言語に見られた文法」を保っていると言える。これと同じ内容の日本語文を、希我段階にいると思われる重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者女性などに見せると、タガログ語と同じ文法を呈する。

「私、お腹、すいている。」
「私は（の、で、が・・・など）あれ、好きだ。」
「私は（の、で、が・・・など）この香水、嫌いだ。」
「私は（の、で、が・・・など）もっと大きな家、必要だ。」

このような「自分」しか自覚されていない段階にあるならば、スラフォーリアにおいては、この「は（の、で、が・・・）」などの箇所に「んの」を入れることを許される。

スラフォーリア上級解説（23）
上級解説（23）（方言への適用）
公開: 06/19/2009 00:12:16

■水海道方言（茨城県）とスラフォーリアの類似
水海道方言とスラフォーリアの比較の図を参照。

さらに例を見よう。茨城県常総市の南西部に、水海道（旧水海道市）という地域がある。ここでは、老齢者の間で、古形日本語の面影を残す方言「水海道方言」が話されていることが知られている。

性犯罪被害者女性・重度の共感覚者・自閉症者などの格の使い分けが、この水海道方言に酷似することを以下に示す。すなわち、私は、これらの社会的少数者が、水海道のように日本古来の言語が行われてきた地域の老齢者の間では、「言語障害者」ではあり得なかった可能性を指摘したい。さらに、スラフォーリアと水海道方言の格構造も、同様に酷似することを示す。水海道方言の専門の研究家が多くいるが、やはり「能格」「主格」「対格」といった用語が従来の言語学上での定義に従っており、スラフォーリアではこれをいったん解体し、水海道方言がスラフォーリア論によっていっそう整然と説明できることを図に示した。

このことは、先の性犯罪被害者女性らが、なぜスラフォーリアの文法のほうが、母語であるはずの現代標準日本語よりも「精神的に楽である」「自分たちの世界認識に合う」と訴えるかをも、説明するであろう。

【一般健常者にとって自然な現代日本語文】
（必要性・能力を表す主体は与格主語「には」のほうが自然と感じる。）

犬（に）触るな。
本（に）触るな。
私（には・は）それがいらない。
私（には・は）無理だな。
私（は）寒い。
私（は）若い。
私（は）年寄りだ。

【スラフォーリアにおける能我段階（能格言語段階）あたりにいる重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者に、自由に助詞を入れ替えてもらった文】

犬（の・に・へ）触るな。→「んの」（希格）
本（で）触るな。→「での」（及希間格）
私（は）それがいらない。→「の」（能格）
私（は）無理だな。→「の」（能格）
私（の・に・へ・は）寒い。→「んの・ーの・の」（希格～能格）
私若い。→「φ」（識格ないし空識間格）
私年寄りだ。→「φ」（識格ないし空識間格）

【水海道方言の助詞】（上と全く同じ使い分けを呈する。）

犬（げ）触るな。（えぬげさーんな。）
本（さ）触るな。（ほんささーんな。）
私（がに）それがいらない。（おれがにそれがいらね。）
私（がに）無理だな。（おれがにむりだな。）
私（げ・がに）寒い。（おれげ・がにさみー。）
私若い。（おれわかえ。）
私年寄りだ。（おれとしよりだ。）

スラフォーリアと水海道方言の共通点を挙げよう。

●好悪・必要性・能力・経験の主体には格標識を付け、それ以外にはあらゆる主体に何も付けない。
●「犬」と「本」とでは、何としてでも格を分けようとする。
●環境状態を描写する述語の主体の「私」には、標準日本語の「に・へ・が・は」を何でも付けようとする。すなわち、「犬に触るな」の「に」と「私はいらない」の「は」との区別が付いていない。

例えば、水海道方言の「がに」は、これが用いられるときの述語の意味（希求・好悪・能力・必要性・経験）から、スラフォーリアで言う希格から能格・意格に該当する格であると言うことができることになる。

さらなる例文である。

以下のように、現代標準日本語では、全ての場合で主体と客体、自分と他者、人間と自然とが厳格に区別されて「に」に取り込まれるが、水海道方言では今でも自然物や非活動体に対する非授受・非損得行為には、弱い「さ」が使われ、古形日本語から標準日本語への過渡期にあることが分かる。今後、「げ」の使用範囲が広がり、さらにそれが標準語の「に」に変わっていくと考えられる。しかし、スラフォーリアでは、このような調整を、話者自身が自由に行えるのである。また、例えば具格中心の文章を書いたとして、その中に意格を挿入することで、その項についてのみ主格性の強化を表明することもできる。

【現代標準日本語】
どこそこ（に）行く・・・移動動詞（着点＝非活動体）
見（に）行く・・・目的の補文標識
服（に）触る・・・接触動詞（対象＝非活動体）
バイク（に）乗る・・・動作動詞（対象＝非活動体）
バス（に）乗る・・・動作動詞（対象＝非活動体）
馬（に）乗る・・・動作動詞（対象＝活動体）
犬（に）触る・・・接触動詞（対象＝活動体）
風呂（に）入れる・・・授受動詞（着点＝非活動体）
仏様（に）あげる・・・授受動詞（着点＝霊的存在）

【水海道方言】
このように、どこかで「げ」と「さ」とを使い分ける。（数字は、「さ」を使えると答えた人の人数である。「水海道方言の四つの斜格」（佐々木冠・1999）より）
どこそこ（さ）行く 21
見（さ）行く 19
服（さ）触る 19
バイク（さ）乗る 13
バス（さ）乗る 10
馬（さ）乗る 10
犬（げ）触る 8
風呂（げ）入れる 6
仏様（げ）あげる 5

【スラフォーリア話者（重度の共感覚かつ自閉症者）の回答】
●「無標」→「で」（及格）もしくは無標（絶対格）のまま、「に」→「んの」（希格）とするのがよいだろう。明らかに自らが欲した行為以外には、ほとんど「に」を付けないからである。
どこそこ行く
見行く
服触る
バイク乗る
バス乗る
馬乗る
犬（に）触る
風呂（に）入れる
仏様（に）あげる

【スラフォーリア話者（性犯罪被害者女性）の回答】
●「無標」→「で」（及格）もしくは「無標」（絶対格）のまま、「に」→「んが」（意格）もしくは「に」のまま、とするのがよいだろう。この方は、現代日本語での日常生活にほとんど支障がない。
どこそこ行く
見（に）行く
服触る
バイク（に）乗る
バス（に）乗る
馬（に）乗る
犬（に）触る
風呂（に）入れる
仏様（に）あげる

私は、
孫に犬を触らせない。【現代標準日本語】
孫げ犬げ触らせない。【水海道方言】
孫で犬で触らせない。孫が犬が触らせない。【スラフォーリア話者（重度自閉症者男性）】
孫に服を買ってやる。【現代標準日本語】
孫に服買ってやる。【水海道方言】

孫で服買ってやる。孫が服買ってやる。【スラフォーリア話者（重度自閉症者男性）】

水海道方言を使う老齢者と、標準語社会に置かれたいわゆる言語障害者とが、実際には同じ世界認識を呈しており、多くの標準語話者の世界認識とは異なっていることが分かる。こうなるゆえんは、「私」と「孫」、「私」と「犬」、「孫」と「犬」との距離感（直接性の強弱）による。もし以下のように言い換えたならば、一般の健常者なら、「私」と「犬」の距離感は遠ざかり、「私」の「孫」に対する強要性が高まったと感じるだろう。

孫を犬に触らせない。

このようにして、あらゆる格について調べていくと、スラフォーリアの格構造と水海道方言の格構造とが、極めて酷似していることが明らかとなる。

言い換えれば、標準日本語を母語とせざるを得ない重度の共感覚者・自閉症者が本来求めている「理想の言語の文法」、性犯罪被害を受けた女性が陥った「言語障害の状態」が、水海道地域の老齢者においては、日常的に話されていることになる。

水海道方言は、スラフォーリアの格解釈を用いると、極めて整然と説明しうる。また、「あなたごど」と「あなたを」、「あなたげ」と「あなたに」など、水海道方言と標準日本語とを一対一で対応させることの危険性を、スラフォーリアは同時に指摘しうることが分かる。

もっとも、「希格」としたところでも、スラフォーリアの「希格」を取り巻く位置にあるとの意味であって、「及希間格」から「希能間格」までをも含んでいる、といったことはあり得るのである。

さらに、有生物と無生物という分類が、主格言語話者の世界認識からの解釈で、むしろ危険でやるべきでない解釈であることはすでに活格言語の箇所で述べたが、水海道方言についても、少なくとも生命体と非生命体とを今の先進文明国人のように分類しているわけではないだろう。「ごど」と「φ」、「げ」と「さ、へ」、「が」と「の」と「な」の違いは、少なくとも行為と状態という分類（活格言語）以前にとどまるものであって、有生物と無生物という実感は、水海道地域にも古来無かったであろう。

なお、ここに挙げた自閉症者・性犯罪被害者の例は、現在一般の医療では言語野の障害（ウェルニッケ野・ブローカ野）、精神障害などの誤った疑いを受けたものである。もちろん、脳をいくら調べても、異常は観測されなかった。スラフォーリアにおいては、言語障害な

る概念は、それ自体として実在するものではなく、主格言語社会が作り出す概念が我々に実在的認識とされるように変化したにすぎないと見るのである。

スラフォーリアの特徴

公開: 06/20/2009 22:50:31

先日、人工言語に詳しい何人かの方から教えていただいたことに、「言語学者の近藤健二氏が著書『言語類型の起源と系譜』（松柏社 2005 年）の中で、私がスラフォーリアで展開している言語論とほぼ同じ結論に、別の側面から達している」というのがあります。実は、この人の論文も本もほとんど読んでいまして、朝鮮語やシュメール語論には少々疑問符が付くものの、全体としてすばらしい言語観で、このスラフォーリアの解説でも、どこかに名前を挙げたと思います。

もちろん、私のように、「言語は、具格言語から能格言語、さらに主格言語と移行していく」といったことを、実際の社会的少数者との交流から見出すという手法をとった人は、私の知る限りでは、言語学者にも人工言語作者にも、いないように思います。私自身、共感覚に生きると同時に、思春期の頃まで具格・能格言語世界に生きていましたし、それらが理解できるのに主格言語は理解できないという状況が、人間にはあり得るのだということを身を持って知っています。他の何人かの共感覚者も、同じことを述べていました。

言語学者の論を実証するのは、言語学者ではなく、主格言語よりも前の世界認識に生きている人なのだと思います。

スラフォーリアの特徴は、幼児・重度の共感覚者・自閉症者・性犯罪被害者・解離性障害者などの世界認識が、本当に言語の歴史をさかのぼったところに位置しているのだということを示している点、それから「具格言語や能格言語段階にとどまっている人を“言語障害者”と見なさない」という親「社会的少数者」の姿勢をとっている点、また「自我」の流動について考察している点なのだと思います。スラフォーリアはおそらく、人工言語であると同時に、思想・哲学的な試みでもあるのだと思います。

私の場合、幸いにも今までにメインサイトやブログのほうで、数十人・数百人という先の社会的少数者の方々との交流がありますから、こういう人たちの豊かな感性が功を奏し、私が人工言語を作るときに自動的に適切なフィルターがかかります。いわば、スラフォーリアは、「人工言語のための人工言語」にならずに済み、「重度の共感覚者や自閉症者のた

めの人工言語」に収まっていくと思います。つまり、「閉鎖的に開放された言語」というのが、正しいのかもしれません。ある意味、私や社会的少数者にとっては、スラフォーリアは「人工言語」ではなく、「自然言語」であるのだと思います。

スラフォーリア上級解説（24）

上級解説（24）（文法範疇と格詞・助詞・助動詞一覧）

公開: 06/22/2009 17:55:16

次に、スラフォーリアの文法範疇、及び格詞・助詞・助動詞の一覧を示す。

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_jo.pdf

まず、主我においては、ほとんど現代日本語に一致していることが分かる。それが、活我から空我に戻っていくに従って（共感覚や自閉症の程度、言語障害・失語症の程度、性犯罪などによる心的外傷の程度が高まるにつれて）、使用可能な助詞・助動詞概念が少しずつ減ってゆくことが分かる。これは、それらの概念を理解できないのではなく、それらの概念が未分化であり、格詞がそれらの概念を内包していることによる。この表は、左から順に、幼児の日本語習得過程、及び日本語史そのものに酷似している。以下に、補足的説明を加える。

■空我においては、主観と客観、時間と空間、過去と現在と未来、自分と他者、能動と受動、名詞や動詞や形容詞、肯定と否定、感性と知性などが全て未分化で、同一視され、従って、時制・相・法・態といった文法範疇が全て存在しない。

■「φ」は、助詞や助動詞を付けないことを示す。「φ（終止）」とある場合は、動詞を終止形で終え、かつ何も付けないことを示す。「言（げん）」はこの限りではなく、「φ」であっても、前後二段階までのずれは自由である。

■「φ（終止）」は、動詞に「活用」なる概念が生じる以前の世界認識を表しているとも言える。「読む」行為が「近い未来の仮定」となるとき、「読まば（yom・a・ba）」となるが、この「a」は、本来は助詞や助動詞（さらにスラフォーリアの言をも含む）のはたらきと同じであるという解釈をスラフォーリアでは行う。そして、この解釈は、重度の共感覚者・自閉症者が、助詞・助動詞への理解の失い方と全く同じ過程で動詞の活用理解を失うことから、真であるだろう。すなわち、「動詞の活用」とは、「行為の焦点性」である。

■時制の「過去・現在・未来」は、厳密には主我段階まで存在しない。現在の過去形「た」は、真格段階では全て相の「たん」「たり」「けり」「き」「つ」「ぬ」などで表され、それらは「即然（そくぜん・すなはちしかり）」が「已然（すでにしかり）」と「未然（いまだしからず）」に分化するまでの連続的変化に基づく。スラフォーリアでは、「けり」「き」も「過去」と分析しない。

■是非観の「即非」とは、鈴木大拙の「即非の論理」からの用語で、「A は非 A である。よって、A。」を表す。実際に、幼児や重度の自閉症者では、否定表現の分化が見られない。西田幾多郎の用語に従えば、自己が絶対矛盾的に同一している。スラフォーリアの空我話者は、否定表現をほとんど使わなくてよい。

■空我段階の「名即心（めいそくしん）」とは、「名前を与える」ことがすでに「心を含んでいる」の意である。空我話者が「私、本、読む」と言うとき、「私ね、本読むの」といった助詞の心的表現は、排除されているのではなく、「名」がそれ自体であると見る。

■格助詞とされている列挙の「や」、副助詞とされている並列の「も」などは、重度の言語障害を負っていてもめったに理解が失われず、幼児においてもかなり早い時期（格助詞を覚えるよりも早く）に列挙・並列の概念として習得される。（「も」について、同様のことを示した論文）
http://ir.u-gakugei.ac.jp/bitstream/2309/65548/2/18804314-58-04.pdf
また、性犯罪被害などで後天的に失語に陥った場合も同様で、格助詞の使用がほとんど破滅的に失われても、なお列挙・並列といった概念は失われない。例えば、
「彼女が花に水をあげる。」
「彼女も花も美しい。」
とでは、前者が理解できず、後者が理解できる、という状態が起こる。従って、列挙・並列の意味を表す助詞は、識我や具我段階の人に対しても使って構わない。

■終助詞がむしろ近主我段階にならないと現れないのは、終助詞で表される概念（感動・念押しなど）が、格助詞（格詞）や言に内包されているためである。

■「ば」のうちの仮定表現は、現在のように仮定形に付かず、未然形に付く。

■「けれども」「が」などの逆接表現は、重度の共感覚者や自閉症者・幼児においては、順接表現よりも理解が遅れる傾向にある。これは、逆接表現をするような事態が幼児期には起こりにくいためであると考えられる。また、後天的な言語障害者や性犯罪被害により失語に陥った女性も、まずは逆接表現から失ってゆく。一方、助動詞の「ない」「ぬ」は、か

なり早い時期、重度の言語障害者でも理解している。逆接なる概念と打消なる概念は、原始人類にとって異質のものである可能性があり、スラフォーリアでは、具我・及我段階では逆接表現の使用のみを控える立場を取っている。すなわち、「食べ物が必要だけれども（食べ物を望むけれども）、食べ物がない」は、単に「食べ物がない」ことよりも後の時代（希我）以降に認識される。

■話題格「は」は、具我や及我においては、格詞の「んで」「で」自体が話題格的であるので、「は」は補助的に使われる。

■「れる」「られる」は、幼児期の最初は「自発」として理解される。次に「自ら利益になることを望む」ことが可能となる希我時代になって、「可能」が分化する。「可能」は、平安時代には「できる」の意として多用されたが、「できない」不満を伴うことが多くなって「れず」「られず」表現が増える。さらに、能格時代を終えると、動詞の自他の区別とともに、能動・受動の区別が生じて「受身」が分化する。さらに、「これ（あなたに）使われますか？」との婉曲表現から「尊敬」が分化する。逆に、後天的に言語障害や失語に陥ると、まずは「尊敬」表現が失われる。「尊敬」や「受身」としか受け取れない文を書くと、理解されないので注意。

■伝聞・様態・推量などを表す表現は、自分と他者・物体・自然界との距離感ができ始める及我の時代になって生じる。

■男我燈（だんがとう）は、対女性共感覚（メインサイト参照）を表現するために用いられる。古語において、女性に対して「にほふ」「かをる」「みゆ」などが使われたのと同様である。他の副助詞と同様、あらゆる語に付いて、対女性共感覚を有しない現代一般の日本人男性との知覚の違いを表明できる。

■神仏燈（しんぶつとう）は、神仏に託して物を言うときに用いられる。

■スラフォーリアでは、動詞の終止形は、基本的に古語の終止形をとる。次のような場合は、名詞に付く真格または絶対格によって動詞の意味が決定される。次の「si・ma・ru」と「si・me・ru」は、重度の共感覚者・自閉症者には「si・m」までで「閉」の意味が認識されており、「a」と「e」の違いは、スラフォーリアの「言」で言う「ん」と「い・あ」の違いと同一視される。従って、空我・識我段階に近いほど、動詞はほとんど現在の自動詞を用いるのがよいが、基本的に自由である。スラフォーリアでは、次の「閉まる」と「閉める」の違いは、「で」の有無による違いよりも、ずっと小さい。「ボクは扉を閉まる。」といった幼児期の間違いも、スラフォーリアでは「間違い」とはならない。

「扉閉まる。」（識動詞）＝扉が閉まる。
「扉閉める。」（識動詞）＝扉が閉まる。
「私で扉閉まる。」（及動詞）＝私という及我が影響を及ぼしたことで扉が閉まる。
「私で扉閉める。」（及動詞）＝私という及我が影響を及ぼしたことで扉が閉まる。

■スラフォーリアでは、形容詞はなるべく古語の「し」終止をとる。「美しい」の古形は「美し」であるが、「い」はスラフォーリア抽化言「い」に通じるものと見なす。「赤」は「明か」の意であるが、「赤という状態である」ことを強調・抽象化して「赤い」となった。従って、スラフォーリアで「赤い」「美しい」と言うと、すでに抽化言を内包すると見なすため、心描言としては、「赤いん」「美しいん」の他に「赤しん」「美しん」としてもよい。

このように、スラフォーリアの助詞・助動詞体系は、現代日本語と古典日本語とを網羅した体系を持ちつつ、日本語の変遷過程が幼児の日本語習得過程に重なることをも同時に指摘しており、なおかつ重度の共感覚者・自閉症者・言語障害者にも負担のない体系を持っている上に、それを東洋思想を基盤とする「我」の流動という観点から説明している。スラフォーリアは、例えば以下の論文などで指摘されている疑問点を、綺麗に解決している。失文法や言語障害の本質を言語学が説明し得ないのは、ひとえに、重度の共感覚者や自閉症者が「世界を認識する」こと、あるいは「感動する」こと、性犯罪被害者女性の心が「傷付く」ということが、すなわち「幼児期の感性に前戻る」ことや「日本語の歴史をさかのぼる」ことと同義である、という点に、体験的に気付ける人が少ないからかもしれない。

http://wwwsoc.nii.ac.jp/lsj2/meetings/111/abstract/212.shtml
http://wwwsoc.nii.ac.jp/lsj2/meetings/113/abstract/123.shtml
http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/dspace/bitstream/2237/5704/1/BZ002610143.pdf
http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/linguist/doc/mizumo/LSJ136_poster.pdf
http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/linguist/doc/mizumo/FLC2008_handout.pdf

スラフォーリア例文集

公開: 06/24/2009 21:55:13

次の例文をスラフォーリアに訳してみる。文法範疇表（http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_jo.pdf）を使う。

●一般日本人の現代日本語
「私は、あなたが私の妹へのお祝いに、あなたの姉や弟と、遠くから誰よりも真っ先に、私の家に電車で明後日も来てくれるのが嬉しい。風がビュービュー吹くでしょうから、気を付けて下さいね。」

以下は、あるアスペルガー症候群かつ共感覚者の女性が最も自然だと答えた文の作りである。助詞の変化、動詞の活用の混乱、独特な擬音・擬態語、など、重度の共感覚者・自閉症者・解離性障害者・日本の幼児・失語症者に共通して見られる現象である。

●スラフォーリア話者の日本語
「私は、あなたが私の妹にのお祝いに、あなたの姉や弟と、遠くの誰のも真っ先で、私の家電車で明後日も来（こ）てくれるの嬉しい。風ビュサビュサ吹くでしょうのから、気を付いて下さいれね。」

このような文を書く人は、自己意識を意味する「私」をスラフォーリアで言う希我と自覚しているため、表の「希我」の縦の欄に書かれている格詞・助詞・助動詞に置き換えていく。さらに、分かりにくい抽象概念（お祝い）や人工物（電車）には、抽出言「あ」を付して、「私には理解しにくい」ことを表明する。必ずしも、希我の欄に一致する必要はない。例えば、「あなた」には「んが」（意格）を付して、「私」（希我）と「あなた」（意我）の「自分」「自我」「自己意識」の在り方が異なることを表明する。（通常、現代日本語を操れる一般健常者を表す人物語は主格「が」をとるが、ここでは相手にも非主格をとらせている。）

●スラフォーリア文
「私は、貴方んが私んの妹んのお祝いあ、貴方んの姉や弟と、遠くんぬんの誰んのも真っ先、私んの家、電車あで明後日も来てくれるんの嬉しん。風ビュサビュサ吹くひりさむから、気付き（付い・付け）て下されん（下さい・下さいね・下さいよ）。」

このスラフォーリア文を、無理やり現代日本語に直そうとすると、以下の分量になる。また、このような内容は、私自身の小学生の終わり頃までの世界認識でもある。自閉症者の典型的な世界認識でもある。

●スラフォーリアの現代日本語訳
「私においては、あなたが私の妹のお祝いという概念の出来事について、あなたの姉や弟

と一緒に、ずっとずっと向こうのほうから、誰よりも真っ先、という状態で、私の家とひっつく方向に、電車という乗り物で明後日も意図的に来てくれる、が心から嬉しくて嬉しくてしょうがないと感じられているよ。風、まるで生きているようにビュサビュサという感じで吹くでしょうから、それがあなたによって気が付くものであって下さいね。」

ちなみに、本来はスラフォーリアの正式な表記体系は正字・正仮名遣いであるが、以下のようになる。

●スラフォーリア正式表記
「私ハ、貴方ンガ私ンノ妹ンノオ祝ヒア、貴方ンノ姉ヤ弟ト、遠クンヌンノ誰ンノモ眞ツ先、私ンノ家、電車アデ明後日モ來テクレルンノ嬉シン。風ビユサビユサ吹クヒリサムカラ、氣付キ（付イ・付ケ）テ下サレン（下サイ・下サイネ・下サイヨ）。」

読み方。タ行やハ行などは、五十音表を参照。

●読み方「ゐう・は、なつら・んが・ゐう・んの・いもうと・んの・おいはひ・あ、なつら・んの・あね・や・おとうと・と、とほく・んぬ・んの・だれ・んの・も・まつさき、ゐう・んの・いへ、でんしや・あ・で・あさつて・も・き・て・くれる・んの・うれし・ん。かぜ・びゆさびゆさ・ふく・ひりさ・む・から、き・づき・て・くだされ・ん。」

ちなみに、以下は冒頭の文を英語にしたもの。先に挙げた女性が英語に訳すと、下側となる。

●一般欧米人・日本人の現代英語
I am glad that you are coming the day after tomorrow earlier than anyone from the distance to my house by the train with your elder sister and younger brother to congratulate my younger sister.　The wind will blow hard, so take care, please.

●スラフォーリア話者の現代英語
My am glad you are coming the day after tomorrow than anyone earlier from distance to I house by train with your elder sister and younger brother to my younger sister congratulate. The wind will hard blowing.

●冒頭の日本語文の朝鮮語訳

冒頭の日本語文を朝鮮語でも書いてみた。もし朝鮮語においても、失語症者が同じような「間違い」を犯し、日本語や朝鮮語・アイヌ語などの文法は理解できる一方で、現代英語には苦痛を感じるということが判明したならば、スラフォーリアは、語彙はともかく、その文法論は、朝鮮の共感覚者や自閉症者にも当てはまるかもしれない。

スラフォーリア例文集

公開: 06/26/2009 19:00:08

【ある重度の共感覚者かつアスペルガー症候群女性のスラフォーリア作文】

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/r090626a.wav
音声ファイル
（ソフト使用：http://cncc.hp.infoseek.co.jp/）

私んの、文字ふをりしんたり、音ふをりしんたりするん共感覚者ひりす。（希我文）
（「ふをりす」は、「色が見える」の意のスラフォーリア固有動詞）

アスペルガー症候群あと診断あしひりしたん。（希我文中我態）

電車あ乗るあとき、切符あの買い方んのよく分からないんいふ症状出るんありひりす。（擬人希我文）

ひらがなの「さ」と「ち」は、鏡文字ちりて、づちらも私んで薄緑色ちるので、読み間違えるあなありひりす。（具我文内包型話題文）

★現代日本語訳

私という人間においては、この感覚は、いつも少し抑えて頑張ってるのですけれど、つまりは文字に本当に色が見えたり、音に本当に色が見えたりするんでして、共感覚者なんです。アスペルガー症候群だなどという診断やらをする、ということが、その私の身に降りかかりました。電車などというものに乗るとき、切符とやらの買い方についてですね、それが欲しくて欲しくて、切符のほうも私を求めていると思うんですのに、買い方があまりにもよく分からないという症状、これがとてもとても出てしまうことがあるんです。ひらがなの「さ」と「ち」は、鏡文字でして、生まれたばかりの頃のような自然な私の本能に従えば、どちらも薄緑色に見えているものですから、読み間違えてしまい、いや、それは私にとっては間違いでも何でもないのですけれど、社会では困り果てることがあるんです。

【自作。スラフォーリアの解説をスラフォーリアで書いてみた。】

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/r090626b.wav
音声ファイル

幼兒期ヤ失語症者、一部ノ重度ノ共感覺者・自閉症者ニ見ユルア助詞ノ「間違ヒ」ガゾウイフンカ、一般ノ人ガ理解セムント思ハバ、英語圏ノ人ヨリモ日本人ノハウガマダ理解デキルン餘ンノ思ヒイヒス。

例ヘバ、數々ヘルトキニ、「イチノ、ニーノ、サンノ、シーノ・・・」ト數ヘヒスナ。コゾ「ノ」、主格チルカ屬格チルカ斷定スルアハデキヒサヌ。「ツナギノハタラキ」「口調ノ良サ」程度ノ意味シカアリヒサヌ。コゾ感覺、アラユル助詞ンデ感ジテヰルガ、先ニ擧ゲタル人タチヒス。「私ハ電車デドコソコニ行ク」ト言フダケチリモ、「ハ」「デ」「ニ」ノ使ヒ分ケアデキヒサヌ。孤立語化シタル英語デハ特ニ、格ハ單語ンデ内包シテヰルノデ、間違ヘルコト自體文法違反ト見ナシヒス。言語障害者・失語症者ト診斷スル人歐米語圏デ多イアハ、エゾタメヒス。

スラフォーリアデハ、「私ンデ電車ンデドコエコンデ行ク」ト言フア許シア、コザ無理ニ現代日本語ニ譯スト、「具我ヲ持ツ私トイフ人間ニヨツテ、マルデ生キテヰルカノヤウニソノ私ニ感ジラレル電車トイフ乘リ物ガ使ハレ、ソレデドコソコトイフ素晴ラシイ場所ニ行クンダ。」トナリヒス。先ノ人タチンデコゾ英語ニ譯スト、「Me train somewhere go.」「I go somewhere train.」ナドトナリヒス。英語圏ノ幼兒デハ、コゾヤウナ間違ヒ、ホトンド 3 歳頃マデニ終ハルヤウヒス。

★現代日本語訳

幼児期や失語症者、一部の重度の共感覚者・自閉症者に見られる助詞の「間違い」がどういうものかを一般の人が理解しようと思ったら、英語圏の人よりも日本人のほうがまだ理解できると私は思います。

例えば、数を数えるときに、「いちの、にーの、さんの、しーの・・・」と数えますね。この「の」は、主格だか属格だか断定することはできません。「つなぎのはたらき」「口調のよさ」程度の意味しかありません。この感覚が、あらゆる助詞について感じられているのが、先に挙げた人たちです。「私は電車でどこそこに行く」と言うだけでも、「は」「で」「に」の使い分けができません。孤立語化した英語では特に、格は単語に内包されているので、間違えること自体が文法違反と見なされます。言語障害者・失語症者と診断される人が欧米語圏で多いのは、そのためです。

スラフォーリアでは、「私んで電車んでどこそこんで行く」と言うことが許され、これは無理に現代日本語に訳すと、「具我を持つ私という人間によって、まるで生きているかのようにその私に感じられる電車という乗り物が使われ、それでどこそこという素晴らしい場所に行くんだ。」となります。先の人たちがこれを英語に訳すと、「Me train somewhere go.」「I go somewhere train.」などとなります。英語圏の幼児では、このような間違いは、ほとんど 3 歳頃までには終わるようです。

似ているようで、やはり違う、ロジバンとスラフォーリア

公開: 06/27/2009 23:55:06

【ロジバン】

●lo nanmu ba'o klama
（であるもの、男、完了、着）→（男が着いた。）
●lo nanmu lo nanla pu viska
（であるもの、男、であるもの、少年、過去、見）→（男が少年を見た。）

これに該当するスラフォーリア文を、意格を使って書いてみます。

【スラフォーリア】（「トラヲ」は「男」の意のスラフォーリア固有語。）

●Torawo tuki a tan.（絶対格）
（男-　着きあたん。）
●Torawo-nga | shonen- | mi-a-ta.（意格・絶対格）
（男-んが　少年-　見あた。）

可能なところは漢字にしてみます。

ロ●「lo 男 ba'o 着」
ス●「男 着 i a tan」（「着き」は、「つ」＋「き」ではなく「tuk」＋「i」）

ロ●「lo 男 lo 少年 pu 見」
ス●「男 nga 少年 見 a ta」

「男」が意格「nga」で標識されているので、これらの文に出てくる「い」「あ」「たん」「た」は、「意我」という「舞台」で展開される世界認識であることになります。例えば、「たん」は、助動詞には珍しいスラフォーリア固有語ですが、現代の「た」と古語の「たり」の間のニュアンスです。二文目の「あ」も、「意我の“あ”」です。分かりやすくするため、後者は漢字以外の部分に「nga」を付けて、二文とも並べ替えてみます。例えば、「nga-ta」は、「意我が自覚する過去のニュアンス」です。

「lo」「男」「ba'o」「着」
「φ」「男」「tan」「着」「i」「a」

「lo」「男」「lo」「少年」「pu」「見」
「nga」「男」「φ」「少年」「nga-ta」「見」「nga-a」

このように、整然とした対応が生まれます。

両動作ないし状態が（あるいは全ての動作・思惟活動）が、人類史上、あるいは幼児期の言語習得過程上、いつ身に付いたかをロジバンは指定しませんが、逆に言えば、ロジバンが今後、それらがいつ身に付いたかという視点を加味していくとしても、文法が変わることがないということが、ロジバンの強みでしょう。

一方、スラフォーリア（ここでは意我）では、「着」という単純動作をする自己意識は絶対格、「見」という意志的動作をする自己意識は意我、というように、ニュアンスが変化します。つまり、「前者の lo＝φ」、「後者の lo＝nga」となります。多くの言語で、「着く」「転ぶ」「落ちる」といった単純動作をする主体よりも、「見る」「触る」「押す」といった意志的動作（つまり、自我と他我が比較的早い時期から意識される動作）をする主体のほうに、時代的に先に絶対格以外の「格」が付く傾向があります。

「ba'o＝tan」（完了・完成）、「pu＝nga-ta」（過去）については、きれいに対応できると思います。

残る「i」や「a」も見てみます。スラフォーリアの文法用語でも、「i」は「動詞の活用」、「a」は「言（げん）」と分けて呼んでいますが、今のように整理してみると、両者が根底を同じくする要素であることが分かります。このことは今日、stamona 様から BBS にいただいた質問への回答と同じことだと言えます。

スラフォーリアでは、日本語の「読み」や「読ま」の違い（動詞の活用）は、極端に言えば「木（き）」や「木（こ）の葉」の違い、「目（め）」と「眼（ま・なこ）」の違い（名詞の母音交替）と同じであると見なします。見なすと言っても、これに近い説を唱えた言語学者は、過去にけっこういますし、もしかしてこれが日本語の本性ではなかろうかと私も考えています。

前回挙げた共感覚かつアスペルガー症候群の女性の例文に、

「電車あ乗るあとき、切符あの買い方んのよく分からないんいふ症状出るんありひりす。（擬人希我文）」

というのがありましたが、

「でんしゃあ」→「でんしゃー」
「のるあとき」→「のるぁーとき」
「きっぷあ」→「きっぱー」

となるのも、「電車というモノに乗るというコトをするとき、切符というモノの買い方・んの（希格）・・・」という「主客未分離の自己意識から客観的事態を抽出する」ための母音交替であると言えます。これによって、この女性は僕に対して、「社会生活の中で、どういう動作に苦悩を覚えるか」を表明できています。

希我言の「あ」と能格言の「あ」は、ニュアンスが違います。このことは、主体の「私」や「男」に付く格によって宣言されています。電車の例文も、冒頭等に「私んの」とあれば、その後は「電車・んの・あ・乗る・んの・あ・・・」としなくても「あ」だけを付していけばよいです。

私の研究の被験者でない方においても、共感覚や自閉症の程度が重度になればなるほど、現代日本語よりもスラフォーリアが本能的に理解できると言う驚くべき人がいることから、スラフォーリアがかなりヒトの成長過程を忠実に写し取れているということは、言ってよいのだろうと思います。

スラフォーリアでは、今のところ、18 の格詞と 3 つの言の組み合わせによって、自己意識の共時的・通時的位置を 54 通りに言い分けることができますが、言を増やしすぎると、我々の母語は現代日本語ですから、重度の共感覚者・自閉症者が接語を覚えきれなくなります。もし増やすとすれば、「動詞の活用・言は、母音交替である」という先の信念に従うことになりますから、「か」や「さ」といった子音始まりの接語ではなく、「う」や乙類の「い」「え」「お」、つまり奈良時代までには存在したとされる三つの乙類母音を設けて、スラフォーリアの母音を八つとするつもりです。

しかし、ようやく日本語が初めて（『万葉集』や『古事記』や『日本書紀』として）記述された頃には、すでに母音は乙類が消滅して五つに収斂しつつあったわけで（『古事記』あたりは、もはや怪しい）、今の重度の共感覚者・自閉症者も、そこまで世界認識がさかのぼる人は、実際は言語活動自体が成り立たない人がほとんどで、そうでない人でも、今の三つの言「ん」「い」「あ」がちょうど心地良いようです。

「机の上に本がある」「B の上に A がある」

公開: 06/29/2009 23:20:26

メインブログのほうで、言語の話にもつながる話を載せました。興味のある方はご覧下さい。共感覚の話が入っていますが、読めると思います。

http://ij-art-music.sblo.jp/article/30044912.html

このような事態は、スラフォーリアでは何とか収拾できてしまう。名詞を自由に作っても、

文法は一切変化しないようにできている。

もちろん、最初から、こういった方々とお話する中で、ご本人たちの認識世界を忠実に再現する言語として、どういった文法が心地良いと感じてくれるかを判断しながら作った言語だから、収拾できるのは当然かもしれないけれども。

余談だが、例えば、日本語の「唇」と英語の「lip」を見るだけでも、領域が全く違う。口ひげは「lip」に生えるわけだし、鼻の下の窪んだ部分も「lip」だが、両方とも「唇」ではない。

「唇」と「lip」の違いと、先の女性の「本、机」と「A、B」の違いは、本質的には同じことだと思う。しかし、前者が「民族・文化の違い」で、後者が「障害者」「知能遅滞者」であるという前提に立って生きているのが、我々先進国の人間なのだろう。これとは異質な考え方、つまり「それらは長い人類史、幼児の成長過程の中で見れば、同じ現象である」という考え方をしてしまう点が、スラフォーリアの特徴と言えるのかもしれない。

多岐亡羊

公開: 07/08/2009 23:54:59

私のサイトはあまりにも話題が広すぎるので、
サイトのメインの BBS は、こちらの言語の話題とは関係のない共感覚の話題専用にします。

そして、言語専用の BBS をこちらに設けようかと検討中です。

もう少し時間ができたら、考えます。

私の著書が出版されました

公開: 09/14/2009 22:05:10

このたび、共感覚と日本文化・日本語に関する私の著書が PHP 新書より出版されました。言語学の分野にも関連のある内容となっています。ぜひ多くの方に読んでいただければ嬉しく思います。

『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』
岩崎純一
PHP 新書　　発売日 2009 年 09 月 15 日　　756 円 （本体価格 720 円）
※店頭に並ぶのは、およそ 2 日後です。
ISBN 978-4-569-77109-0

決して入門書という分類には入らない本になっておりますが、内容そのものに共感して下さる方が増えれば嬉しく思います。文学でも科学書でもない、教養書とでも言うべきものになっています。

（PHP の紹介より）
本書では、当事者の視点から、共感覚とはどういうものなのかを解説する。さらに、古語や和歌の考察などを通して、日本文化の原風景が共感覚的であったことを明らかにする。本来、人間の基本的な感覚であったはずの共感覚とともに、現代人は何を失ってしまったのか。

スラフォーリアは数年をかけて整理中です。

公開: 12/19/2009 22:40:53

本の出版以来、共感覚関連のことで忙しく（講演など）、なかなかスラフォーリアのことまで手が回りませんが、その間にも共感覚者・解離性障害者・自閉症者・性的被害者などと交流していますので、文法など今後数年をかけて整えていく予定です。

http://ij-art-music.sblo.jp/article/34289710.html
（最近の言語関係の記事。「日本語に人称代名詞は存在しない」というのは、色々な言語学者がすでに唱えていることですが、本当にそうであるという話。）

スラフォーリアの根本思想（３）

公開: 12/20/2009 00:54:55

私（岩崎純一）自身の有する心理学的・神経学的・精神医学的な知覚・精神様態である共感覚と離人症（解離性障害の一分類）を含む各種の解離性障害、神経症、その他の性的・暴力的被害による精神疾患などに陥った日本人、アスペルガー症候群・自閉症の日本人のうち、現代日本語の発語に支障を被った人について、文法理解のうちどれを失ったかを逆算し、失った部分にのみ新たな単語と文法とを設けて、その言語学的試み全体を「スラフォーリア」と呼称し、現代日本語で誤りとされる文法を許容する状態を作り出す。
このとき、音節が必ず母音で終始する日本語及びポリネシア諸語など環太平洋地域の音韻を基層とし、さらに、過去の神経科学の歴史において非日本人型の言語脳を持つことが判明している印欧語族、及び朝鮮語に至る北方アルタイ語の音韻組織からは必ず外れるように留意する。
（いったん子音と母音とを区別する西洋型の言語脳に移行した場合、実際に被害前・疾患前の母語としての現代日本語に復帰できない可能性が神経科学的に判明しているため。）

現在判明していることは以下の通り。
●精神医学的な解離を重度に引き起こしている日本の性的被害者女性には、スラフォーリアが自然に感じられ、現代日本語が次に自然であり、英語が最も理解できていない。主格言語を放棄して、能格言語化した現代日本語を話す。
●先天盲の人は、世界中どこでも、日本・ポリネシア型、母音重視型の言語脳を持つ。
●解離性障害を持つ日本人は、子音言語・英語の聴取が困難である。
●アスペルガー症候群、初期の統合失調症、解離性障害の三者は、臨床的に見ても、脳の構造を調べても、極めて似ている（同症状の異名である）可能性についての説が、日本の専門家の中からすでに出ている。
●アメリカ精神医学会は、DSM-Ⅳにおいてこれらを機械的に分類している。世界保健機関（WHO）は、解離性障害の一つである離人症を、統合失調症に近いものと見なして ICD-10 の別枠に分類している。
●現実の共感覚者･解離性障害者の日本人の知覚世界は､DSM-Ⅳとも ICD-10 とも違って、やはり日本の一部の専門家の説を暗に支持している。
●重大な共感覚と解離性障害に陥った女性や性的被害を負った女性などにおいて、述語論理の各記号・規則への理解が失われるのは同時ではない。（述語論理への理解が共時的に成立するのは、一般健常者の脳においてのみであって、ある規則が理解できていながらある別の規則が理解できていない脳の様態が見られる。）

これを現存する日本語で言えば、例えば、「ＡとＢ」なる文法が理解できて「ＡかＢ」なる文法が理解できていない性的被害者女性がいる。スラフォーリアにおいては、「自分がどの通時的な位置にいるか」は、自我領域を表す燈詞によって宣言されなければならない。
●特に離人症性障害では、いかに重度であっても現実検討能力が比較的維持されることが知られる。例えば、自我と身体とが一致せず、自我だけが他者の身体に移動したように感じられる場合でも、実際の自分の身体の範囲は了解している。あるいは、「ＡかＢ」なる文法が理解できなくとも、それが理解できないという自分を理解している。現代日本語が話せずにスラフォーリアは理解できることを了解している自己が、どうしてこれらの日本人に生じているかを検証する。
●性的被害によって解離性障害に陥った日本人女性の言語認識は、もとより器質的・遺伝的な問題とされる自閉症者の言語認識に同一である可能性がある。これが正しいかどうかの検証をスラフォーリアでも試みる。
●重大な共感覚と解離性障害に陥った女性や性的被害を負った女性は特に、平安時代の一般日本人女性や現代日本の地方の方言と同じ文法を示す。頻繁に見られる特徴の例は以下の通り。
★「を」の脱落。（私は髪とく。）
★中動態の使用範囲の著しい拡張。
http://ij-art-music.sblo.jp/article/34289710.html
★「と」の脱落。（あなたがこの本ほしい言う。）

●文法ではなく、色彩認識の方面からの検証は、拙著『音に色が見える世界　「共感覚」とは何か』（岩崎純一　PHP 新書）に述べた。
●スラフォーリアが理解できるのは、９割以上が女性であり、これは女性の数が共感覚者の８割、あらゆる解離性障害の７～９割以上を占めるデータに一致する。また、スラフォーリア理解者の男性は、ほとんどが重度の言語障害・自閉症に含まれると推定される。

あらゆる言語学的・心理学的・神経科学的・医学的見地に反しないように文法を構築し、最終的に、スラフォーリアを放棄させるか、知的な遊戯として残る程度にし、母語であるもとの現代日本語に完全に復帰できるように留意する。

スラフォーリアは整理中です（2009 年 12 月）

公開: 12/21/2009 23:23:01

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_to.pdf

『岩崎純一全集』第八十七巻「芸術、文化、言語、文学（二の七）」

（燈詞の変化表　2009/12 更新）

http://www.ij-art-music.com/ronbun_ippan/sura_rei.pdf
（体験談の寄せ集め）

http://ij-sura-foria.sblo.jp/article/34328523.html
（スラフォーリアの根本思想（３）を追加しました。）